

---

# やさしい音が聴こえる

徳次郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

やさしい音が聴こえる

### 【Nコード】

N5670F

### 【作者名】

徳次郎

### 【あらすじ】

生まれた時から聴覚に障害を持つ尚美は、中学に入って一般生徒と一緒に勉強する事になった。入学していきなり転校して来た茶髪男はクラスですっかり浮いている。しかし彼は尚美に手話で話しかけた…。  
ちよっと変わった作品が読んでみたい方は、お試しください。

## 【プロローグ】（前書き）

消去法から恋愛ジャンルにいたしました。

最近流行のラブラブ系でもコメディー系でもありません…。

ちよつと違う物が読みたい方は、お試し下さい。

## 【プロローグ】

「耳なし女」 心無い小学生が悪戯に呼ぶその言葉に、彼女は酷く傷ついた。

小学校3年の夏休みに唇を読む訓練を始めた。そして、夏休みが終わってその言葉を知った。自分をそんな風と呼ぶ連中を恨めしくも思った。周囲の言葉が解るといふのは、そう言う事なのだ。

耳、あるもん。

彼女は心の中で呟き、決してその呼び名に応える事は無かった。

小学生の頃は、特別学級に入れられていた。同じ学年の子供たちと一緒に勉強する事が困難だと決め付けられていたのだ。

聴覚に障害を持っているだけで、知能に問題はなかった。

それでも小学校側では、他のみんなとのコミュニケーションをさり気なく拒んでいた。

校庭で遊ぶ大勢の生徒とは、透明な壁で何時も隔たりがあつて、友達はできなかった。

学年の違うごく少数のクラスメイトが、唯一の戯れの相手であった。

中学には特別教室はない。

両親は入学前の中学校へ呼び出されて訊かれた。

「お嬢さんが勉強できる環境が、ここにはないのです。もっと環境のいい学校へ行かれてはどうでしょうか？」

環境のいい学校とは 何処のことを言っているのか、両親には

察しがついた。

電車とバスを乗り継いで少し離れてはいるが、市内に養護施設学校がある。

「ウチの娘は耳に障害があるだけで、勉強は普通に出来ます」

母親は少し荒い口調で言った。

椅子から立ち上がる勢いだ。

父親は黙ってそれを見ていた。

「しかしですね……授業を聞き取れないのでは勉強にならないのでは？」

校長と教頭が並んで座り、終始話すのは教頭の方だった。

どす黒い顔にぎよろりとした目が、黒縁メガネの奥で微かに愛想笑いを浮かべている。

母親には、それが蔑んだ笑みに見えるのだ。

「尚美は全く聞こえない訳じゃないんです。それに、読み書きも普通に出来るし唇が読めるんですよ」

「先生は、他人の唇が読めますか？」

父親は静かな口調で言った。

「い、いい……」

教頭は押し黙って、口をへの字に曲げる。

応接室に沈黙が流れた。

「いいでしょう」

ずっと黙って成り行きを覗いていた校長が口を開いた。

目の前のお茶を一口すすって

「お嬢様は障害者というハンディを背負いながら、人に負けない能力があるようですね」

校長は小気味に笑うと

「ただ……小学校の基礎テストだけ、受けていただけですか？」

愛想よく、訪問販売の営業マンのような笑顔と口調だった。

「そうですね。いくら唇が読めても、学力がある程度ないと、みんなについて行けませんし……」

教頭は校長の顔色を覗うように上目遣いで笑う。

口元にシワを寄せ、疲れた笑だ。

「構いませんよ」

母親が口を開く前に、父親が静かに言った。

「ろう者は、聞くこと意外は何でもできる……」

応接室を出る時、父親が教頭に向かって呟いた。

「何ですか？ それは……」

教頭は分けが判らずに戸惑いの笑みを浮かべる。

「アーヴィング・キング・ジョーダンの言った有名な言葉だよ」

校長が横で呟いた。

## 【1】ギリギリ。

強い風が吹いていた。

窓から見える雲は、追いついてられるように何処かへ流れてゆく。

しかし、草花の芽生える甘い匂いをほんのりと含んだ暖かい春の風だ。

尚美は真新しい制服に身を包むと、鏡の前に立つ。

白い壁に掛けられた、ミッフィーの絵柄のついた鏡。

バストUPで映るそれは、下の方はミッフィーの絵柄であまり姿が映らない。

自分では小学校の姿となんら変わらないように見えるが、白いブラウスと濃紺のブレザーが身を引き締める。

身長も、この半年で10センチも伸びた。

けど…… やつと150センチを越えた所だった。

両手で頬を摩った。

本当はパチンと叩こうかと思ったけれど、それほどの気合を入れる事もないなあ。なんて思ってしまったのだ。

入学前に校長先生が言った『試験』は見事に合格だった。

それどころか、小学6年生までの国語、理科、どれも90点以上で算数に限っては100点満点の成績だったのだ。

基礎学習とはいえ、ここまで点数をとれる生徒がどれだけいるだろうか。

「胸を張っていればいい」

父親は優しい声で言った。

尚美はその口調で父の優しさを読み取ることが出来るのだった。

「ナオ。早く朝ごはん食べなさい」

母親は二階に通じるインターホンを鳴らして、そう言った。

尚美は聴覚に障害を持っている。

しかし全く聞こえないわけではなくて、微かに音を感じる事はできるのだ。

例えば近くで電話がなれば、何かの音として認識する。ただ、それが電話の音なのか、トラックのエンジン音なのか聞き分ける事はできない。

全てが粗雑なノイズとなつて彼女の中耳に届くだけだ。部屋に通じるインターホンはランプが点灯する。

それで、階下で人が呼んでいることを彼女は認識できる。だから尚美は音が聞こえたらまず、視線を周囲に巡らせる。視覚で見て、聞こえるノイズが何の音が判断するのだ。

彼女は新しい学生カバンを掴むと、小走りに部屋を出た。廊下を出た所で姉の志美ゆきみにぶつかりそうになる。

「危ないなあ。うかれて交通事故はかんべんだよ」

志美はそう言つて笑つと「ほら、リボン曲がつてるよ」

尚美の衿からぶら下がる小さな目のリボンを指で整えた。

『サンキュー』

手話で手早く告げて、尚美は階段を駆け下りる。

入学式が終わつてクラス分けされた教室は、雑踏に満ちていた。誰が何を話しているかは聞こえないけれど、ざわついた喧騒は確かに感じる。

耳に届くノイズより、それは室内を満たす空気感とでもいうのだろうか。

尚美は出席番号順に並んだ自分の席について、辺りを覗く。織堂の苗字は窓際が一番後ろの席順だった。

隣の席に三人でたむろしている女子は、隣の小学校から来た娘たちだった。

この中学は、2つの小学校が統合する形で進学してくる。地域によっては、さらに2つの学校から一部の生徒が通ってくる



のだ。

しかし、もともと顔見知りが少ない尚美にとって、特に抵抗を感じる事はない。

「ねえ、昨日のスマスマ観た？」

「稲垣いい味出してるよね」

尚美は忙しなく動く周囲の唇に視線を巡らす。

読み難い彼女たちの唇を読む。

話しに加わりたけれど、止めておこう……。

尚美は声を出す事ができる。

普通の発声も練習したし、言葉も話せる。

コンピュータの画面で舌や唇の動きを立体に見ながら練習する方法で覚えた。

しかし、どうしても自分の声を自分で聞き取る能力が欠けているから、たどたどしい発声になるのだ。

だから彼女は、あまり誰かと話すのは得意ではない。

「ねえ、あなた陽小でしょ？」

後から肩を掴まれた。

陽小……尚美が6年間通った陽鳳ようほう小学校の略名だ。

慌てて振り返った。

尚美は言葉を出そうと口を開いたが、それを喉の奥に仕舞い込む。微かに声は聞き取れたが、彼女が何を言ったか解らない。

後から声をかけられると、尚美は唇を読む事もできないので一番難儀するのだ。

「あたし、何度か見かけたよ」

肩に掛からない中学生らしい黒髪の娘が、愛想よく笑っていた。今度は何を言ったのか尚美にも解った。

少し高い彼女の声も、尚美には周囲の雑音とさほど変わらない音に聞こえる。

とりあえず笑顔を返して、2度3度頷く。

「あたし、藤本友恵。同じクラスになった事はないよね」

尚美は再び頷く。

言葉が出ないかわりに、手が微かに動いた。

咄嗟に手話が出そうになる。

でも、中学生の健常者で手話のできる娘なんていないはずない。そう思つて、動きそうな右手にブレーキをかける。

その時、友恵も後から誰かに肩を掴まれて、そのまま後に引つ張られた。

「バカ。あの娘、特級の娘だよ」

長い黒髪を揺らして、スラリと背の高い娘が言う。

短めのスカートから覗いた足が、竹のように細い。

でも、なんだかモデルのような体型だった。

「特級？」友恵は聞き返した。

「特別学級だよ」

「うそ……」

「あたし、見た事あるもん」

「だって、普通じゃん」

「ギリギリなんじゃないの？」

尚美は彼女達の唇を読んで、自分の笑顔が消えるのを感じた。

「ギリギリって？」

「頭の中が」

髪の高い娘は、冷ややかに笑った。

黒々とした長い睫毛が、誇らしげに瞬きする。

特別学級は、確かに障害の為に学力的に難しい生徒もいた。

しかし、病気で身体の弱い娘もいた。

転校して行った敏子さとしというひとつ学年が上の娘は、入退院が多くて授業についていけない為に、特別学級にいた。

普通の生徒と一緒にいられない子供たちが一緒に詰め込まれるのが、なかよし学級と呼ばれる特別学級だった。

健常者から隔離されて、社会性に欠ける異端児たちは離れ小島の

ような別棟に在る小さな教室に押し込められた。

実際の学年がバラバラだから、運動会や遠足の行事には臨時に同じ学年に加わる。

しかし溶け込めるわけが無い。

何時も担当教員に付き添われた。

同じ学年の子供と一緒に遊ぶ時間の猶予は与えられなかった。

いじめられるとかわいそう。

他の子供たちについていけないと、大きなストレスを生む要因になる……。

大人たちはそう言っ、分け隔てを当たり前に思っていた。

差別しないように差別する。

その矛盾こそが、尚美を6年間に渡って苦悩の呪縛の渦に留めた。

【1】ギリギリ。（後書き）

アーヴィング・キング・ジョーダン（Irving King Jordan）は、1988年3月13日に選出されたギャローデット大学の8代目学長である。

ギャローデット大学卒業で、ギャローデット大学初めての聴覚障害者の学長（中途失聴者）である。

## 【2】困惑の眼差し

教室に入って来た担任教師は、ゆっくりと自分の名前を黒板に書いた。

七瀬美智子。

ベージュのパンツスーツに黒髪を後ろで束ねてバレッタで留めている。

足元は白い運動靴だ。

女性らしく、教師らしい質素な出で立ちだ。

まだ20代であろう女性教師は、ゆっくりと喋る。

その唇は、尚美にとってとても読み易いものだった。

「今35人ですが、明日もう一人みんなの仲間が増えます」

教師はそう言って、笑った。

「入学式には間に合わなかったみたい」

教室がドツと沸く。

「新入学なのに、どうして転校生なんですかあ？」

長い黒髪の娘が言った。

一番後ろの席にいる尚美には言葉は読めなかった。

「本当は他の中学に手続きしていて、それで急遽この町に越してくる事になったの」

七瀬微かに笑って周囲を見渡す。

「だから、手続き上は転校になるのよ」

ふと気付くと、友恵が尚美を見ていた。

笑うでもなく、限りなく無表情な眼差しだった。

でも、尚美は先生の唇を読まなくていけないから、直ぐに視線を教師に戻す。

好奇の眼差しだろうか……。

ギリギリの知能だと思われるのだろうか……？

尚美は担任の話す言葉を読みながら、遺憾いかんな思いに駆られるのを

感じていた。

「どうだった？ 学校」

家に帰ると、母親が買い物から帰った所だった。  
冷蔵庫に食材を詰め込みながら、尚美を見ている。

「解んない」

尚美は短く応える。

家族の前では、トーンがおかしくても気にならない。  
言葉と言葉で会話が出来るのは、今のところ家族だけだ。

母親も父親も、そして姉の志美も手話ができる。

尚美が発音の勉強をする前は、ずっと手話で会話してきたが、今ではできるだけ声を発してコミュニケーションをとっている。

そうは言っても、急いでいるとついつい手話の方が速かったりする。

母親はなかなか手話を覚えられずに苦労した。

仕事人間の夫は以外に呑み込みが早く、姉の志美はあつと言う間に尚美と会話を堪能していた。

娘の為なのに……。

母親は親として不甲斐無い自分に、初めてジレンマを感じるほどだった。

そんな彼女も今ではボランティアで手話教室の講師をし、点字図書なども手掛けている。

「なによ、解んないって。友達できそう？」

「解んない」

尚美は再び応える。

投げやりではない。本当に判らないのだ。

みんながこれから自分にどう接してくるか、1日だけでは解らない。

彼女は曖昧な笑みを浮かべて  
「でも、大丈夫だよ。心配ないよ」  
途切れ途切れにそう言った。

蒼い虚空を滑るように、白い雲が流れてゆく。  
登校途中の遊歩道には桜並木が植えられている。  
風で散った花びらは、陽光に照らされて白い吹き溜まりになっていた。

不規則な風が吹くたびに、白色の花びらが地表に舞う。

「てめえ、ふざけんなよ」

路地の奥から声が聞こえた。

いや、尚美にはただの雑音にしか聞き取れない。

彼女は周囲に視線を巡らせて、気配を感じる路地を覗き込んだだけだ。

住宅街の狭間。

コンクリートのどぶ川の続く狭い路地に、学生服の集団が誰かを  
囲んでいる。

囲まれている一人も、学生服だ。

喧嘩かしら？

尚美は立ち止まって、成り行きを見ていた。

おそらく自分の通う中学の生徒だろう。一人を囲んでいる集団は、  
体つきからして上級生だ。

囲まれている一人は……少し小柄で、しかし髪の毛を茶色に染めて  
いる。

「一年のくせに、なんだよその髪」

集団の一人の唇が読めた。

言葉を発した上級生が、小柄な少年の茶色い頭髮に手を伸ばす。

髪のを掴む動作だろう。

しかし、茶髪の少年は自分の髪のに触れさせはしなかった。  
あつと言つ間に、拳を突き出したのだ。

「あつ！」

尚美は息を呑み込んで思わず声が出た。

しかし、集団には届かない。

彼が突き出した拳を皮切りに、一気に揉み合いになる。5対1だった。

茶髪の少年は身体をクルリとひねって、パンチを繰り出した。

集団の一人が再び後に倒れこんだ。

「ふざけんなよ！」

「ふざけてんのは、そっちだろ」

雑音が飛び交う。

時折読める言葉は、いかにも乱暴でガサツなものだ。

体つきの大きな上級生と、茶髪少年が制服の襟首をつかみ合った  
まま、身体をぶつけ前後に揺さぶり合っていた。

他の連中は恐怖が沸き起こっているのか、躊躇して手を出さずにいる。

少年の素早いパンチを警戒してるのだろう。

もみ合いの中、どぶ川の低いフェンスに茶髪少年の身体が押し付けられた。

「先生っ！」

尚美は声を発していた。

なんともスットンキョーな声色が路地に響く。

多勢に無勢……無意識に少年に加勢していた。

それに気付いた上級生の集団は、バタバタと路地を向こう側へ走り抜けて消えた。

茶髪の少年が尚美を見ている。

背中に冷たい電気が走るような鋭い視線。



傍に建つアパートの日陰の中で、小さく眼光が光ったように思えた。

路地から微かに冷たい風が吹き抜ける気がした。

彼女は狼の瞳にでも魅入られたような気がして、慌てて視線を逸らし路地から離れた。

### 【3】誹謗

「尚美ちゃん」

後から誰かが声をかけてきたが、彼女は気付かなかった。  
ポンツと肩に触れられて、ビククリして振り返る。

「あつ」

ビククリして声が出た。

「怖かったね。喧嘩」

藤本友恵だった。

彼女もさっきの喧嘩を見ていたのだ。

「でもさ、あの1年の茶髪だれだろうね」

声を出したいけれど、尚美は躊躇して笑顔を零す。  
小首を傾げるだけで応えた。

「尚美ちゃんって、けっこう無口？」

フツツと笑う。

友恵に悪気はないだろう。

その屈託無い笑顔が、それを物語っていた。

尚美は少し困ったような笑みを友恵に送って、肯定も否定もしなかった。

「あれ、1年生だよな。きつと」

友恵は尚美の仕草をさほど気にする様子も無く話し続ける。

「でも、あんなヤツいたかなあ。昨日は1年生の中に茶髪なんていなかったよね」

1年生……やっぱりそうなのかな。そう言えば、あんな茶髪いたっけか？

「あつ、でも、入学式だけ良い子ちゃんだったのかもね。それで3年生に掴まったのかなあ」

少しふつくらとした笑顔が、春の優しい陽射しを浴びていた。

尚美は、ちよっとお喋りだけれど自分にこんなに話しかけてくれ

る友恵に好感を抱いた。

笑顔で彼女の言葉に頷きながら、校門と一緒に潜って教室まで行った。

それだけで、なんだか胸が躍る。

教室へ入ると、一瞬尚美を見るみんなの視線が刺さった。

そして、その視線はあつと言う間に散り散りになって宙をさ迷う。

「友恵ちよつと」

昨日の髪の長い娘が、友恵の腕を引っ張って自分の輪の中に引き寄せる。

「あの娘、耳が聞こえないんだってよ」

ヒソヒソ声ではなかった。

確かに尚美には言葉は聞こえない。

しかし、彼女の唇はしっかりと読めた。

友恵は一瞬尚美を振り返る。

少し困った笑みを見せた。

何を困っているのか……どうして急にそんな笑顔になるのか。

さっきまでのふつくらとした優しい笑顔は、どこかに消えていた。

髪の長いほっそりとした娘が、川田真穂という名だと知った。

彼女は聴覚の不自由な尚美を、別の生き物のように見た。

そして、だれかれ構わずその事を話題に友達の輪を広げて行った。

差別的な視線が教室の中で終始、何処からか注がれてくる。

「耳が聞こえなくて、授業受けられるの？　ねえ、それって無くない？」

「耳が聞こえないって事は、言葉が話せないんだよね。あたし、前にテレビで観たよ」

「あれじゃあ、先生が何を言っても聞こえないじゃん。勉強なんて

「できんの？」

「ていうか、誰か手話できる？　どうやって彼女とコミュニケーションとるの？」

聞こえなくても見えるもん。何を話してるか、解るもん。

尚美は自分の席について周囲を見渡していたが、何時の間にか俯いてしまい誰の唇も読まなくなった。

唇をぎゅっと嚙んで、ただ机の木目を見つめていた。

自分を中傷する言葉を読むのが辛かった。

それは声で聞くよりもずっと。

周囲の雑踏が、文字通りただの雑音として中耳の奥に微かに届くだけだった。

担任教師はあえて尚美の障害の事をクラスに伝えてはいなかった。それは差別しないという現われなのだろうが、それが逆にクラスに差別の視線、珍しいものを見て哀れむような慈悲の視線を作り出してしまった。

「でも、普通に話してる事は解るんじゃないかな」

友恵が真穂に言う。

「なんで解んのよ。聞こえないのに」

「ううん……なんとなく」

友恵は困惑しながらも、再びふつくらとした笑みを見せる。

「ねえ」

尚美の方を振り返った。

彼女はその気配と視線を感じて顔を上げる。

真穂たちのグループが全員視線を向けていた。

「話してる事、わかる？」

友恵は少しゆっくりと言う。

尚美はコクリと頷いた。

「適当な当てずっぽうでしょ。雰囲気とか、表情とか」

真穂がそう言って笑いながら

「まさか、テレパシーで心読んでたりして」

「それウケルウ。ていうか、超怖くない」  
誰かが言った。

周囲がドツと笑う。

バカじゃないの。

尚美は再び困ったように笑っただけだ。

## 【4】帰り道

転校生は来なかった。

今日来るはずと言っていた転校生は、学校へ来なかったらしい。帰りのホームルームで、そう担任の七瀬がクラスのみんなに伝えた。

そして放課後、尚美は職員室へ呼ばれる。

1年生の昇降口からは帰りの雑踏が響いて、彼女はそれを背に職員室のドアをノックした。

「ちよつとお願いがあるのよ」

七瀬は机の前で事務用の椅子をクルリと廻して尚美の方を向いた。彼女に唇が読みやすいように、七瀬は必ず授業中でも尚美の視界に顔を留める。

「館内君の家に行つて見てくれないかしら？」

尚美は困惑の眼差しを担任へ向ける。

館内なんてクラスにいたっけか？

「転校生の館内君よ」

「て、転校生、の？」

短く声を発した。

思わず声が出たが、何となく彼女になら声を聞かれてもいいと思つたのかもしれない。

七瀬はホツとしたような安堵の笑みを浮かべると

「やっぱり喋れるのね。ご両親からは聞いてたけど」

「でも、自分の声も、よく、聞こえません」

「大丈夫。ちゃんと喋れてるわ」

尚美は頬を紅潮させて、少し俯いた。

「電話が繋がらなくてね。行つて見てくれる？」

転校生の家だ。

「本来なら学級委員の仕事なんだろうけど、ほら、まだそうゆう役

割が決まっていないな」

七瀬は苦笑しながら、一瞬辺りを見る。

尚美も窓の外を見た。

グラウンドでは2、3年生たちが部活動の準備を始めている。

まだ高い西日が、職員室前の赤松を黄色く照らしていた。

「どうかしら？」

七瀬が尚美の手にポンと触れる。

どうして自分が行くのだろうと疑問も湧いたが、誰かに何かを頼まれるのは自分の存在感が明確になるようで嬉しかった。

「はい」

尚美は七瀬の方を向くと、小さく声に出して頷いた。

職員室を出て教室へ戻ると、もう誰も残っていなかった。

1年生はまだ放課後は部活を選ぶ時間だし、入る気のない連中はさっさと下校している。

独り昇降口へ行くと、友恵が下駄箱で靴を履いていた。

尚美は思わず真穂の姿を探すが、一緒ではないようだ。

「いま帰り？」

尚美の姿に気付いた友恵は、朝と同じように普通に話しかけてくる。

声をだそうか……。

しかし、尚美はコクリと頷いただけだった。

それでも友恵はふつくらとした笑顔を崩すことなく

「じゃあ、一緒に帰ろう」

尚美は再び頷く。

教室では仲のよさそうな真穂や他の連中とは帰らないのだろうか？

尚美は友恵の笑顔に見つめられながら靴を履き替える。

「頷くって事は、やっぱり聞こえるんだよね？」

昇降口を出ると、友恵が言った。

会話が成立する事に、微かな疑問を感じているらしい。

尚美は小さく小首を振る。

「えっ？ 聞こえてるわけじゃないの？」

もちろん音として認識は出来る。しかし、話してる言葉は聞き取れない。

尚美は一度逡巡するが、決意したように小さく声を出す。

「唇が……読めるの」

友恵は元々少し大きめの目をパチクリと見開いて、一瞬立ち止まった。

「うそ……」

「ホント」

「唇読める人って、本当にいるんだ」

尚美は友恵の大きき驚き具合が妙で、思わず笑ってしまう。

そして、自分の声に対して何も言わず自然に会話が行き来した事が嬉しかった。

この喋り方が、自分を少し頭の弱い娘だと思わせる事もしばしばあるのだ。

たどたどしい喋り。知恵遅れ……そんな偏見が一般の人にはある。でも友恵は尚美の話し方に違和感を見せなかった。

それは些細な事だけれど、彼女にとって心地よい態度だった。

校舎に遮られた日陰を抜けて陽射しの下に出た二人は、正門を抜けて歩道に出た。

小学生が3人、ランドセルを揺らして元気に駆けて行く。

「じゃあ、もしかして授業中は先生の唇を読んでの？」

尚美は再び頷いて笑う。

友恵はカバンを持ち直すと、クリクリした大きな目を瞬きさせて「すごおい。女スパイみたい」



「へえ、これから転校生の家に行くの」

担任に頼まれ事を言いつけられた話を、尚美は友恵に聞かせた。いや、正確には話すと長いので、ノートの端っこに文字で書いて説明した。

「あたしも、行こうかな」

尚美の驚く顔を見た彼女は

「だって、なんか面白そうじゃん」

春の放課後は心地よい風が吹いていた。

並んだ二人の真新しいスカートが、ふわりと揺れる。

「うわっ」

尚美よりも裾丈の短いスカートを手で押さえながら友恵は

「転校生って、男でしょ？」

尚美は頷いた。

もちろん、担任から名前を聞いている。

「どんな子かな？ イケメンかな？」

好奇心いっぱい問いに、尚美は困惑した笑みで小首をかしげる。風貌までは聞いていない。

それでも下校中のこんな会話が、尚美にはすこぶる楽しく感じた。今まではずっと独りで帰り道を辿っていた。

小学校は家から徒歩10分程度の場所だったが、その10分がやたらと長く感じて、それは6年生になっても変わりはいらなかった。

でも、今は違う。

#### 【4】帰り道（後書き）

お読みいただき有難う御座います。

お話は意外とゆっくり進みますので、よろしくお願いいたします。  
今回作中は、改行を多めにして読み易さを重視しています。

## 【5】雑音の群れ

「ここ？」

二人が足を止めると、友恵が言った。

通学路の国道を横切って運河の橋を渡る。

左へ行くと河口に開けた昔からの住宅街が広がって、右へ曲がると新しい住宅街へ入る。

そこを抜けると新開拓地であるロードサイド型の大型店舗が立ち並ぶような、ここ数年で発展した土地だ。

尚美が小学校へ入ったばかりの頃は、このあたりは全て畑か空き地だった記憶がある。

橋を渡って真っ直ぐ抜けると最寄駅に着くが、周辺の商店街は閉めきったシャッターばかりが目立つ。

住宅街の路地を一本入った角地に、真新しい蒼い屋根の白い家があった。

庭を囲う格子には、棘いばらが絡みついて周囲を敬遠しているようにも見える。

友恵が門扉の横に付いているインターホンのボタンを押した。

まったく躊躇がないのは、彼女の性格なのだろうか。

インターホンのスピーカーからチャイムの音がゆっくりと3回流れる。

しかし、応答する気配は無かった。

「留守かな？」

友恵が振り返った。

尚美が相手の唇を読むと知ってからの彼女は、終始尚美に顔を向けてから喋る。

「うん……」

尚美が曖昧に頷くと、友恵は門扉に手をかけた。

「入ってみる？」

「うん……」

この時も、友恵はまったく躊躇することなく白い門扉を開けた。

「誰だ？」

その声は、二人の背後から聞こえた。

ほぼ同時に、尚美と友恵は振り返る。

そこに立っていたのは、今朝、上級生ともみ合っていた茶髪の少年だった。

路地の日陰で見た時よりも、彼の髪の毛はだいぶ明るい茶色に見える。

ボウス頭が伸びたような少しボサボサで短い前髪はオデコを少しだけ隠していた。

「あの……」

友恵もさすがに言葉が詰った。

彼の今朝の乱闘振りを思い出すと、どれだけ乱暴者なのかと逡巡してしまう。

尚美は紙に書いた転校生の名前を、友恵に見せる。

目で合図する尚美に促されて、友恵は小さく息を飲んでから

「こちら、館内圭吾くんの御宅ですよね」

メモの名前を見た彼女が、棒読みに言う。

「圭吾はオレだけど」

少年の喋りはぶっきら棒だった。

細い眉が少し動いて、眉間に浅いシワがよる。

二重だけど、どこか涼しい切れ長の目はチラチラと二人を見比べている。

上級生に囲まれていた彼は小柄に見えたが、近くで見ると尚美や友恵よりも明らかに背は高い。

圭吾はハッと眉間のシワをとくと

「ああ、もしかして学校の？」

「ええ……はい。私たち南陽中学の者です。こんど同じクラスになるはずで……」

この地域は陽とか鳳とかを付けた地名や学校名が多い。

「それで、なんの用？」

「今日から学校に来る予定なのに、どうして来ないのかなって……」

友恵は担任教師に頼まれた事を、尚美の代わりに説明した。

「気が向いたら、明日行くよ」

圭吾は二人の間を割るようにして通り抜けると、半分開いた門扉を開けた。

「あの……気が向いたらって？」

友恵の問いに圭吾は歩きながら

「気が向いたらって言ったら、気が向いたら。先生によろしく言っ  
といて」

そのまま彼は玄関の扉の中に消えた。

「何あれ？ ツッパリとかってやつ？ 学ラン短かったよね。今時

流行んなくなない？」

友恵が言った。

二人は仕方なく圭吾の家を後にする。

「なんか、クラスで浮きそうだね。あの錆アタマ」

「……」

尚美は黙って笑顔を見せる。

少し困惑し、少し遠慮がちな笑みを、ただ相づちを打つたびに友恵に送った。

クラスで浮いた存在が自分だけではない。

何処かで同類意識を感じる。

でもそれは、彼を自分と照らし合わせる事で、充分に身につまされた。

だから友恵の彼を非難する言葉にも、素直に同意できない。

話題は何時の間にかテレビや洋服の話しに変わって尚美はホッとした。

といつても、相変わらず尚美は聞き役で時折頷きを繰り返す。何となく友恵とのコミュニケーションはそれで充分に感じた。国道まで戻ると、二人は手を振って別れる。

尚美にとって、学校帰りに誰かに向って手を振るのは初めての事だった。

離れてゆく友恵に手を振るだけで気持ちは高揚し、明日からの学校が少しだけ楽しみになった。

家に帰ると、尚美は母親に買い物を頼まれた。

着替えを済ませると、自転車に乗って家を出る。

国道を越えて、再び橋を渡って新しいバイパス通りにできたイオンスーパーに向った。

何台並ぶのか想像がつかないような大型駐車場を自転車で横切る。耳の不自由な尚美にとって、実は自転車はかなり危険な乗り物だ。周囲の音を聞き分けられないと、危険を察知して回避行動が取れない。

だから彼女は、普通の人よりも先を、周囲を覗く事を忘れない。小さい頃から父親、母親に何度も注意されて習慣ついたものだった。

駐輪場に自転車を置くと、尚美は歩道に沿って歩いた。

前方に高校生くらいの男女の集団がいる。

尚美の耳には複数の雑音が聞こえていた。

彼女は後から集団の様子を覗いながら歩く。

5、6人の集団は大きな口を開けて笑ったり叩き合ったりして歩道いっぱいに広がってじゃれ合っていた。

「ふざけんなよ」

「バカじゃん？」

「ヤダ、オサム超笑えるう」

ダラダラと左右に広がる集団は、尚美の行き先をふさいでいた。

早く買い物済ませたい気持ちで、彼女を急かす。

尚美は車道との境目ギリギリに、彼らを追い越そうとした。

控えめに暮らしてきた彼女に、集団の真っ只中を抜ける勇氣はない。

男女の集団は、不必要な大声で叫ぶように会話と笑いを繰り返す。それは、周囲の雑音を巻き込んでざらついたノイズとなり、尚美の中耳に響くのだ。

後からワゴン車が近づいていた。

尚美の耳には大きなノイズの和音が聞こえて、その音の方角を聞き分ける事はできない。

前方の集団が発する大きな雑音に、車の走るノイズは完全にかき消されていた。

彼女は集団を追い越そうと歩道の端に寄った。

集団の外れにいた長髪の男が、何かを叫んで笑いながら尚美の身体にぶつかった。

尚美は咄嗟に歩道からはみ出る形で車道によるける。

後方から来たワゴン車は彼女の直ぐ後ろに迫っていた。

しかし尚美はそれに気付く事は無い。

彼女にぶつかった男は尚美を振り返りもせずにダラダラと歩き続け、仲間の集団も何事も無いように相変わらず不快なノイズを発していた。

尚美は車道に半身を置いたまま集団を見つめ、そのまま歩き出す。後から来たワゴン車はまだヘッドライトを燈してはいなかった。

車のノイズが騒ぎ立てる集団にかき消されても、ヘッドライトの明かりがあれば尚美も自ら気付いたはずだ。

しかし、彼女の視界に車の影は入らない。

集団のノイズが耳障りだった。

そのせいで、尚美は何時もの注意力を無くしていた。

尚美の身体が、車道に大きくはみ出ようとする。

車道を歩くつもりは無いが、歩道に戻る気持ちが多少なりとも失

せたのだろっ。

後方のワゴン車との距離は１メートルを切っていた。  
ワゴン車を運転している若者はカーオーディオの操作に夢中で、  
車道の隅にいる人影には気付かない。

夕暮れの陽射しに伸びた尚美の影が、ワゴン車に触れた。

刹那、彼女は誰かに腕を掴まれて引っ張られる。

「危ねえぞ」

咄嗟に振り返った尚美の直ぐ後ろを、黒いワゴン車がゴツと音を  
立てて通過した。

彼女は自分の腕を掴んで引き寄せた相手を、息を飲みながら見上  
げた。



## 【6】錆アタマ

「あぶねえよ。何やってんだ？」

「あつ……」

「車来てるじゃんか。鈍いやつだな」

尚美はただ、彼のぶつきら棒な口調を読み取る。

錆アタマ……。

緩やかな風に、短い茶色の髪がサラサラと揺れていた。

「あれ？ お前、今日ウチに来たアレか？ クラスメイトってやつ？」

彼は表情を一定に保ったまま、怒ったように喋る。

細い眉は、落書きの似顔絵のようだった。

何かを諭したような切れ長の眼差しが、ジッと尚美を見ていた。

しかし、尚美の耳に届く彼の声のノイズは、何故だか温かみを含んでいた。

彼女の二の腕を掴んだ彼の手から、洋服を通して体温を感じたせいかもしれない。

尚美は彼の口元から目が離せなかった。

「あ……」

ありがとう。

その言葉は出なかった。

何時もそうだ。

ありがとうの言葉さえ、自分の発音や音調を咄嗟に考えて躊躇してしまう。

自分で自分の声が聞こえない事を怨嗟する瞬間でもある。

ふざけあった集団が遠ざかると、ガサツなノイズも遠ざかっていった。

「大丈夫か？ お前」

彼を見上げたまま、呆けた顔の尚美に圭吾は言った。

暖かいノイズは、唇を読まなくても彼の声だと判った。  
優しい音……。

昔、小学5年の頃父親が山へハイキングに連れて行ってくれた。  
朝靄のかかる緑に囲まれた早朝の奥深い森。

遠足で出かけた観光地の山とは全く違っていた。

山々を囲む森の静けさに靡く小鳥の囀り。

沢の流れ。

それは不思議な和音を奏でる。

「どうした？」

周囲をきよろきよろと見渡す尚美に、父が言った。

尚美の耳には、街の雑踏とは違うやさしいメロディーが幾重にも  
なつて耳に入つて来る。

それは森を囲む山全体を包むようで、別世界を感じた。

蒼い空が風に囁いていた。

柔らかな重奏おとの波に、自分が埋もれ行くようにも感じる。

「鳥の声だよ」父が笑う。

彼女が周囲に視線をめぐらす理由を父は読み取っていた。

「鳥？」

尚美は上ずった声でたどたどしく言う。

「この山には野鳥が多く棲んでるから、種類も豊富でいろんな声が  
聞こえる」

尚美は今まで聞いたこと無い優しい音を堪能するだけで、その山  
が好きになった。

幾つにも重なった小さな重奏おとは、フィルターを通したようにクリ  
アで柔らかく、彼女の耳に心地よく響いた。

それは雑音や騒音ではなかった。

山が歌っていた。

そんな音の記憶が、圭吾の声に重なった。

尚美は小さく何度も頷いて、圭吾から一步遠ざかる。

圭吾の手が、彼女の腕から離れた。

「ふざけた奴らだよな。人の事突き飛ばして知らん顔なんてさ」

圭吾は尚美の頭越しに遠ざかる集団を見た。

ぶつきら棒な口調で、眉間にシワを寄せると益々怖い顔になる。

でも、その口から発する音は、やっぱり優しくかった。

尚美も振り返って集団を見るが、直ぐに彼の顔に視線を戻した。

彼の言葉を読み取りそびれないように。

緋色の空が深い藍色に変わり始めると、駐車場に立ち並ぶ幾つもの街灯が一斉に燈を灯した。

それはまるで、シンデレラが深夜12時の鐘を聞いた時のような、一瞬で目の覚める光景だった。

暮色の近づいた周囲の景色が、パツと銀色に開ける。

尚美は買い物の事を思い出して、彼に小さく頭を下げると小走りに立ち去る。

途中、振り返って彼を見たかったけれど、そのままイオンスーパーの入り口へ滑り込んだ。

二重の自動ドアを抜けて、店内通路で立ち止まる。

館内圭吾……。

心の中で、彼の名前を呟いてみた。

「遅かったじゃない。ちょっと心配しちゃったわ」

尚美が買い物から帰ると、母親が言った。

「うん……」

尚美はそう言いながら『ちよつとね』と手話を使う。

そそくさと話したい事は、喋るよりも手話が楽だった。

「どうかしたの？」

母親の顔が微かに曇る。

「べ、べつに」今度は言葉を発する。

「ジャスコでナンパでもされた？」

リビングから顔を出したのは、姉の志美だ。

高校生の彼女はあまり家にいないし、いても家族と団欒する事は少ない。

中学の頃からあまり家族の団欒に加わらなくなった。

織堂家は尚美が生まれた時から彼女にかかりきりで、志美は独りにされる事が多かった。

だからと言って妹を恨んだりはしていない。

実際姉妹は意外なほど仲はいいし、両親よりも早く手話を覚えたのも志美だった。

両親の愛情が尚美に片寄っている事も充分に解っているし、妹が大変なハンデいを背負って生きている事も理解している。

だから志美は、風邪で熱を出しても両親に言わない事がよくあった。

そんな時、妹の尚美が察知して母親に告げるのだった。

「うるさい」

尚美は声を出すと、片手を突き出して犬を追い払うようなジェスチャーを見せる。

「ナンパくらいされなさいよ」

志美は悪戯っぽく笑うと、キッチンを通り過ぎて階段を上っていった。

尚美は買い物袋からケチャップや食パンを取り出すと

「宿題あるから」

そう言つて、自分の部屋へ向かった。

けれど宿題はない。

新学期が始まって間もない学校の授業はまだ担当科目の教師の自己紹介やわき道にそれた内容が多く、教科書もほとんど触り程度だった。

尚美はベッドに横たわって目を閉じる。

優しい音が、脳裏に蘇える。

山々に響き渡る小川のせせらぎと、包み込むような小鳥たちの囀り……。

暖かな陽射しが溶け出して、身体を抱きとめる。

正確な音を感じる事は出来ないが、だからこそ周波数を通して音質の違いに敏感なのかもしれない。

そこに、彼の怒ったような眼差しが飛び込んてくる。

唇の隙間から覗く白い歯と、言葉を発したときに動いていた逞しい喉仏。

尚美は、胸の中に小さな熱い火種を感じて心がざわついた。鼓動が少しだけ高鳴るのを感じる。

それは高揚するような、心地の良いざわめきだった。

## 【7】誘い

「圭ちゃん、今日は学校へ行つたの？」

ドアの外から、遠慮気味な声が聞こえる。

圭吾は人気バンドのDVDが流れる液晶テレビを観ながら

「ああ」と短く応える。

「うそ。行つてないんでしょ？ さっき、担任の七瀬先生から電話があつたのよ」

「知ってるなら、いちいち訊くなよ」

ドアに向つて圭吾は怒鳴る。

どこかよそよしく、やっぱり遠慮気味に。

「どうして行かないの？」

「べつに」

その応えは、本心だった。

彼にとって学校は行きたいと思うものではなく、ましてや行かなければイケナイ場所とも思っていない。

圭吾の父親は最近地方へ進出している生命保険会社の店舗開発部長だった。

部長といつても名ばかりで、あちこちへオフィスを構える度にその立ち上げ係として軌道に乗るまで都合よく使われ、また新しい出店先へ出向く。

今までは関東が主な展開だった会社は、本格的に地方進出へ乗り出した。

立派な家は、建売物件を会社が買い取り彼に与えた物で、圭吾の父親の所有になつたわけでもない。

あたかも栄転にカモフラージュする為の、ささやかな景品に過ぎないのだ。

圭吾は小学校の頃からあちこちの学校を転々としている為、親しい友人など出来なかった。

今回は中学に入る手続きが済んだ後に転勤が決まった。

父親は先に転勤を済ませて、母親と彼は小学校の卒業と同時にこの地へやって来た。

感動とか歓喜とか、そんなものは一切ない。

卒業した小学校だって、6年生の夏休み前から8ヶ月通っただけだ。

行きそびれた中学にも、なんの未練も無い。

「今日も、お父さんは帰りが遅いらしいわ」

遠慮気味に母親がそう言いながら、圭吾のご飯をよそってテーブルに置く。

天井の嵌め込み照明と間接照明が照らす食卓はやけに明るい。

この二人の食卓には似合わないほどに。

彼女は後妻で、圭吾の生みの親ではない。

本当の母親は圭吾が小学校4年生の時に、耳の不自由な妹を連れて出て行った。

転校が多かった圭吾は、妹と仲が良かった。

学校へ行けない妹は何時も家にいた。

時折ろう学校へ行って手話や言葉の発音を勉強していたが、父親の転勤先によってはろう学校が近くに無い場合もある。

母親はその事を何時も気に病んでいた。

圭吾は学校から帰ると、いつも妹の面倒を見ていた。

それなのに、妹を失った彼は本当の独りぼっちになったような気がした。

それは母親を失うよりも辛いことだった。

何が原因で母親が去ったのか……どうして妹だけを連れていったのか、小学生の圭吾には解らない。

父親とは会話は少なかったから、あるいは夫婦仲が上手く行つて

いなかったのかもしれない。

もしかしたら障害を持つ妹を、父親は面倒な子供だと思っていたのかもしれない。

その事について、圭吾は父に尋ねた事はない。

それでもその時から彼の心の中には、常に黒い蟠<sup>わたかま</sup>りの靄<sup>もや</sup>が蔭<sup>かげ</sup>りを作っている。

それは親を信用せず、大人を信用しない。

いや、誰も信用しないという真稔にも似た誓いでもある。

心の傷を埋める為の、ねじれた悲しい誓いだった。

「その髪、やっぱり黒くした方がいいんじゃないかしら……」

義母は何時も遠慮がちな眼差しで圭吾を見つめる。

圭吾はその眼差しに苛立つのだ。

一生懸命母親を演じているのは解る。

でも、彼にとって彼女は女性であるだけで、母親ではないのだ。食事を作り、住まいの掃除をする女性だ。

「べつに、他にもいるよ」

「そうなの？」

確かに、上級生には茶髪の生徒もいる。

圭吾は夕食を食べ終わると、黙ってダイニングを出る。

何かモノ言いたげに、母親の香奈子は彼の背中を見つめる。何時もの事だ。

この家に「いただきます」や「ごちそうさま」は存在しない。そして、夕食時の笑い声もその後の団欒も……。

春色の風は相変わらず強く吹いていた。



蒼く輝くような空には、陽射しに照らされたガラス細工のような雲がゆつくりとクルージングしている。

クラスの雰囲気は微妙だった。

恐る恐る尚美の近くに来てはただ通り過ぎる娘もいれば、完全に遠巻きでチラチラ盗み見る娘もいる。

男子はあまり関心がないようで、別段嫌な視線をくべる者はいない。

ただ、特に話しかける者もいなかった。

眼中に無い……尚美はその意味をしみじみと感じる。

友恵は頻繁に話しかけてくれるが、川本真穂と呼ばれると直ぐにそちらへ行ってしまう。

真穂はまるで、尚美に唇を読まれまいとしているように彼女に背を向けてみんなと会話する。

彼女の身体が死角を作り、他の娘の口もよく見えない事も多い。

友恵に聞いたのか、もしくは他のルートで尚美が他人の言葉を理解する理由を情報収集したのかもしれない。

友恵が目の前からいなくなると、尚美は独りだった。

カバンから小説の文庫本を取り出して静かに読み始める。

活字の中に没頭すれば、退屈な休み時間はあっという間に過ぎていった。

新学期が始まって一週間が経っても、館内圭吾は学校へ来なかった。

担任教師も何度か彼の自宅へ行ってみたらしいが、本人は不在だった。

「ねえ、明日の土曜日買い物行かない？」

金曜日の昼休みに声をかけてきたのは、川田真穂の方だった。  
一瞬躊躇と警戒の念が過る。

が、「いいよ」と言う代わりに、尚美は笑顔で頷いた。

「洋服とか好き？」

真穂は尚美の前の席に腰を下ろすと、黒々とした瞳を細めて笑う。  
それは親しげにも、怪しげにもとれる眼差しだった。

「あたし洋服買うの好き。雑貨屋さんとか見るのも好きでさ」

やはり彼女は唇を読まれることを知っている。

尚美も頷いた。

もちろん、誰かと一緒にそういった店をぶらついた事はないけれど。

「友ちゃんとか、裕子も行くって」

尚美を安心させるかのように、真穂は笑顔で言った。

瞳の奥で、鉛のような深みの在る光が揺れていた。

「あら、朝からお出かけ？」

キッチンへ下りて朝食のパンを口へ運ぶ尚美に、母親が話しかける。

『友達と買い物』

口いっぱいに頬張っている最中でも平気で話せる手話は、こういう時便利だ。

「へえ、友達できたのね」

『とりあえずね』

尚美は少し曖昧に笑う。

友恵は友達かもしれないが、他の……特に真穂に対してはそうは思わない。

今日の彼女の魂胆も、イマひとつ判らないでいる。

どうして自分を誘ったのか……もしかして、友恵に何かを聞いて気持ちが変わったのかもしれない。

普通にコミュニケーションを取れると知れば、案外気さくに接する娘なのかもしれない。

出来るだけ良い方へ考えを巡らせて、ミルクのいっぱい入ったコーヒーを飲み干した。

尚美はショートパンツの下にカラータイツを履き、白いパーカーを羽織って出かける。

自転車で行けて沢山お店が見れる場所と言えば、この界隈ではジャスコしかない。

昨年運河の向こうにできたイオンスーパーとジャスコが合体した大型ショッピングモールは、駅周辺の商店街をすっかり寂れさせてしまった。

待ち合わせは10時半だった。

尚美は10分前に集合場所である西側の出入口に着いていた。

土曜日のせいか、開店時間直後から人の波は途絶えない。

どこからこんなにいっぱい人が来るんだろう……

ちよつと不思議に思う。

しかしロードサイド型のショッピングモールは、隣町を含め周囲20キロ圏内は商圏に入っているのだろう。

尚美はぼんやりと人の波を眺め、そして大型駐車場に忙しく入って来る車の列を眺めた。

入り口近くの街路灯に陽射しが白く反射して、少しだけ目を細める。

自動ドアが開閉するたびに、甘い香りの風が身体をくすぐった。

## 【7】誘い（後書き）

お読みいただき有難うございます。

全体の構成からいくと、まだまだ序盤です。

時間の都合で少しだけ更新ペースが落ちますが、できるだけ早い更新を心がけております。

## 【8】待ちぼうけ

駅前通りは相変わらず寂れるいっぽうで、閑散としたシャッターの並びだけが目立っている。

商店街を抜けて国道へ出る角地にあるマクドナルドに、かろうじて人が集まる。

夕方になると昔ながらの八百屋と魚屋がなんとか人混みを作るが、以前の活気には程遠いものだった。

午前11時半まで尚美はジャスコで待っていた。

西口の集会所が間違いかもしれないから少しだけうろついたらけれど、やっぱり西口だったりしてみんなと行き違いになると困るから、結局西口周辺で待った。

しかし、彼女たちは来なかった。

小さな不安は的中していた。

真穂は尚美をからかっただけなのだ。

適当なウソの約束に尚美が踊らされる姿を見て、または想像して楽しんでいたに違いない。

それを読み取れなかった自分が尚美は悔しかったけれど、真穂たちを恨む気持ちは何故か沸いてこない。

誰かの都合が悪くなつてそのまま中止になったのかもしれない。

そんなはずは無いと自分を自嘲しながら、彼女は広大なショッピングモールを後にした。

尚美は自転車で駅前の商店街まで来ると、駐輪場に自転車を止めてぶらぶらと歩いた。

家に帰ったら母親が何かを悟つて声をかけてくる。

それがたまらなく嫌だった。

心配する母の顔は見たくない。

小学校の特別教室へ通う自分の姿を、母はいつも心配そうに見守っていた。

だから尚美は家では明るい少女を務めた。  
それが幸いしたのか、彼女は小柄だけれど笑顔が似合う。  
もちろん、朗らかな正確はやっぱり母親似なのだろうけれど。

小さな電気店のショウウィンドウに飾られた大きな液晶テレビから、お昼の番組が流れていた。

全てはノイズとなつて尚美の中耳には届く。  
耳障りではないけれど、何処か虚しい音に感じるのは気持ちが萎えているせいなのだろうか。

どこか空虚な今は、それさえもただ右から左へ流れて消えて行く。

尚美は不意に振り返る。

あの音。

やさしい音が聞こえた。

「週明けに、また来てみます」

「ああ、そうしてください。きつと入ってるから」

小さなペットショップの間に、館内圭吾が立っていた。

間口に鳥籠がいっぱい吊るして在る、昔ながらの小さなペットショップ。

彼は太ったおじさんの店員と何かを話していた。

話終わった圭吾は、道路に振り返ると尚美に視線を止めた。

しかし彼は視線を逸らすとそのまま歩き出して、立ち止まる尚美の顔を素知らぬ顔で通り過ぎる。

いや、通り過ぎるところだった。

覚えてないのかしら……。

声は出せない。

息が声帯を突くのを押さえ込む。

喉が震えた。

尚美は足を前に踏み出して圭吾に手を伸ばす。

「……………」

彼の着たフリースジャケットの肩口で、指先が空を切った。

「何？」

妙な気配に圭吾は立ち止まって

「ああ……また、おまえ」

相変わらずぶっきら棒な話し方。

それでもその声は優しい周波数となって、尚美の中耳に届く。

尚美は口だけを開いて話すマネをする。

「この前は、ありがとう」……声は出なかった。

少し引き攣った笑みを、圭吾に向ける。

彼は眉を潜めて、怪訝に尚美を見つめた。

黒い瞳の虹彩が、午後の陽に小さく揺れている。

「おまえ……もしかして話せないのか？」

尚美は苦笑いを浮かべて、つい『ごめんなさい』と手話がでる。

口は動いていた。

圭吾は自分の耳を指差して「耳か？」

彼の言葉に、尚美は頷いた。

彼女も自分の耳を指差して、再び『ごめんなさい』と手話が出る。

しまったと思って、手を慌てて引っ込めた。

頭上の陽射しが一瞬雲で隠れると、二人の上に大きな影が落ちる。

『いいさ、俺にはわかる』

圭吾の手が動いた。

尚美は一瞬退くほどに驚いて、視線を彼の手に止めた。

彼の手が、確かに話しかけてきた。

『手話が？』

尚美は恐る恐る返す。

意図的に少しゆっくりと、手のひらを動かす。

『普通でいいよ』『普通でいいぜ』

圭吾は手話と同時に声を出した。

やさしい音と会話した気がした。

少しゴツゴツして遅しく、しかししなやかな手のひらと指先は彼の奏でる音と同じく、やさしい動きで彼女に話しかける。

間違いなかった。

不登校の転校生　上級生と掴み合って喧嘩をする、茶髪のぶっ

きら棒な館内圭吾。

彼は手話が話せるのだ。

雲のかかった太陽が顔を出して二人を照らした。

暖かな春の日差しがほんのりと桜の甘い香りを含んでいたのは、きつと気のせいかもしれないけれど。



## 【9】校則違反

『何してたの？』

『ウサギの餌を頼んでたんだ』

『ウサギ？』

『ああ、ドイツのウサギで、本国の餌が一番好きなんだ。でも、なかなか取り扱いが無くてさ』

圭吾の手話はとても悠長だった。

いかにも手馴れて、そしてしなやかな動きが尚美に安堵を与える。どうして彼が手話を使えるのか不思議に思った。

しかし、その理由は明白だ。

きつと身内に聴覚障害者がいる……尚美は一瞬でそれを感じ取った。

健常者が手話を使える大抵の理由はそれだから。

尚美は圭吾と一緒に小さな喫茶店に入っていた。

路地の角に在る、小さいけれど外装がレンガ造りの瀟洒な喫茶店で、尚美も入るのは初めてだった。

というか、小学生も中学生も喫茶店に入る事は校則で禁じられている。

マックやミストやデニーズとかはOKなのに、喫茶店がダメなのが不思議だ。

尚美はミルクココアとミートパスタを頼んだ。

とっくにお腹は空いていたので、独りでマクドナルドにでも入ろうとしていたところだった。

国道から真っ直ぐマックに入れたが、時間を潰したくて駅前の駐輪場から商店街をぶらぶら歩いたのだ。

ウサギの餌？……尚美はちょっと不思議に思った。

ウサギの餌と言ったら、真っ先に浮かぶのはピーターラビットが齧っているレタス。

そしてバックスバニーのニンジンだった。本国の餌とは、いったいなんだろう？

『餌って、ニンジン？』首を微かに傾げる。

アハハ。と、声を出して圭吾は笑う。

「ニンジンって、それ漫画の見すぎだろ」

尚美はちよつとすねた目で圭吾を見つめ、ココアのカップを口に着ける。

『じゃあ、何？』

片手で雑な表現を送る。

『固形のラビットフードさ』

尚美は小さく数回頷く。

が、本当はどんな物かピンとこない。

「このくらい小さな……まあ、ドックフードのウサギ版だな」

圭吾は親指と人差し指を1センチほどに広げて、餌一粒の大きさを示して見せた。

「ウチのウサギはドイツ製が一番好きなんだ。よく食べる。日本製もそこそこ食べるけど中国製はぜんぜん食べないよ」

尚美はホークの先でパスタを巻きながら、再び顎を振るように頷く。

ウサギは生の野菜しか食べないと思っていた。

首を動かす拍子に尚美の黒髪がサラサラと揺れる。

それを見た彼は、ハッと息飲んで尚美を見つめた。

「唇が読めるの？」

うつかり言葉で話したのに、彼女が普通に頷くからだ。

あまりに相づちが自然だから、手話を使うのを忘れていた。

尚美は再び小さく頷く。

圭吾は、フツツと小さく微笑んだ。

「なるほどね」

微かにゆつくりとした口調。

彼は黒いフリースのポケットから小さなボックスを取り出す。そこから取り出したタバコを、無造作に口にくわえた。

「……あつ」

息を飲み込むような声が、尚美の口から零れた。

圭吾は窓の外に視線を移しながら、同じポケットからジッポライターを取り出す。

午後の陽射しが、真鍮のライターを鈍く光らせる。

キンツと音を鳴らしてライターのフタが彼の親指で跳ね上げられた。

この春に中学になったとは思えない鮮やかな指さばきだった。

尚美は中腰に立ち上がって手を伸ばすと、圭吾の口元からくわえたタバコを素早く引っ張り抜いた。

ビックリした圭吾の視線が尚美を捕らえて、シュツとすりあげたライターの炎だけが、彼の手の中で揺れていた。

「なんだよ」

「だっ……」

尚美は声を出して、それを直ぐに引っ込める。

『だって、ダメだよ。タバコは』

困惑した表情を、彼に向ける。

圭吾は呆れたようにライターの火を閉じると、再び窓の外に視線を移す。

怒っちゃったのかしら……。

尚美は思わず握りつぶしてしまったタバコを掴んだまま、彼を見ていた。

指先からポロポロとタバコの葉が床に零れ落ちる。

せつかく親しくなれそうな、友達になれそうな関係が崩れるのは怖かった。

でも、喫煙する中学生と友達でいられる気はしない。

彼女の類は、微かに緊張してこわばっていた。

早まった行動をしてしまった……。

しかし、圭吾は肩をすくめると再び尚美を見た。

妥協したような笑みに、怒りや怨嗟の想いは感じられなかったし、再びタバコを手に取る事もしない。

彼はゆつくりと左手に握ったライターをポケットにしまうと

『わかったよ』

再び肩をすくめて笑った。

「ウサギ、見るか？」

圭吾の言葉に尚美は目を輝かせて頷いた。

彼の話すウサギの話しは彼女の興味をそそった。

「ウサギはしょっちゅう、自分の耳を前足で繕<sup>つくろ</sup>うんだ。ちょうど女性<sup>せい</sup>が長い髪の毛を繕うようにね」

圭吾はコーラを口へ運びながら続ける。

「たいていはその流れで前足を使って顔を洗って、その後両足をパタパタと拍手のように叩いてほろっ動作をするよ」

どれも尚美の知らないウサギの姿だ。

長い耳を前足で繕う姿とは、どんなだろう。

その時は、やっぱり後ろ足だけで立っているのだろうか。

ウサギの後ろ足は大きいから、立つのは意外とラク？

尚美の好奇心は、大いに燦<sup>きら</sup>った。

窓から注ぐ陽射しが、シュガーポットのふたをキラキラと照らしていた。



## 【10】ライオンヘッド

駅前の駐輪場まで二人で歩くと、前のサドルに圭吾が乗った。

『乗れよ』

尚美は一瞬躊躇してから、小さな荷台の上に横乗りする。

ゆっくりと、しかし力強く自転車が走り出すと、何処かへ掴まる必要があつた。

尚美は彼の背中を見つめた。

しかし宙をさ迷う手は荷台の後に添えて、身体を支えた。

商店街を抜けて、国道を渡る。

歩道の浅い段差を乗り越える度に、自転車が揺れてお尻が痛い。暖かな陽射しを浴びた風が、頬をかすめて髪を靡かせた。

尚美は空を見上げる。

真つ青な虚空に浮かぶ、真つ白な雲。

白い月が半分になって浮かんでいる。

こんな時、普通は前後で会話をするのだろうか……？

尚美には、自転車をこぐ圭吾に後から話しかける事は出来ない。

正確には話しかける事は出来る……でも彼に向って声を出す勇氣は無かつた。

それは普通の女の子が想う恥じらいや逡巡とは異質のものだ。

自分の話し声が自分で聞こえない不安は、何時でも彼女を消極的にさせる。

見覚えのある住宅街へ入ると、あの印象的な一軒家に到着した。棘で囲われた、拒絶の城だ。

圭吾は門扉を開けると、自転車ごと尚美を庭に招き入れる。

門から玄関まではレンガ畳が短く続いていた。

周囲は短い芝生で覆われて、中庭に続いている。

ガレージとの境目には、マリーゴールドとペチュニアが植えられ

ていた。

「こつち」

圭吾が尚美の肩を突いて促す。

自転車を置いて中庭に抜けると、丸く刈り取られた庭木が幾つも並んでいた。

白い物置の横に、小さな小屋がある。

最初は日陰になって中がよく見えなかった。

尚美は小屋へ近づいて金網の奥を覗き込む。

長い耳にヒクヒクとうごく三角の鼻……。

確かにそれはウサギなのだが、頭の後ろには優美な鬘たてがみがある。

尚美は中腰になって膝に手を添えていたが、そのまましゃがみ込んだ。

「これ、ウサギ？」

後の圭吾に振り返る。

「ああ、ライオンヘッドラビット。て、言うんだ」

圭吾はあえてゆっくりと言う。

尚美は再びウサギ小屋に向きかえると、金網に顔を近づける。

目の周りと鼻の頭が半分茶色くて、身体にも大きな茶色い模様が入っている。

……いや、茶色の地に白のまだら？

尚美は金網にへばり着くように中を見入った。

茶色と白のまだら模様はまるでパンダのようでもあり、首のモコモコした鬘たてがみは、確かにライオンみたいにも見える。

しかし、真つ黒な大きな瞳と長い耳、フサフサの口元はやっぱりウサギだ。

ちよつと臆病な眼差しは、何処を見ているのかハッキリしない。ただ鼻先だけが何かを告げるように忙しくヒクヒクと動いている。

干草の匂いがした。

圭吾が腕に触れて、尚美を振り返らせる。

『触ってみるか？』

『触れるの？』

『意外と人なつつこいよ』

尚美は瞳を輝かせて大きく頷く。

圭吾は尚美の隣にしゃがむと、小屋の片隅にある小さな扉を開けた。

ライオンラビットは、ピヨコン、ピヨコンっと小さく跳ぶように歩くと小屋から出てくる。

「あはあ……」

思わず声が溢れ出る。

尚美は初めて間近で見るフサフサの小動物に、心が躍った。

ペットシヨップでは見た事があるけれど、それはケージのガラス越しだ。

圭吾はウサギを両手で抱き上げると、尚美の膝の上に乗せる。

彼女もそれを両手で抱えるように、恐る恐る抱きとめた。

柔らかな毛並みは、今まで触った事の在るネコや犬とは全く違った感触だった。

まるでミンクのコートに触れているようで、それでも確かな獣の体温が両の腕に生命を感じさせる。

尚美は膝の上で抱えたウサギを、片手でそっと撫でてみた。

三角の鼻先が、ピクピクと動く。

臆病な草食動物から伝わる独特の優しさ。

誰も傷つけずに生きる、弱者の持つ温もりがそこにはあるような気がした。

尚美の頬に、他人の体温が近づく。

圭吾の肩が、彼女の髪の毛の外側に微かに触れていた。

頬がくすぐつたい。

彼は尚美の膝の上にいるウサギの頭を撫でる。

首から後を撫でる尚美の手に時々触れた。

優しい温度が、尚美の手を伝って胸の奥へと流れ込んでくる。



尚美は圭吾の顔を直接見ないようにして視界の隅で捕らえながら、ちよっぴり頬が火照るのを気付かれないように少しだけ背を丸める。腕に伝わる脈動が、ウサギのものか自分のものかよく解らない。空は蒼くて、やさしい光が圭吾の茶色い髪の毛をキラキラと照らしていた。

## 【11】戸惑い

「ゴメンゴメン、急に予定変更になってさ。だって、あんたケイタイ持ってないんだもん」

真穂は笑って尚美の前に立つと

「しょうがないよ。連絡取れないし」

尚美は彼女を自分の席で見上げていた。

一緒に買い物へ行こうと誘われたある土曜日の事だ。

真穂とその仲間と一緒に買い物へ誘われた尚美は、待ち合わせ場所ですで1時間待った。

結局彼女達は待ち合わせ場所へは来なかった。

「やっぱ、電話で連絡取れないと一緒に行動するのは無理だね」

真穂はまだ、尚美の前に立っていた。

尚美は思わず声が出そうになってそれを飲み込み、真穂をジッと見上げていた。

「なんか、文句ある？」

沈黙のまま見つめられる真穂は、最後にそう言った。

尚美は黙って首を横に振る。

その日、尚美は圭吾と親しくなり、真穂の故意的な行動は彼女の中では完全に相殺されていた。

真穂は優越の笑みを浮かべて彼女の前から立ち去ると、他の仲間と声を立てて笑った。

友恵は少しだけ、その輪から離れていた。

朝のホームルームで、転校生が紹介された。

圭吾は週が明けると学校へ来た。

一週間以上遅れて来た転校生に、みんな目を見張る。

茶色い短めの頭髮に短い学生服。

女子はブレザーだが男子は黒い詰め襟の制服で、少し丈を短くするのが流行っていた。

もちろん、校則違反なので2年生にならないとそれをしないのが暗黙のルールでもある。

女子がスカートを短くするのと違い、上着の丈を短くする事は周囲に威圧を与える。

不良じみた連中が好むスタイルだから、そう感じるのかもしれない。

圭吾は真ん中の一番後ろに設けられた席へ促された。

出席番号順で並んだその場所は、ある意味彼に相応しい。

周囲の視線が彼を追う。

ホームルームが終わって担任が教室を出て行った後も、圭吾に話しかける者はいなかった。

彼はカバンの中から僅かな教科書を机の中に入れる。

「ねえ、新入学なのに、どうして転校なの？」

真穂はひとり歩み寄り、圭吾に話しかける。

圭吾は無表情で彼女を見上げる。

「さあ……」

まるでひと事のようにだった。

無表情に言って、彼はカバンを机の横に掛ける。

ムカツク視線……。

真穂が最初に感じた印象だった。

真穂に声を掛けられて無表情に応える男はいない。

彼女は小学校時代に、既にそれを悟っていた。

尖った顎と小さくて高い鼻。

マスカラを着けたように黒々とした睫毛。

そしてモデルのように細くて、しなやかに長い脚。

実際彼女は小6の時に、衣料スーパールの広告モデルを経験している。

もちろん地方の小さな会社の広告では在るが、真穂にとって優越

感を味わうのに充分だった。

「あたしは嫌だつて言ったのにさ」

彼女はそう言つて、周囲の連中に微かに顔の映っている衣料品広告を見せつけた。

身近なクラスメイトが広告紙面に載っている。

それだけで充分に持てはやされた。

「やっぱり真穂は違うよね」

当時いつも傍にいた、まど香が言った。

こうして真穂は周囲とは違う自信と優越感を持って中学へ入学した。

それなのにこの冷めた目は何？

真穂は「そう」とだけ応えて、圭吾から離れた。

尚美は黙つてその情景を見ていた。

圭吾も特に尚美の方を見るでもなく、このクラスで一番会話を交わしているはずなのに親密性は全く感じない。

友恵が見ている。

圭吾に視線を留めていた彼女は、尚美の視線に気付くと小さな苦笑を見せた。

それが何の意味か、尚美には解らなかった。

「あたし、真穂のグループ抜けようかなあ」

放課後に再び、友恵と帰りが一緒になった。

昇降口で軽く手を振る彼女。

裏門へ向う真穂と晶子と三樹たちだ。

家の方向が全く違うから、友恵は真穂たちと帰らない事が判つた。振り返つた彼女は、昇降口で靴を履いた尚美に気付くと、人懐こいふつくらした笑顔で近づいた。

彼女は土曜日の事を気にしていた。

「土曜日はゴメンね。あたしは嫌だったんだ、あんな事」  
もちろん、尚美を引っ張り出して待ちぼうけを食らわす悪戯の事だ。

「あの日、午後からイオンに行ったんだ。真穂が、ナオがまだいるかどうか確かめよう。とか言ってたさ」

友恵は話し続ける。

「でも、いなくて良かった。ずっと待ってたらどうしようかと思っただよ」

『そんなに御人好しでもない』

伝わらないと判っても、思わず手が動く。

同時に首を横にブンブンと振って見せた。

「そっか」

友恵が頷く。

伝わったかは判らない。

「あの後みんなで買い物したけど、ぜんぜんつまらなくて」

友恵は真穂たちのイケイケの雰囲気になんかついていけないようだった。

それは日頃の彼女を見ていれば何となく判る。

きつと、真穂よりも優しい気持ち優先して彼女を苦しめるのだと、尚美は思った。

「でもなあ、あそこ抜けたら入るところないし……」

友恵は制服のポケットから小さなチョコレートを取り出して、ひとつを尚美に手渡す。

一粒一粒が小さな包みに入ったタイプのやつだ。

「グループじゃ……ないと、ダメなの？」

声を出して訊いてみる。

友恵は、尚美のたどたどしい喋りを気にしない。

「だって、いろいろと大変じゃん。グループに属しないとさ」

「ナニが、大変、なの？」

「だから、いろいろ」

友恵はカバンをブンと振り回して蒼穹<sup>そうら</sup>を扇ぐ。  
流れる白い雲を目で追った。  
遠く彼方を見つめる、少しでも悲しい瞳だった。

## 【12】集団（前書き）

少しだけ、圭吾の話です。

少しずつ尚美の周囲の話が割り込みます。

## 【12】集団

「やばいぞ、先輩が転校生しめんべ会議してるって」

圭吾は毎日学校へ来たが、誰にも心を閉ざしていた。

友恵が言っていたとおり、クラスで浮いた存在になった。  
ぶつきら棒で、とつき難い。

何時もポケットに手を入れて、足を広げて大きく寄りかかるように席に座る。

彼にしてみれば、なめられない為の威嚇いかくの姿だった。

小学校の頃 「おい転校生」 そう呼ばれ続けて2ヶ月を過ごした事もある。

誰も自分の名前なんて覚えていない。

覚えてくれようともしない。

もちろん、圭吾も当時のクラスメイトの名は覚えていない。

初日から威嚇いかくをすれば、だれも馬鹿にしない事がわかった。

皆警戒して近づこうとしない変わりに、軽薄な戯れに巻き込まれることもないし、クラス内の力関係に左右もされない。

何時の頃からか、それが彼のスタイルになった。

それは母親と妹を失った時からかもしれない。

しかし中学は違っていた。

警戒心を虚勢に変える連中が、群れをなして待っていた。

「なあ、館内君……先輩が放課後体育館に来たって」

木曜日の昼休みが終わる頃、サッカー部の小池忠典が恐々と圭吾に近づいた。

圭吾は真ん中の一番後ろの席 自分の椅子に座ったまま、彼をチラリと見上げる。

彼に見上げられた瞬間、小池は全ての動作を一瞬止めた。



「なんで？」

圭吾は短く応える。

何でなんて訊かなくても、その理由は知っていた。

登校初日にこの学校の上級生に絡まれて、二人を殴っているから。

この中学の生徒は学年によって大分ムラのある素行性があった。

今年の三年生は非常にガラが悪くて、二年はそれほどでもない。

一年生は予備軍が少数いるが、成績優秀者も多くて帳尻を保っている。

小池は予備軍にも成績優秀者にも属していなかった。

ただサッカーが好きで、その部活を選んだだけだ。

「さあ……来れば分かるって」

小池も短く応えるだけだった。

「生意気だからじゃねえの」何処からか小さな声が聞こえた。

放課後を告げるチャイムが校舎に鳴り響くと、雑踏が廊下を行き交う。

尚美はチャイムの音が嫌いだった。

雑踏が和音になって中耳に広がり、周囲の音が全て掻き消される。

それは小学校の頃から変わらない。

ここそこでするはずの話し声はまったく耳に届かず、物音も消える。

どれがどの音か、何処から何の音が聞こえているのか、チャイムが鳴り響く間は雑音の和音に満たされた無音の世界が続くのだ。

「館内、逃げんのか？」

背中から誰かが言った。

「た、館内君、行かないの？」

小池忠典が足早に圭吾に歩み寄る。

圭吾はカバンを肩にぶら下げてチラリと小池を見ると

「しらねえよ。関係ねえし」

「館内君が行かないと、俺が困るんだよ」

「そんなの知るか」

廊下は部活へ向かう新入生が行き交う雑踏で満たされ始めていた。今週から仮入部が始まって、各自が望む部活動へ向う。

中には先週から早々と自分の置き場所を決める者もいた。

そんな小池忠典も先週末からサッカー部へ参加し、今日先輩たちに呼び出されて圭吾を連れてくるように言われた。

尚美は教室の隅から、ドアの出口に佇む二人の会話を読み取る。

圭吾が学校へ出てきて以来、全く会話を交わしていない。

先週の土曜日の午後が夢だったかのように、彼は尚美に視線をくべようとはしなかった。

ただ寒々とした視線で周囲を見渡し、全てを拒絶していた。

圭吾は小池が差し出した手を振り解くと、廊下へ出て行く。

尚美は彼を追うように、反対側のドアから廊下に出て彼の背中をみつめた。

圭吾は真つ直ぐ足早に昇降口へ向う。

上級生の挑発に乗る気はなかった。

別に喧嘩が好きなわけではない。

できれば避けたいくらいで、登校初日の出来事だつて自分に降りかかる火の粉を払っただけの話だ。

小池にも周囲にも平静を保ってクールを装ってはいたが、圭吾の心臓は明らかに鼓動を速めていた。

降りかかる火の粉には嫌気がさす。

早くこの場所から退避したい。

圭吾は靴を外履きに履き替えると、そのままの勢いで外へ出る。

正門まで100メートル少し。裏門までは60メートルだ。

中学校の昇降口は東側と西口の2箇所に分かれていた。

一年生は西口。二年生は半分が西口で、半分が東口を使う。そして三年生は東口昇降口を使っていた。西口から正門までの間に、東昇降口がある。それを避けて裏門から出れば、体育館裏を通る。どちらも避けたいルートだが、どちらかは通らなければならない。圭吾は一瞬躊躇するが、そのまま正門へ向った。

正門を出て県道を歩く。

古い住宅街の合間に農協の倉庫がある。

後ろから人の気配がして、一瞬ドキツとする。

運動部が早々とランニングを始めて、ジャージ姿の集団が圭吾を追い越して行った。

少しずつ鼓動が静まってゆく。

オレには関係ない……。

圭吾は深く静かに息をしながら、遠ざかる集団を観ていた。

## 【12】集団（後書き）

お読み頂き有難う御座います。

話が進む中で、周囲の登場人物の話が所々に割り込む構成になっています。

### 【13】家族

尚美は圭吾の家の前に立つて、棘で囲われた庭を覗き込む。

圭吾の後を追っていたら、彼の家まで来てしまっていた。

棘の隙間から、白い小さな小屋が見える。

微かな光に、丸くなったウサギが見えた。

大きな綿毛のような体は、まん丸とした毛玉のようで、尚美の胸の中をたちまち癒すのだった。

「どうしたんだ？」

声がして慌てて振り返った。

それが声だと判ったのは、圭吾の声だったから。

「あっ……」

声を飲み込む。

「なんか、気になって……」

「オレが？ それともウサギが？」

圭吾は手を動かして、目を細める。

細い眉がピクリと動いた。

それが笑っているのだと判ったから、尚美は安堵して

『どっちも』と両手を動かして見せた。

「こんなに早くお友達が来てくれるなんて」

母親が紅茶の入ったポツとから、カップに注ぐ。

黒く艶の在る木製のテーブルに、真っ白なティーカップが二つ。

琥珀色の熱い液体がそれを満たしてゆく。

大きな液晶テレビの横には、１メートルくらいある自由の女神像が置いてある。

それがただの置物なのか、何か役割があるのかは尚美には想像がつかなかった。

少し高い天井には、ブロンズ色をしたアンティーク調のシーリングファンが釣り下がっている。

中央にはシンプルなチューリップ型の照明器具がぶら下がって、大きな窓から注ぐ外の光を小さく反射していた。

圭吾の家に招かれた尚美は、彼と並んでリビングのソファに腰掛けた。

真つ白な革張りが小さくきしんで音を立てる。

硬そうに見えたのに、思いの外腰が沈み込んで尚美はハツとする。彼女は思わず手で口を塞ぎ、その光景を圭吾の母親は見ていた。

自分がこの家族に嫁いでから、ガールフレンドどころか普通の友達さえ連れてきた事の無い圭吾に、義母は些細な驚を感じた。

尚美の小さな顔を覗くように笑みを送る。

圭吾と並ぶと、とても華奢で色白に見える。

尚美はその視線に応えるように、ぎこちなく笑みを返す。

「同じクラスなの？」

尚美は頷く。

声をだして「こんにちは」と言っていない事を、尚美は気にしながらもやっぱり声は出なかった。

彼女の些細な困惑を、彼は見抜いていた。

「いいからさ、もう行ってよ」

圭吾が言った。

「いいじゃない、少し学校の事とか訊きたいじゃない」

母親は興味津々の笑顔のまま、ストンと向い側のソファに腰掛ける。

「上に行くつ」

母親が座ると同時に、圭吾がカップをソーサーごと二人分持ち上げて尚美に言う。

「もう少しぐらい、いいじゃない」

彼女が尚美を見て「ねえ」と言う。

尚美は少し困った笑顔で応えるしかなかった。

母親は知らない。

尚美の耳に障害が在る事を。

圭吾はその事に苛立ちを感じた。

あえて言うつもりも無いけれど、察して気付かない彼女にイライラした。

質問されても答えられないじゃないか……尚美は喋れるけれど、きつとこの義母ひとには声を出さない。

そしてあんたは手話が読めないんだ。

尚美が慌てて立ち上がり母親に会釈をした時、圭吾はリビングを出るところだった。

『優しそうなお母さんじゃない』

階段を上がりきって、尚美は圭吾の背中を突く。

いささかまくら言葉にも感じる。

「後妻だよ。継母ママははってやつさ」

彼は振り向いて応える。

尚美は一瞬足が停まった。

リアルでは聞き慣れない言葉……ドラマや漫画ではよく聞く言葉だった。

## 【14】事情

圭吾の部屋は甘い香りがした。

フローラルでも果実の甘さでもない。

それは彼から微かに香るムスクの香りと同じだと気付くのに、少し時間がかかった。

白い壁には何も飾りが無い。

フローリングの床には真っ黒なラグが敷いてある。黒いガラステーブルと一瞬同化して見えた。

ベッドには濃紺のチェックのカバーが掛けられて、枕元の棚には津田洋南の空の写真集が無造作に置かれている。

圭吾はテーブルの上に二つのカップをそつと置いた。

「何も無いだろ」

ガラス戸のある本棚には整理されたマンガ本とウサギの飼育の本が並んでいる。

勉強机の上は全く使っていないようにキレイで、寧ろ閑散としている。

本棚部分に、中学の教科書と参考書が僅かに並んで斜めに倒れかけていた。

『よく片付いてるね』

尚美は何処に座ればいいのか迷いながら、とりあえず彼の置いた自分のカップの前に陣取る。

ペタリと膝を着いたラグは物がいいのだろう、意外と肌触りがいい。

圭吾はベッドの上にドカッと腰を下ろした。

窓の外には青空が広がっている。

「俺は転校ばかりだったから、友達が家に来た事なんてないんだ」  
圭吾は窓の外を眺めて話す。

『あたしも、小学校の頃は友達いなかったよ』



尚美は小さなカップを持ち上げて、口に着ける。

「今だって、いるようには見えないけどな」

圭吾が少し憎たらしい笑いで言った。

「あ、あんただって……」

思わず声を出す。

『あたし、別に友達じゃないし』

強がってみる。

頬が紅潮した。

「そうだな」「そうだね」

圭吾は優しい声に被せて手を動かすと、自分の紅茶を一気に飲んだ。

あっさりとしたその応えに、尚美の胸の中で何かがシュンと窄まる。

それを悟られないようにすると、益々頬にほてりが昇って来た。

相変わらずモコモコのライオンラビットは人懐っこい。

庭に出たチヨビは、クローバーの茂る場所まで小走りに跳ぶと、無言で食べ始めた。

尚美がウサギに触りたいと言うと、圭吾は快く庭に連れ出してくれた。

ウサギのナニを考えているか解らない黒い瞳は、尚美にとってはかえって馴染み易い。

鼻の周りのモコモコしたヒゲが動くと、それだけで尚美は何だか

暖かい気持ちになった。

『ったよこほ津田洋甫の写真……』

チヨビの頭を撫でながら、尚美は思い出したように訊いてみる。

「津田？ の写真？」

『ベッドに在った空の写真集』

「ああ、あれか」

圭吾は笑って空を見上げる。

「あれ、あたしも持つてるよ。空が好きだから」

圭吾が「俺も」と言っのを期待した。

「そうだな。俺は……空を見るのは好きだけど、空を見上げる自分は好きじゃない」

意味わかんない。

尚美は小首を傾げて笑う。

ウサギが手の下から抜け出て彼女の足元に頬を寄せた。

ソックスのくるぶしを鼻先で突くが、しゃがんでいたのでスカートの裾で隠れる。

「だって、空を見上げる時って意外とめげそうな時じゃねえ？」

『そうかな？』

尚美はスカートの裾を少し持ち上げる。

ウサギのまん丸な尻尾が見えた。

『あたしは、別に普通に空を見るよ。あの雲キレイとか』

『そんな感じだな』圭吾が両手を動かした。

尚美が足元のウサギを触るために、スカートの裾をどんどんたくし上げる。

「そんなにまくったら、パンツ見えるぞ」

「ぱっ……」声を出す。

彼女は慌てて、裾を持った手を離れた。

「ウソだよ」

圭吾は悪戯っぽく笑う。

教室では絶対に見せない姿。

尚美は紅くした頬を、わざと膨らましてみた。  
楽しい時間だった。

圭吾の母親は、彼女は帰る時に愛想よく手を振ってくれた。  
彼の家庭の事情は訊けなかった。

耳の聞こえない家族をさり気なく探してみたけれど、圭吾の家にそれらしい人影はいなかった。

誰のために彼は手話ができるのだろうか……？

もう少し仲良くなれたら訊こう。

尚美はそう思って、彼の家を出た。

青々とした棘に、赤い蕾が幾つも出来ていた。

## 【15】癒し（前書き）

主君の過去が、少しでも明かされます。

## 【15】癒し

妹は生まれながらの全聾<sup>ぜんろう</sup>　つまり、全く耳が聞こえなかった。無音の世界の中で、彼女は生きていた。

圭吾はそんな妹とコミュニケーションが取りたかった。

彼は小学校へ入ると、三つ違いの美圭<sup>みか</sup>に絵本をよく見せてあげた。文字を辿って読んでも、彼女には聞こえない。

手話を提案したのは圭吾だった。

母親も同じ考えを持っていたらしく、直ぐに賛同した。

父親は仕事が忙しくて「お前にまかせる」とだけ妻に言った。

父親の転勤は多く、短いと二ヶ月、長くても一年ほどで他の地へ移動になった。

母親と子供たちだけは多少遅れて引越したりはしたが、小学生活の六年間で圭吾は10回も転校した。

友達が出来なかった。

いや、最初の頃は圭吾も普通の児童と同じように同級生の友人を作って一緒に遊んだりした。

しかし気付いた。

親しくなればなるほど別れは辛くなるのだと……。

どんなに絆を深めた友も、親の都合には敵わないのだと。

意気投合した友達と別れて再び新天地ではゼロからのスタートだ。子供社会は大人が思っている以上に複雑で、新参者を歓迎しない場合も多い。

大きなイジメにはあっても、存在が否定されたりどこか遠巻きに接する事も少なくない。

別に寂しさは無かった。

家に帰れば妹がいた。

どれだけ大勢の中にも孤独を拭えないけれど、彼女の傍にい

る時だけは違っていた。

小3になる頃には、美圭と圭吾は手話を使って自由にコミュニケーションを取れるようになっていた。

二人の間に言葉の隔たりはない。

音の無い彼女に変わって、圭吾はオーバーな身振りで何とかその音を表現してあげようとした。

車の走る音。

夕暮れのカラスが鳴く声。

時雨の重奏や蛙の合唱。

母親と妹の三人で買い物へ出かけた時、ペットショップの間口に置かれたケージに美圭の足が停まった。

『どうしたの？』

彼女の肩を突いて母が訪ねる。

美圭は黙って大きくは無いケージの中を見つめていた。

圭吾は反対側のケージの中に目を留めていた。

生きているか死んでいるか分からないほどジッとしているカメレオンが、木の枝にしがみ付いている。

母親が美圭に話しかけている事に気づいた圭吾は、妹の視線の先を見た。

白と茶色のブチ毛の小さな生き物が、おがくずの上で丸くなっている。

ハムスターだと思った。

しかし、モコモコした小動物の耳は長い。

ウサギ？

ケージに貼って在る小さなPOPには「ライオンヘッドラビット（ドイツ産）」と書かれていた。

館内家に小さな仲間が加わった。  
「動物は人の心を癒すんだよ」

圭吾の言葉に、母親も頷いた。

彼の妹を思う気持ちは、母がいちばん判っていた。

美圭は庭だけでなく、近くの公園にウサギを連れて行くようになった。

もちろん、その時は何時も圭吾と一緒にだった。

ライオンラビットは思いの外人なつくくて、声をかけると近づいて来たりもする。

遊んでくれと、アタマを擦り付けてくる事もあった。

仔兎が次第に成長すると、モコモコした首の周りの鬣たてがみはよりハッキリとしたものになる。

『ほんと、ライオンみたいだね』

美圭はそう言いながら、チヨビの背中を撫でる。

彼女がウサギに付けた名前だった。

『だからライオンラビットなんだろ』

圭吾は彼女の傍らで、一緒に背中を撫でた。

美圭は花火が好きだった。

手持ちの小さな玩具花火も、お祭りの打ち上げ花火も。

圭吾は花火を手を持つ美圭の姿が好きだった。

打ち上げ花火の大きな音は、彼女の耳には届かない。

しかし手持ちの噴出し花火は元々あまり音がしないから、自分と美圭の間にあるその瞬間の音の隔たりが消えるのだ。

『花火やろうか？』

圭吾が誘うと、美圭は何時も笑顔で頷いた。

彼はその笑顔を見るのが好きだった。

庭や公園の片隅で一緒に花火をすると、美圭の白くて丸い頬は黄金色に霞んだ虹色に輝いた。

穂のかに甘い香りが硝煙に混じって煙ると、圭吾は美圭と二人だけの世界に包まれるのだった。

それは無音の世界に浸るような、お互いの孤独を癒すやさしい静

寂の光だった。



## 【16】静けさの中

雪が降っていた。

窓から眺める外の景色は音も無く、ただ降りしきる雪に白く覆われていた。

庭木にこんもりと積もった雪が、何処か現実感を遠ざける。

妹と同じ境遇になった気分だった。

降り注ぐ雪が大氣の音を吸収する。

声を出せば、それは果てしなく届くような気もした。

窓を開けて真っ白な静寂に耳を澄ますと、遠くから車の走る音が微かに聞こえる。

やっぱり美圭とは違うんだな。ここは無音の世界なんかじゃない。

どれだけ静寂の中にいても、彼女の世界を味わい理解する事は健常者にはできない。

圭吾は茶の間の窓辺に腰を下ろして、しばらくの間降り注ぐ雪を見上げていた。

小学校4年生の冬、年が明けて間もない1月中旬の日曜日だった。その頃館内家は千葉にある松戸の住宅街の一軒家を借りて住んでいた。

古い住宅街だったが、次々とワンルームマンションが増え続けるような栄えた街だ。

転校して来て3ヶ月が過ぎた頃だった。

朝起きた圭吾は、家の静けさを奇妙に思いながら階段を下りる。

昨夜は家族4人で夕飯の食卓を囲んだ。

父と母は相変わらず会話は少なかったが、何時も通りの食事だった。

しかし……。

何か判らない不安で満たされて、心は僅かに焦燥していた。

何時も聞こえるはずの、台所で食器を洗う音。

朝食のトーストと卵焼きの二オイ。

母親と美圭の気配。

そのどれもが、家の中から消えていた。

この建物には自分以外のひと気がしない。

もちろん父親は朝早く仕事で既に出かけている事は判っている。

階段を踏み下ろす足が、次第に速くなる。

階段途中の窓から見える景色が、圭吾の視界に入った。

低い雲からヒラヒラと雪が舞い降り始めていた。

雪は降り止む気配はない。

銀世界はまるで、この世の終焉をむかえた世紀末のようだ。

くぐもった世界に降り積もる雪が、まるで死の灰のようにも見え  
る。

圭吾の目にはそう映った。

凍て雲は低く押し掛かり、世界を圧迫していた。

涙なんて出ない。

凍りつく大気が、それを留めてくれているようでもある。

暖かい場所に行けば、それが解かれてしまうような気がした。

彼は窓を開けたまま冷たい風に触れ、遠くに霞む雪の帳を見つめ  
ていた。

その夜遅く、仕事から帰った父が圭吾に言った。

「母さんと美圭は暫く実家で暮らすそうだ」

「なんで？」

「その方が、美圭の環境にいい」

ウソだ。そんなのウソだ。

直感でそう思った。

今までの会話の無いふたりを見ていたから。

父親が自分からはあまり美圭に話しかけなかったから。

「何時帰るの？」

「それはまだ分らない。このままこの家……いや、俺たちの暮らしにはもう戻って来ないかもしれない」

圭吾は俯いたまま、上目遣いで父の顔を見ていた。

父は圭吾を見ていない。

テレビのブラウン管の一点だけを何故か見つめていた。

バラエティーの特番が、ただ滑稽に映し出されている。

蒼い光が父の瞳の奥で揺れ動く。

そのまま黙って缶ビールのプルタブを開けると、勢いよく口へ運んだ。

「それが二人の選んだ結果だ」

父は履き捨てるように言った。

圭吾はそれ以上何も訊かなかった。

ただこの家にも孤独が訪れた事を悟った。

自分が信頼する人は、自分から遠ざかって行くのだと思った。

俺には何も選ぶ権利はないのだろうか……？

10歳の心は激しく傷つく。

それは学校での些細な軽蔑やいざこざとは比べ物にならない。

自分ではどうにも出来ない境遇に、未だかつて無いジレンマを感じた。

子供は自分が思う通りには生きる事はできない。

保護者の都合で、それは左右されるのだ。

それはきつと、美圭も同じだろう。

窓の外は月に照らされた銀世界が闇の中に浮かんでいる。

取り残されたようにライオンラビットのチョコビが、小屋の中でカタカタと小さな音を立てていた。



## 【17】陽炎（前書き）

再び主人公が中心のエピソードに戻ります。  
少しずつ、尚美の周囲に登場人物が増えます。

## 【17】陽炎

青空に浮かぶ雲が、大きくうねりを作って街並の向こう側で陽光に煌く。

陽射しの暖かさが増してクラスみんなが馴染んだ頃の行事に、遠足がある。

学校行事に楽しい思い出はあまりない。

小学校の頃は何時も臨時に、同学年に潜り込むように参加していた。

馴染めるわけが無い。

いや、馴染む事を許されなかった。

みんな珍しいものを見るように、見慣れないものを避けるようにさり気なく拒む視線を注ぐ。

一言も言葉を発しない。

話しかけても頷くか横に首を振るだけの尚美を、ある娘はあからさまに、そしてある子は憐れむように近づいては離れてゆく。

近づく者さえごく僅かだった。

五日前のホームルームで、遠足の為のグループが自由な形式で決められた。

尚美は何処のグループにも属さない覚悟をしていたが、意外にも誘いの手を差し伸べるグループがあった。

クラス委員に選ばれた田中由加子が率いる連中だ。

グレーの細いセルフフレームのメガネは何時もピカピカで、ストリートの高い髪は、絶対に寝癖などついていない。

何処か潔癖な印象を受けるほどの真面目な娘。

尚美から見ても、そんなイメージだった。

グイグイとクラスみんなを引っ張るといふ感じではないが、教師のアシストを上手くこなすようないかにも英明な存在だった。

人に迷惑をかけず、常に模範的。

予鈴が鳴る頃には必ず自分の席に着いている。

クラスで目立っているのは何時も川田真穂とその取り巻きだったが、誰かの為に動くのは由加子だった。

膝が見えるスカート丈は、この中学の制服がそういうスタイルなだけだ。

激しさは無く、静かに物事を主張するような上品さがある。

親しげに他のクラスの娘と下校する姿を何度か見かけた事があるのは、このクラスに親しい友がいないと言う事なのかもしれない。

「こつち来なよ。一緒に組もう」

彼女は当たり前のように尚美を手招きした。

メガネの奥の瞳は、思いの外可愛らしく優しい。

尚美を誘った由加子の傍には二人の女子がいた。

佐々木由紀菜と新山美希

3人とも特に普段から親しい感じではない。

2人とも目立たず、何時もは何処に陰を潜めているかわからない。クラスの中で上手く同化して居場所を見つけている証拠でもあるのだろう。

つまり……普段どのグループにも属さない3人がくっついて、尚美を誘ってくれたのだ。

もちろん声をかけて集めたのは由加子だった。

上手く事を運ぶスマートな行動は、いかにも彼女らしい。

尚美にそれを拒む理由はない。

人のいい誰かの差し伸べる手を見つけて微かな警戒で近づく迷子の仔犬のように、尚美はそのグループの輪に加わった。

あまりにも由加子の手招きが自然だったから、尚美も自然に身体が動いた。

買い物は独りでする覚悟を決めていた。  
今まだでだってそうやって来た。

遠足のグループは形だけのものだろう。  
友達を増やすチャンスと心が高揚する反面、やっぱり積極的にみんなの輪に入り込む事は出来ない事も判っていた。

遠足の前日、尚美は由加子に誘われて買い物へ出かける。  
思いかけない誘いに、再び心は高揚した。

「あたしポツキーは絶対買う」

待ち合わせ場所に尚美が来た時、由加子しか来ていなかった。  
少しだけ2人でお喋りをした。

由加子は何故か、やたらとポツキーの主張をする。

ビターはいいとか限定のアレが美味しかったとか、メنزズは邪道だとか……。

「ナオちゃんは、お菓子何が好き？」

頷いて笑うだけの尚美に由加子が訊く。

少しお姉さんぶった口調にも感じた。

「……かりかり梅……」声を出してみる。

高揚しているが、何処か消え入りそうなか細い声。

「それってお菓子？」

由加子は怪訝に微笑む。

頷いた尚美を見つめる彼女は、何処か困惑して曖昧な笑顔を向けた。

それは決して拒絶の笑みではなかったけれど。

今度こそ楽しい遠足になるかもしれない……ささやかな期待が心の隅で明るい灯を燈した。

買い物には由紀菜と美希も一緒に来た。

途中で待ち合わせして、4人でイオンへ向う。



4人の中学生が明るく親しげに群れを成している。周囲からはそんな風景にも見えるだろう。

しかし尚美は気付いた。

4人でお喋りをするのは、かなり困難だった。

少し離れた位置からなら、ほぼ同時に3人くらいの唇は読める。

しかし、近距離で、自分を囲むように3人が話す言葉を次々に読んで相づちを打つのは非常に難しい事なのだ。

輪の中に入れない。

由加子は多少尚美を気にしながら喋るけれど、他の2人はそんな気の配りはない。

気付くと尚美は会話の外にいた。

それでもくつついて相づちを打つ。

そうしないと逸れてしまいそうだったから。

広い歩道から見る車道のアスファルトは、五月の陽光に照らされて薄っすらと陽炎が揺れていた。

## 【18】途中下車

晴天の下、バスで国道を2時間半。

県道へ逸れて小高い山間を抜けると、古城跡が在る。

江戸時代に築かれた城の跡が、周囲の丘ごと自然公園になった場所だった。

城自体は土台である石垣だけが残って、その周辺に緑地がもうけて在る。

緑に生い茂る桜並木と雑木林に囲まれた長閑な場所で、ペットを連れてくる人も多い。

尚美も小学校の頃、一度家族で来ている。

国道から県道にそれると、大きなお土産屋が見えた。

尚美は丁度真ん中辺りの窓際に座っていたので、それを視線で追う。

隣には由加子が座っていたが、彼女も実際尚美とどうやって接するのがいいのか判らなかった。

声が聞こえないし、話す事もない。

自分の話す言葉は通じるが、尚美からのコミュニケーションは些細なジェスチャーと相槌。

それと笑顔だった。

多少の善意と義務感から誘ってみたものの、やっぱり交流には難儀する。

声が出せる事は既に知っている。

でも彼女は喋らない。

時折片言を喋ってくれるものの、会話には至らないのだ。

時折そんな尚美に苛立ちもする。

もつと意思表示すればいいのに……。

由加子は出来るだけそんな素振りを見せないように、少し眠そうなのを装って大人しくしていた。

沈黙するする理由が、他にも在るのは確かだったが……

道なりに20分も走れば、もう古城公園に着く。

しかしそこから先の道路は右に左に曲がりくねっていた。

視線を巡らせるフリをして、尚美は一番後ろの席の圭吾をチラリと見た。

つまらなそうに窓の外を見ている。

どこか遠く、景色より空を見ている感じだった。

尚美も同じ空を見つめてみる。

丘の向こうにはホイップクリークのような雲が固まって群れを成していた。

県道の曲がりくねった道を10分ほど走ると、隣の席にいる由加子のおかしい事に尚美は気づく。

静に長い呼吸を繰り返していた。

尚美は彼女の肩をポンポンと叩く。

弱々しく振り返った由加子の顔は、ひと目見て青ざめていた。

「バス、弱いんだ……」

彼女が呟く。

尚美は「大丈夫？」と口を動かす。

ゆっくりとした口の動きに、由加子は読み取れたようだ。

「大丈夫。少し気持ち悪いけど……大丈夫」

全席の背もたれの後ろにはバックポケットが付いていて、そこには紙袋に包まれたビニール袋が折りたたまれていた。

尚美は自分の目の前にあるそれをそつと取り出して、両手に掴んだ。

反対側の列席では、数人がおやつを分け合って楽しく食べている。

酔イカの匂いが微かに漂う。

「普通、よっちゃんイカとか持ってこねえって」

「じゃあお前、食うなよ」

笑声がバスの中を満たした。

そんな中で、由加子は何かを堪えている。

尚美は由加子を窓際に促して、自分が通路側へ移る。

彼女は僅かに開いた窓の隙間から風を求めるように、顔を近づけた。

由加子の背中を、尚美はゆっくりとさすった。

「ありがとう……」

俯いた彼女の横顔が眩く。

新鮮な空気を吸いたいが、顔を起こしてられない感じた。

尚美は何度も頷いて、由加子の背中をさする。

「ごめん……ダメだ。あたし降りる」

由加子の眉間に細いシワが寄る。

彼女は先生に気付かれないように、前席の背もたれに隠れるように身をかがめていた。

「すいません、先生……」

ざわめきが、一瞬静まった。

尚美が声を出したから。

「どうしたの？ 織堂さん」

尚美は周囲の静まりに、続きが話せない。

視線を微かに窓際に向ける。

由加子が小さく手を上げて

「すいません。あたし一度降ります」

バスは待避所を見つけて直ぐに停車した。

「あと5分か10分くらいで着くけど、我慢できない？」

担任の七瀬は、心配そうに確認する。

「ダメです……降ります」

由加子は尚美の手から袋を鷲掴みにすると、よろめきながら小走

りに通路に出た。

尚美は立ち上がった後を追う。

由加子はそのままバスの外へ出ると、後ろの死角へ回り込んでしやがみ込む。

紙袋を口にあてがった。

尚美は彼女に追いついて背中をさする。

硬直した背中が、冷たく感じた。

由加子のメガネの奥で閉じた瞳から、小さな雫が零れ落ちた。

「大丈夫、大丈夫だよ」

尚美は声を殺すように静かに口を動かして、彼女の背中をさすり続けた。

## 【19】木洩れ日の中

「大丈夫？」

七瀬がバスから降りてきた。

「大丈夫です」

由加子は振り返らずにしゃがみ込んだまま

「先に行ってください。あたし……ここから歩きます」

バスで5分くらいだから、歩いても15分足らずで目的地に着くのは確かだ。

しかし、そこから15分くらい徒歩で公園の古城跡まで行かなければならない。

「先生、あたしただけ後から行くんですか？」

真穂が窓から顔を出していた。

後ろを走っていた組のバスが、傍らを追い越して行く。

「あ……あたしも」

「残るってさ」

七瀬の後ろに圭吾が立っていた。

尚美は圭吾に向って

『あたしも残るから、みんなはバスで先に行って』

言葉数が多いから、手話の方が伝え易い。

圭吾はそのまま、尚美の言葉を七瀬に伝える。

『由加子さんと歩いていきます』

「本当に歩いて来れる？」

尚美は大きく二度頷いた。

歩くのは好きだし、何も苦にならない。山間の一本道で、迷う事もない。

圭吾は肩をすくめると、頭をクシャクシャと手でかき上げる。

「俺も一緒に歩いていくよ」

「そ、そう」

七瀬は少しだけ思案を巡らせて、唇を微かに噛み締める。

「仕方ないわ。田中さんを少し休ませてから、ゆっくりでいいから」

「ああ、のんびり行くよ」

七瀬はバスの乗降口に身体を向け

「館内君、手話が？」

「少しね」

「じゃあ、ふたりをお願いね」

小さく七瀬は言った。

高原の風が、圭吾の茶色い髪の毛を揺らしていた。

少し前に髪を切った彼の髪の毛は、やっぱり坊主頭が伸びたようなスタイルだった。

「大丈夫か？」

圭吾が由加子を覗き込むように近づく。

尚美はそれを制するようにして、彼を遠ざける。

「なんだよ」

『バカ。少しは気をきかせてよ。女の子なんだから』

「誰だって嘔く事くらいあるだろ」

『それでも見ないで』

『わかったよ』

圭吾は肩をすくめて振り返ると、遠くの丘を見つめる。

「コレも使うか？」

差し出した手には、ビニール袋の入った紙袋。

『ありがとう』

尚美は素直に受け取ったが、由加子の具合はだいぶ落ち着いているので必要はなさそうだ。

由加子は空を仰いで大きく息をついている。

静かに瞼を閉じる彼女の手から、尚美が紙袋を掠め取る。

微かに朦朧としていた由加子は、何が起きたのか一瞬判らなくてただ、尚美の行動を視線で追った。

草木の生い茂る中をガサガサと歩き、大きな石の横に足で穴を掘る。

「おい！」

圭吾の声に尚美は振り返った。

『そんなもの、そこらへんに捨てていいのか？』

『仕方ないじゃん』

尚美は何時もより大きく手を動かした。

『それも、そうだ……』

圭吾は納得して、両手で『どうぞ』とゼスチャーする。

「館内って、手話できるんだ」

由加子はその場にペタリと座り込んで、尚美に向う姿を見上げた。遠足だから、今日はみんな学校ジャージを着用している。

「誰にでも、特技ってあるだろ」

圭吾はそっけなく応える。

「なんか、彼女と意思の疎通が出来るのは館内だけって感じ」

「そんな事ねえよ」

圭吾は由加子を見下ろして

「お前らだって、ちゃんと意思の疎通が出来てるじゃん」

圭吾はポケットからミントガムを取り出して差し出す。

彼女は手を伸ばしてそれを受け取ると

「そうだね。できるんだね」

自分に言い聞かせるように呟いた。

由加子の様子を覗いながら、尚美と圭吾は歩き出した。

15分くらいでバスが止まる大きな駐車場に辿り着く。

もうみんなはいなくて、運転手とバスガイドが集まってタバコを吹かしていた。



「大丈夫だった？ 歩くの大変だったでしょ」

担当のバスガイドが気付いて近づいて来た。

尚美は苦笑して頷く。

「すみませんでした」

由加子が律儀に謝って軽く頭を下げる。

「ううん。私たちは平気よ。よくある事だから。でも、先に行くつていうのは初めてでちよつとびっくりしたわ」

斉藤という名札をつけたバスガイドは、10分くらい前にみんなは公園の坂道を登っていった事を教えてくれた。

「ちえ、マジで誰も待ってないのかよ」

圭吾は口をとがさせる。

「ゴメンね、館内にまでつき合せちゃって」

高原の空気を吸って風を受けながら歩くうちに、由加子の気分はすっかり良くなっていた。

「別にいいけどさ」

その時バスの中から人影が降りてきた。

「ナオ、平気だった？」

友恵だった。

尚美は彼女にビックリしながら、それでも笑顔で小刻みに数回頷いてみせる。

「何やってんだ？ お前」

圭吾が素っ気無く言う。

尚美は圭吾の脇腹を小突いた。

『待っててくれたんだよ』

「痛ってえな。知ってるよ」

圭吾は脇腹をさする。

「あ、あたしも一緒にいていいですか？」

友恵は一見無愛想な圭吾を上目で見つめるとはにかんだ。

尚美と一緒に彼の家に行った時以来、まったく話をしていない。学校へ来て依頼の彼には、とうてい話しかけられなかった。

「いや……別にいいけど」

珍しく圭吾は少し苦笑いしてる。

彼女の敬語が、妙によそよしい……。

奇妙なふたりのやり取りに、尚美と由加子が顔を見合わせて笑った。

ほとんど会話しない彼に、友恵はつい他人行儀に接するしかなかったのだ。

友恵と同じグループの真穂は、当然のように先に行ってしまった。由加子と一緒に尚美を誘ったはずの由紀菜と美希も姿はない。

4人は大きな駐車場の端に在るベンチで一休みすると、ゆつくりと公園へ続く坂道を登っていった。

緑の木々が生い茂る遊歩道は、木洩れ日に照らされた光のトンネルのようだった。

## 【20】姉妹

ノックの音がした。

ドアの振動と外から聞こえる音のリズムで、尚美はそれがノックだと判別する。

部屋のドアを開けると志美が立っていた。

「ナオ、中間試験は学年で6番だったんだって？」

『まあね』唇を読んで応える。

「やるじゃん」

『だって、簡単だったんだもん』

「これから直ぐに難しくなるよん」

『そしたら、オネエちゃんに教えてもらおう』

些細な会話だが、志美は時折尚美の部屋に来て声をかける。

尚美も同じ事をする。もちろん、志美が部屋にいない事も多いけれど。

「どうしよっかなあ」

志美は含み笑いを浮かべて、

「そう言えばあんた、この前男と歩いていたでしょ」

圭吾と歩いているのを、何処かで見られたのだろう。

「オトコ？」

尚美は慌てて両手を動かす。

『そんなんじゃないよ。ただの知り合い』

志美は、少し細い眉を動かして「ふうん」と頷くと

「ま、いいけどさ」

怪しげな笑みを零す。

『ほんとうに、ただのクラスメイトだから』

『ただのクラスメイト』志美がわざとらしく手話で復唱する。

「もう……」

尚美は頬を膨らまして志美の腕を押す。

「ハイハイ」

志美が部屋のドアの外に下がった。

「でも、よかったね」

志美の言葉に、尚美は身体の動きを止める。

一瞬、姉を見上げた。

まだ、志美の方が8センチだけ背が高い。

「ボーイフレンドが出来てさ」姉は優しく笑った。

\* \* \*

紅い炎が小さく燈る。

ゆらゆらと青白い煙が登って、宙を舞いながら蛍光灯に吸い寄せられるように消えた。

志美はラインマーカーゆきみを片手に参考書を広げて、啜くえたタバコを唇の間で軽く噛んだ。

空気清浄機のスイッチを入れると、小さな灰皿を勉強机の一番下の引き出しから取り出す。

薄いピンク色のマニキュアがついた指先で、タバコのフィルターを軽く弾いた。

志美はリビングで家族と戯れる事をあまりしない。

中学に入った頃から、彼女は自分の部屋で過ごす事が多かった。

高校へ進学すると、友達と遊び歩いて夜中に帰る事も多くなった。

尚美と4歳違いの彼女は、市内一の進学女子高である好聖館学園高校に通う二年生だ。

勉強は出来るが、遊びの方も進んでいる。

家では内向的な彼女も外では社交的で、その性格がタバコを早く覚えさせた。

尚美が生まれた時、志美は既に物心ついていた。  
幼稚園に通い始めた彼女は、妹の反応が鈍い事に疑問を感じていた。

自力で這い回るようになった尚美は、家族の呼ぶ声にあまり反応を示さない。

呼ぶ声に振り向かない。

怪訝に思っていたのは両親も同じで、まさかと思いつながらも母親は総合病院の小児科に相談した。

「今日病院へ行ってきたわ」

「で？ どうだった？」

台所で父と母の小さな話し声が聞こえる。

「耳が聞こえないようだって」

「全くか？」

「少しだけ音に反応しているから、全くって事はないみたい」  
母親の声は続いた。

「でも、もう少し様子を見てから詳しい検査が必要だって」

ナオの耳が聞こえない？

志美はリビングの陰から、二人の会話を聞いていた。

暫くして尚美が3歳になった時、詳しい検査が行われた。

隣町に在る、さらに大きな病院まで足を運んだ。

感音性聴覚障害 内耳から脳へ伝達する聴覚神経に障害がある  
のだという。

音は聞こえるが特定の波長を聞き取れない為、音そのものの判別  
ができない。

つまり、聞こえた音がなんの音か判別できないという事だ。

尚美が生まれてから、両親は志美に手が廻らなくなった。  
ただでさえ二児が生まれると長女長男はいささか蔑ろにされる事

が多い。

仕方ない　小さな子供ほど手がかかるのだから。

しかも尚美は耳が不自由だから、尚の事手がかかる。

いや、夜鳴きや疳の虫がほとんど無かったから、ある意味手はかからなかった。

それでも母親は終始尚美から目が離せない。

音の判別ができない彼女が、何時どんな行動をとるか心配だった。3歳を過ぎて歩き回り走り回るようになると、傍を離れられなかった。

志美は少し離れて、何時もそれを見ていた。

小学校の入学式。

志美は自分の準備は自分でした。

新しく買ってもらった小さなブレザーを自分で着た。

少し袖が長かったけれど、つめてもらう事は望まなかった。

余計な手間をかけると、尚美への配慮は欠損してしまうかもしれない……。

細いエンジ色のリボンが上手く結べなくて泣きそうになった。

そのまま学校へ行くと、新しい担任教師が縦結びを直してくれた。それでも志美は尚美が嫌いではなかった。

耳が不自由な彼女を可愛そうだと思った。

何より、彼女ともっとコミュニケーションを取りたかった。

普通の姉妹のように、一緒に遊びたかった。

公園へ出かけてブランコに乗ったり、駄菓子屋で買い物したり。

一緒にテレビを見て笑いたかった。

「お母さん、手話って知ってる？」

尚美が小学校へ入った時、志美は四年生になっていた。

文化鑑賞会で耳の聞こえない障害者のビデオを観たのだ。

「ええ、知ってるわよ」

食卓には夕ご飯が並んでいる。

尚美は大好きな卵焼きをもぐもぐと頬張っていた。

「ナオにも手話させれば？」

「そうねえ、もう少ししたら考えましょ」

「どうして？」

「だって、まだ小さいから覚えるの大変よ」

「大丈夫だよ。ナオは賢いから」

志美は知っていた。

自分の持っている筒井康隆や赤川次郎の小説を、既に尚美は読み始めている。

幼稚園の頃には早々と文字を覚えて、絵本を自分で読んでいたのだ。

母親が気の進まない理由は他にも在った。

自分が覚えられるか判らない。

学生時代あまり成績のよくなかった彼女は、今さら新たに手話などを覚えられる自信が無いのだ。

「ねえ、お父さんもそう思うでしょ？」

志美が父親に同意を求める。

無邪気だが、確かに何かを求める笑み。

彼女の一途な視線は、何時も強くて優しい。

父親は静かにご飯を食べながら手を伸ばして、尚美の口元についたサラダのマヨネーズを拭っていた。

「そうだな。ナオならできるだろう」

尚美を見て笑う。

その後視線を自分の妻に向ける。

彼女の不安が尚美に無い事を、微かに感じていた。

「じゃあ、今度病院で相談してみようかしら……」

「今度じゃなくて、明日ね」

志美がハンバーグを口に放り込む。

「地元の福祉団体に手話の連盟か団体があるだろう。そっちに問い

合わせてみなさい」

父親が言った。

「聴覚障害者は、聞くこと意外は何でもできるんだって」  
志美が味噌汁を口へ運ぶ。

「キング・ジョーダンだっけ」父が応えた。

「誰？ それ」

母には判らなかった。

ポカンと口を開けて、箸で唇を触る。

「有名な外国の大学学長が言ったのさ。ろつ者は聞くこと意外は何  
でもできる。とね」

父親は笑って尚美の頭に手を乗せた。

尚美は視線を父に向け、大きく微笑む。

向日葵のような笑みだと、志美は思った。



## 【20】姉妹（後書き）

お読み頂き有難う御座います。

今更ですが、この作中で『』のセリフは手話での会話を表しております。

聴覚障害のタイプには、伝音性と感音性がある。

伝音性は内耳までの間の音を伝える経路に原因がある場合で、感音性は内耳から奥の聴覚神経や脳へ至る神経回路に問題がある場合。混合性は伝音性と感音性の二つが合わさったものである。

聴力は聞く能力（伝音性）を指し、聴覚は内耳から奥の神経経路（感音性）を表す。

多忙為、更新が遅れております。

次回の更新は1月7日頃になる予定です。

## 【21】屋上（前書き）

少し間が空いてしまいました。

連載再開です……が、少し更新ペースが落ちるかもしれません（  
^ ;  
^

## 【21】屋上

蒼い空は見えなかった。

何処までも雲が埋め尽くす灰色の空は、低くくぐもっている。

梅雨入り間近の湿った風が、屋上の給水塔下をすり抜ける。

圭吾は昼休みになると、よくここへ来る。

教室へいても何処か居心地がシツクリとこないし、意味も無く親しげにはしゃぐ連中が鬱陶しくも感じた。

ここでは風の音しか聞こえない。

時折雲の波間からジェット機の轟きが響くのは、隣町にある航空自衛隊の基地から飛び立つ練習機だ。

無機質な音は群集からかけ離れていて、かえって心地よささえも感じる。

広い空が自分の居場所だ。

誰もいない……もちろん本来立ち入り禁止の屋上は、虚空の中に身を浮かべるような圭吾にとっての特等席だった。

蒼穹<sup>そら</sup>を見上げる自分は嫌いだった。

確かに、自分はそう思う。

でもやっぱり蒼穹を見上げると、心が落ち着く自分がここにいる。ふっと、人の気配が圭吾の傍らに近づいて来る。

くぐもった空の下では、濃い影は落ちない。

ごく薄く、微かな影が彼の頭を覆う。

『やっぱりここにいた』

コンクリートに横たわった圭吾は、傍らにしゃがみ込んだ尚美の胸元を、逆さに眺める。

見下ろす彼女の髪の毛がふわふわと風にそよいでいた。

『屋上が好きなんだ』

尚美はしゃがみ込んで、圭吾の顔を覗きこむ。

『べつに……』

圭吾は口を噤んだまま、気だるく手を動かす。

『だって、昼休みは何時も上でしょ？』

「別に、好きなわけじゃない……下にいるよりマシなだけさ」

彼はぶつきら棒に口を開くと、自分を覗き込む尚美の向こう側を見る。

灰色の空だけが、ムクムクと埋め尽くす果てしない帳。

尚美は寝そべる圭吾の傍らに膝を抱えて腰掛けた。

衣替えしたブラウスの背中には、微かに下着のホックの跡が浮かんだ。

圭吾はその視線を直ぐに空へ向け直す。

「学校で俺に近づいても、いい事無いぞ」

空を見上げたまま言った。

彼女は背を向けているから、言葉は届かないだろう。

それでも圭吾の声に、尚美は振り返る。

「ん？」

「何でもない」

彼女の視線に向けて、口を動かした。

尚美を見ていると、美佳を思い出す……。

彼女がこの年になれば、いや……少し幼げな尚美とはちょうど今、妹と同じ感じかもしれない。

懐かしさがひび割れ、苛立ちが滲み出る。

それは尚美が妹ではないからなのだろうか……。

『もう梅雨だね』

屋上に行く圭吾を、尚美は何時も見ていた。

何時か後を追いかけて自分も屋上へ行こうと思っていた。

本当は蒼い空が何処までも続く景色と一緒に眺めて話したかったけれど、何時の間にか梅雨景色の季節が近づいていた。

それでも尚美は自分の行動に高揚感を抱いてここへ来た。だから喋る。

用意していた言葉を半分だけ散りばめて、言葉を紡ぐ。

「ああ」

彼は空だけを見つめていた。

無邪気な振る舞いが、よけいに圭吾を苛立たせた。

近づきすぎてはいけない……。

親しみに満ちた関係は、鋭いナイフに姿を変えて何時でも自分を傷つける。

鋭い刃先で、心を切り裂く。

何時もそうだった。

思い出せ……何故、自分が孤独を演じるのか。

何故、親しい友人を作らずに過ごしてきたのか。

父親の転勤という、子供には関係の無い世界の出来事で、莫逆の友も容易く消え失せる。

親しみも友情も愛情も、お互いの慈しみさえ、温暖化の進む南極の氷山のように音をたてて瓦解してゆく。

「そんなに俺に馴れ馴れしく近づくな」

圭吾はチラリと尚美の顔を見て、直ぐに視線を空に戻す。

覆い尽くすねずみ色の空は、低く何処までも続く。

尚美は唇を読み違えたと思った。

瞳を丸く開いて、困惑の笑みを零す。

「あまり、俺にかまうな」

圭吾は空を見上げたまま、はつきりと両手を動かしてみせる。

「どうして？」

尚美は圭吾の心理が読み取れなかった。

ウサギを見せてくれた彼の優しい眼差しは、人を寄せ付けない普段の彼ではなかった。

それが彼の本当の姿なのだと、尚美は感じていた。

そうでなければ、遠足の時だって一緒に歩いてくれたりはしないだろう。

「どうしても……」

圭吾は冷たく両手を、小さく動かした

彼にその理由を話す気はない。孤独は自分の内に在ればいい。

尚美は膝を抱えなおすと

『圭吾に近づくか近づかないかは、あたしの勝手だよ』

『俺が嫌なんだ』

彼がむきになって大きく手を動かす。

そんな圭吾を、尚美は呆然と見つめた。

心の中で、何かかしゅんと萎んでゆく。

「嫌、なの……？」思わず声に出す。

弱々しく、たどたどしい唇から零れるように声が出た。

圭吾は一瞬躊躇した。

「あ、ああ……嫌だ」

尚美はその言葉が合図になったかのように立ち上がって、スカートをパンパンとほろう。

寝転んだ圭吾を数秒見下ろした。

揺らいだ黒い影が、圭吾に重く圧し掛かる。

弱い心が読み取られそうで、恐怖さえ感じた。

だから圭吾は、視線を別の空へ向ける。

何処へ向けても、視線の先に在るのは適当に絵の具を滲ませたようなねずみ色の空。

視線の端で、彼女の黒い影を見つめていた。弱い風で、はらはらと髪の毛先とスカートの裾が揺れていた。

やがて影は去り、遠ざかる微かな靴音は小さく消える。

重い鉄の扉の閉まる音だけが、くぐもった虚空に響き渡った。

## 【22】雨の中

尚美は圭吾の身体をかばう様に、彼に覆いかぶさる。  
ねずみ色の重い雨雲は、全てを多い尽くしていた。

背中に雨粒が降りかかる。

幾粒もの降り注ぐ雫は、ブラウスを通り抜けて地肌に突き抜けた。  
湿った風がアスファルトの匂いを大氣に漂わせる。

梅雨らしい午後の雨は次第に強さをまして、激しく地面を叩いて  
いた。

\* \* \*

### 一週間前

圭吾は駅前通りのペットショップでウサギの餌を買った帰りだった。  
た。

前から見覚えのある男が自転車に乗ってこちらへ来る。

相変わらず閉まりきったシャッターの目立つ閑散とした風景が並  
んでいる。

向こうも気付いてハッとした表情をあからさまにした。

3年生の山之内孝志      入学初日に圭吾に絡んできた3年生の一  
人だった。

そのまま何も無ければ通り過ぎよう。

圭吾はそう心に呟いて歩き続けた。

脇道にそれたりしないのが、圭吾の筋の通し方でも在る。

相手を目の前にしたら、尚更逃げるような素振りは見せられない。

それは、相手を調子付けさせる要因意にしかないから。

「おいっ」

山之内が圭吾の前に自転車を止める。

圭吾は立ち止まらず歩き続けようとしたがしかし、強く腕を掴まれた。

同時に山之内は自転車を降りる。

「おまえ、生意気なんだよ。判つてんのか？」

鷲掴みにされた腕を強く引つ張られた。

圭吾よりも10センチは背が高い。

サッカー部らしい、厚い胸板をしている。

圭吾はただ黙って、山之内の視線に自分の視線をぶつけた。

「このやろつ。なめてんのか？」

再び強く腕を引かれる。

心臓が高鳴る。

強い恐怖心が、胸の奥に湧き出て鼓動を速めた。

それを制するには、身体を動かすしかない。

圭吾は力いっぱい山之内の手を振り払った。山之内の反対の手が、

圭吾の襟首に伸びた。

同時に圭吾も腕を伸ばす。いや、突き出した。

襟首を掴むなんて遠回りな事は面倒くさい。

山之内の水下みそみちに拳を突き出す。

「うつ」と呻いて、圭吾の衿に触れた彼の手は自分の腹に動く。

しかし、再び圭吾の服を掴んで直ぐに拳が出て来た。

圭吾の頬を掠める。

揉みくちやになって商店街の閉まったシャッターに身体をぶつけると、大きな音が響いた。

僅かに行き交う人は、ただ避けて通る。

圭吾はがむしゃらに拳を突き出しては、自分の顔はガードした。顔に怪我をすれば、家で問いただされる。

それが、嫌だった。

背中が押し当てられた古びたシャッターがギーギーと音を立てて軋む。

「お前ら、何やってる！」



大人の声がした。

二人共その声の主を確認もしないまま、まるで弾け跳ぶように突き放すように離れて別々に走った。

大人に掴まればただ面倒なだけだと、みな知っている。  
低い雲が、梅雨の訪れを告げていた。

\* \* \*

「館内、放課後気をつけなよ」

由加子が言った。

「なんで？」

「3年生が、今日こそ捕まえるって」

「いまさら？」

「ケジメとかシメシとか言って、けっこう執念深いんだよ。ああいう連中」

一部の3年が、圭吾に目をつけている事はみな知っていた。

何故か、駅前商店街での取っ組み合いの事も噂になっていた。

この中学の誰かが、偶然あの場所を通りかかったのかもしれない。もしそうだとすると、その場では知らない素振りで通り過ぎただろう。

「関係ねえよ」

圭吾と最近よく言葉を交わす由加子に、彼も遠慮なく返す。

尚美はふたりの会話を読んでも、心配の言葉も掛けられなかった。

校門を出る頃には、だいぶ雨脚は強まっていた。

頭上の傘に当たる雨水も、重さを増してボタボタと音を響かせる。歩道のアスファルトの所々には、浅い水溜まりが黒々とできている。

警戒はしていた。

しかし、農協倉庫の陰から不意打ちを喰らった。

3人が走り出て来て圭吾の行く手をふさぐと、後ろから誰かが掴みかかって来た。

何人いるのか確認も出来ないまま、圭吾は身体を振るって拳を突き出す。

何発かは確実にヒットしていた。

誰に当たったかは判らない。

山之内の顔が見えた。

降り注ぐ雨の隙間をぬうように、幾つもの手が圭吾に降りかかる。農協倉庫の硬いブロック塀に身体をぶつけた。

持っていた傘は、何処へいったか判らない。

雨脚は強くなっていた。自分の身体に届く手も確かに濡れている。囲む集団はその範囲を狭めて圭吾の行き場を無くす。

完全に追い詰められていた。手数が足りない。追いつかない。疲れた……。

ちきしょう……。

無意識に顔を覆っていた。

腕に背中に、脇腹に腰に容赦なく拳と蹴りが跳んで来る。

「やめて！」

聞き覚えのある声が聞こえた。

自分を囲む連中の黒い影に、姿を確認する事はできない。でも判る。このすつとんきょーな声の主は間違いない……。

ばかやろう。何でいるんだ。こっちに来るな。

横っ腹に大きな足が食い込んだ。

## 【23】濡髪

午後から降り出した小雨は、いつの間にか確かな音を立てて校庭の固い土を叩いていた。

4階の音楽室から6時限目に見えた運河の水面が、激しく褐色の波紋に埋め尽くされていた。

尚美は圭吾の姿が教室から出るのを視線で追うと、直ぐに自分も昇降口へ向う。

階段で友恵とすれ違ったが、そのまま笑顔で通り過ぎた。

彼女は日直の為、ホームルームの後に職員室へ一度向かった帰りのようだ。

何か言っていた気もするけれど、唇を読む間もなかった。

昇降口を出たタイルは激しく濡れていた。真つ赤な傘をさして、尚美は圭吾の後を追う。

彼はもう、正門を出て通りへ曲がった所だった。

足早に、それでも周囲に気付かれないように配慮しながら暫く先を歩く圭吾を追う。

校庭を出るまでは気をつけないと、ハイソックスに泥跳ねもとび易いし……。

石造りの正門を出ると、視線の先で紺色の傘が雨に打たれていた。

農協の倉庫が先に見える。

黄土色のがさついたブロックの壁面は、元々何色なのかは判らない。

鉄の扉は茶褐色に錆びて、景色は雨に呑み込まれるようなセピア色だ。

数人の生徒が前方で、突然圭吾を取り囲んだ。

尚美は息を呑み込んで立ち止まる。何が起きたか判らなかった。

何人かは持っていた傘を投げ捨てるようにして、両手の自由を手

に入れると圭吾の制服に掴みかかった。

圭吾が完全に囲まれた。

彼の姿はほとんど見えない。

しかし、集団の中央に彼がいるのは明らかだった。小さな歩道を横切って、農協倉庫の敷地に集団が動いてゆく。

暴れる圭吾の手が微かに見えたような気がして、尚美は小走りに前に進んだ。

誰かが圭吾の髪の毛を掴んでいる。

「このやろっ」とか「ふざけんな」とか言っているのだろう。とにかく乱暴な声は乱雑なノイズとなって雨音を割り、尚美の耳に届く息が切れた。胸が高鳴るのは走ったせいなのか恐怖なのか判らなくなった。

何かをしなければ……相手が多すぎる。

このままでは圭吾が殺されてしまうような気がした。

「やめて！」

何時ぶりか判らない大声を出した。

おそらく小学校の低学年以来だろうか。

尚美は圭吾を取り囲む集団を、力いっぱい割ろうとした。

大きな身体は彼を殴りつけるのに夢中だ。

一番近くにいた一人の腕を掴んで引く張る。

ちようど圭吾に向って振り切ろうとした腕にしがみ付いて、彼女は力ずくでそれを止めると、後ろに引く張った。

小さな隙間ができた。それを抜けるように、素早く圭吾に辿り着く。

彼の濡れたシャツの袖を掴んだ 圭吾からはぐれないように。

顔を覆うように半分うずくまる彼は、もう腕を突き出す気力も残っていないかった。

尚美は周囲に背を向けて、圭吾の前に覆い被さる。

背中に躊躇のある拳が少しだけ掠めた。

「やめろっ」

声がした。

山之内孝志だ。

集団の一人は圭吾から尚美を引き剥がそうと肩に手を掛けていた。  
「やめとけ」

山之内はもう、腕をダラリと下ろして誰かを殴る姿勢は無くして  
いる。

「なんだよ。じゃまな女退けちゃえばいいじゃん」

「そいつ、1年の障害者だぞ。やめとけよ」

「関係ねえよ」

尚美の濡れた肩を鷲掴みにする手があった。

山之内は、尚美の制服を掴んだ悪友の手を制する。

「俺はそこまで悪<sup>あく</sup>になりたくねえ」

彼らは自分たちが悪である事を知っている。

それがカツコイイと思う年頃でも在る。

しかし、人道に外れた行為はしたくないのが、山之内の真稔だ。  
道徳を無視し、社会に反抗しながらどこか矛盾した思想は人とし  
ての一線を越える事を許さない。

それは反面、スポーツに熱中する姿にも精通する。

「もういいだろ。お前もこの前の仕返しは終わった」

尚美を圭吾から引き剥がそうとしていた彼は、入学式の朝、圭吾  
に初撃をくらっていた。

「孝志は優しいからな」

そう言つて悪友は、尚美の肩から手を離すと

「俺も、女どもを敵に廻したくねえし」

開いたままの黒い傘が数本と、尚美の紅い傘が雨の打つ道端に転  
がっていた。

山之内は赤い傘を拾うと、尚美の手に無理やり握らせる。

「後はその髪を黒くすればチャラだ。って、そいつに言つとけ」

彼はそう言つてから苦笑する「耳が聞こえないんだっけ」

尚美は山之内を見上げてみる。

頬と下あごが震えた。雨に打たれて冷えたせいだろうか、それとも目の前にいるさつきまで狂暴だった男に恐怖を感じるからだろうか……。

彼の言葉は読み取れた。

雨に濡れそぼる顔は穏やかで、さつきまで圭吾を囲んで殴っていたとは思えない。

周囲には他に5人の男子がいた。

みな制服をびしょ濡れにして、大きく息を着いている。ある意味の達成感に浸っているようだ。

尚美は頷くわけでもなく、ただ周囲を見渡した。

脅える瞳を凝らして、強く見開く。

集団は彼女に背を向けると、歩道に転がった傘を拾って去って行った。

雨が地面を叩くノイズだけが、急激に音を蘇えらせる。

尚美は圭吾に付き添って、彼の家まで来ていた。

肩を貸して歩いたが、背丈が合わないし男子の身体はやっぱり重くて苦労した。

どっちが怪我人だか判らないように、尚美はたどたどしく覚束ない足取りで歩いた。

何とか手に掴んだ傘を、圭吾は尚美の身体の上に出るだけかざした。

しかしやっぱり傘が上手くさせなくて、けっきょく二人共ずぶ濡れのまま彼の家まで辿り着く。

「だいじょうぶ……？」

玄関に入ると、家の中は静まり返っていた。

圭吾が取り出した鍵でドアを開けたから、誰もいないのだろう。  
尚美は靴を脱いで玄関を上がり、彼をリビングのソファに促す。  
圭吾は背もたれにグッタリと寄りかかって

「ああ、ちきしょう。一人増やしやがって」  
呟くように言った。

尚美はソファの後ろから彼の肩を叩くと

『何か飲む？ お茶入れようか？』

「冷蔵庫にコーラが入ってるよ」

圭吾が言うまま、尚美はキッチンの冷蔵庫からコーラのペットボトルを取り出す。

彼が尚美の方を見ていたから『グラス使っよ』と断って、食器棚に手を伸ばす。

雨雲が空を埋め尽くして、窓から入る光も僅かだった。

外にはまだ、降り注ぐ雨音が響いている。

尚美がテーブルにグラスを置いてコーラを注ぐと、圭吾はそれを掴んで一気に飲み干した。

ひとつ息をつく。

「でも、とりあえず全員に反撃したかな」

そして思い出したように尚美を見上げた。

「お前、大丈夫だったか？」

尚美は頷いてとりあえず笑う。

髪の毛の先から、雫がぽたりと落ちた。

「あぶねえぞ。あいつらサッカー部だから、やたら鍛えてやがるんだ」

再び尚美を見上げる。彼女の頬に髪の毛が張り付いていた。

「お前、ずぶ濡れじゃんか」

『あんたのせいだね』

今日は尚美が悪戯っぽく笑った。

何処から取り出したのか、彼の手からタオルが放られた。

柔軟剤をたっぷりと含んで、パイル地はふわふわしている。

「俺の部屋にいつて、適当に着替えるよ」

その言葉に尚美は驚いた。両手に掴み取ったタオルを握り締める。男物の服なんて……しかも同級生の服を？

顔の前で、手をブンブンと振る。断りの意味だ。

彼は膝に手をつけて立ち上がると、尚美の手からタオルを取って彼女の頭に被せる。

濡れた仔犬の背をふき取るように、少し乱暴にゴシゴシと頭を撫でた。

「風邪引いたら寝覚めが悪いだろ。着替えていけよ。別に覗かないって」

圭吾は笑う。

唇の淵が少し切れて血が滲んでいた。

尚美は濡れた前髪が額にくっついたり離れたり……。

タオルの隙間から圭吾を見上げて、少しだけ俯いた。



## 【24】視線

ブラウスもその上に着ていたベストも、水を吸った重みで床にピタリと落ちた。

スカートもジッパーを下ろすと、何時もの倍の速度で滑り落ちる。

濡れた衣服を脱いただけでも、身体は軽くなって体温調整を取り戻す。

尚美はバスタオルで濡れた髪を押さえながら、クローゼットを開けて圭吾の服を物色する。

女姉妹の彼女にとって、間近で見る男物の服と言えば父親のスーツと小じやれたポロシャツくらいだ。

なんだか心の中が熱く揺れる。

もちろん本人公認の上での事なのだけど、イケナイものをこっそり覗き見るような……何かが胸の奥から競りあがるような高揚感が込み上げた。

穂のかに甘い香りが、鼻孔をつく。

ハンギングされたシャツは色とりどりで、黒い無地からブルーとかオレンジのタータンチェックまで様々だった。

尚美はワレモノを触るように、ひとつをそっと掴んでみる。

白いストライプのシャツ。

シンプルでいいかも。

クラスメイトの男の子の服を拝借して袖を通すなんて、なんだかやっぱりイケナイ事をしている錯覚に落ちる。

そっと袖を通して羽織ってみる。

ふわりと胸のうちが浮つく。

ていうか、おつきい……。

袖は手が抜けないし、& a m p ; # 3 5 0 2 5 ; 《みごろ》丈はお尻をすっぽりと隠して太股の中腹まで覆っていた。

彼女があまり持つていない左前のボタンも、留め難い。

そこで尚美は気付く。

ズボンとは？……彼のジーンズを履くのだろうか？

尚美は些細な困惑に飲み込まれた。

しかし他にないだろう。

箆笥を開けてみる。

一瞬何が目に飛び込んできたのか判らなかったけれど、確認して  
途端に頬が熱くなった。

これまたカラフルなトランクスが、きれいに並んでいたのだ。

男性下着のトランクスは、カジュアルシヨップでもよくは見かけ  
る。

しかし、誰かの生活の中でその箆笥に仕舞いこんであるモノはや  
っぱり別だ。

慌てて閉めて、下の引き出しに手を掛ける。

逡巡した。

しかし男の子だ。他に何が在るわけでもないだろう……。

そう思つて尚美は次の引き出しを開ける。

真っ白なＴシャツだけが、ビツシリとたたまれていた。

襟首にH A N E Sのタグが並んでいる。

次の引き出しは靴下。

その下がトレーナーや長袖のカラーＴシャツ。

結局ジーンズは一番下の引き出しに入っていた。

尚美は折りたたまれたジーンズを引っ張り出す。

男物のジーンズは、自分のものよりも重量感を感じた。

ワイルドウォッシュの古着風だった。

コレでいいかと足を入れようとして、一瞬とまる。

下半身を覆うもの。

それを男の子に借りていいのだろうか？　そう言つてアリ？

そんなよく判らない理屈が頭の中を過つたのだ。

でもシャツだけというのも無理だ。何だかとてもみすばらしい……

…。

その時ドアが外側からノックされる。音の方向でノックだろうと尚美は理解した。

「待って、まだ開けないで」声には出ない。

ジーンズを掴んだまま、慌ててドアに駆け寄る。

廻ってもいないドアノブを掴んだ。

駆け寄った余力で身体がドアに当たって、バンツと音を立てる。

その時、圭吾に開ける気は無かった。

ノックを試してみたものの、彼女には判らないだろうと思い待つ事にしたところだった。

が、ドアの内側で何かがぶつかり音を立てた。

「おい、大丈夫か？」

尚美が抑えたノブはあっさり廻されて、ドアが開く。

「おい、どうしたんだ？ 大丈夫……」

圭吾は再びそう言いかけて止まった。

尚美は彼のシャツだけを羽織った姿で、呆然としていた。

ボタンはまだ半分で、白い首元から下の鎖骨が浮き出ている。少し肌蹴た胸元からは、小さな白いブラが少々覗いていた。

シャツの中から伸びる白く細い太股が、とても華奢に見えた。

スカートの下から伸びる見慣れた脚とは、まるで別の物に感じる。

視線を泳がせて、圭吾は慌ててドアを閉めた。

目に焼きつくような情景に、心臓が跳ね上がる。

尚美は頬を熱くさせながらも、少々冷静だった。

ドアノブを掴んで、少しだけドアを開ける。

「もう、ちよっと、待って」

途切れ途切れに言う。

『ああ、ゆっくり着ろよ』

圭吾はドアの隙間から手を出して、彼女に伝えた。

結局、尚美は圭吾のジーンズを履いてリビングへ下りた。  
ウエストも太股もぶかぶかで奇妙な感じだ。裾は折り曲げて対処する。

制服は彼の部屋の窓辺にハンガーで掛けて干してきた。

尚美はダラリと長い袖を振りながら、その袖口から手を出すと

『圭吾も着替えれば？』

「ああ、そうだな」

視線が彼女の胸元に泳ぐ。

手話でよかったと思った。

今は何故か、真正面から彼女の目を見れない気がした。

## 【25】アリガトウ

「痛てっ」

圭吾は思わず身体ごと顎を後ろに引いた。

唇の淵を切っていたし、頬に小さな痣が出来ている。

尚美は濡れタオルとキズ消毒液を持って、彼の横に座っていた。

脱脂綿に浸した消毒液を、唇の淵につけた途端、圭吾が声を上げたのだ。

「もうチョットそつとやってくれ」

尚美は両手に持った脱脂綿と消毒液をテーブルに置いて

『そつとやってる』と手を動かす。

「本当かよ。いまメチャクチャ痛かった」

『それは、怪我をしてるからしょうがないんだよ』

尚美は自分のグラスを掴んで口へ運ぶ。

「じゃあ勝手にして」という素振りだ。

ちよつと彼の様子を盗み見る。

圭吾は自分の手で濡れタオルを掴むと、たどたどしく頬に当てた。

「やつぱ痛てえ」

拳にも痣があつて、手の甲に引っかけ傷がある。

その痛々しさに、尚美は小さく肩をすくめた。

彼女は再び消毒液を脱脂綿に着けて、彼の手の擦り傷に当てる。

頬の上の彼の瞳は間近で見るととても澄んでいて、琥珀色に近い

虹彩が小さく揺れていた。

その瞳がスツと細くこわばって、小さく瞬きした。

「あいつら……おまえの事、障害者だつて言いやがって」

彼は窓の外に細めた視線を留めたまま呟いた。

「だって、そうでしょ」

尚美は彼の手の傷をふき取る。

別にそう呼ばれる事には今更抵抗はない。事実、障害者カードの

恩恵も受けている。

滲んだ血液が、白い脱脂綿をえんじ色に汚してゆく。

「違う……」

圭吾の口が動いた。

尚美は彼の横顔から唇を読む。

雨音は静に部屋に流れ込んでいた。

庭木の葉をそつと叩くその音さえも、彼女に聴こえはしないのだが……。

「ナオはナオさ。障害者なんていう差別的な呼び方はムカつくんだよ」

彼が一番腹立たしいのは、彼らが暴力を止める間際に言った一言だった。

小学校の頃、妹の事を障害者と呼ばれて喧嘩になった事も実際にある。

その時も悔しかった。

記憶は混濁して蘇える。

袋叩きにされる中で意識は朦朧としていたが、あの言葉は確かに耳に届いた。

しかし、反撃する余力は既に無くて、そんな不甲斐無さが余計に悔しかった。

「アイツらは、判らないんだ」

呟くように圭吾の唇が小さく動く。

「仕返し、なんて、しないでね……」

すこし上ずった声で、尚美は言った。

それでも最近声を出す事は以前より増えたから、トーンが不安定になる事も少ない。

圭吾はチラリと尚美を見て、再び窓の外を見つめる。

尚美はその瞳があまりにも近い距離にある事に気づく。

頬を押さえた左手の甲についていた血痕はキレイにふき取られた。時間が経つに連れて、頬の痣は鮮明になって行く。

彼の掌が半分覆った頬から、彼女はそつと距離をとった。

もともと絡まれた理由は、彼の身なりや態度にある。もちろんそれは、絡んできた連中の量りの基準での事だが……。

しかし、それはそれ。最後に発した言葉は、圭吾にとって許せない言葉だった。

それまでの掴み合いに何の意味があつたのだろうか……。

振り下ろされた拳。蹴りつけてきた何本もの脚。

そんな物理的な衝撃は何処かへ跳んでゆく。

身体障害者……いかにも健常者とかけ離れた存在と認識させるような呼び名。

その分け隔ては、圭吾が一番嫌いな呼び名だ。

「アリガトウ」尚美は言った。

圭吾はふと振り返る。

「助けてもらったのはこっちだ」

尚美はブンブンと首を振る。まだ湿った黒髪が大きく揺れた。

彼の傷ついた横顔に添えられたキズだらけの手が、とても愛おしいと思った。

彼をもつと知りたいと思った。

圭吾の肌に触れたいと思った。

尚美は彼の手に触れたまま、首を振り続けた。

圭吾の手がフツと、尚美の手から抜ける。

「ちよつと痛いんだけど」

「ゴメン……」思わず苦笑した。

圭吾は小さく肩をすくめると、尚美の方に斜めに身体を向ける。

彼の膝が、尚美の膝にコツンと触れた。

その衝撃は下半身を揺らして腰骨と脊椎を通り抜け、胸の芯まで到達する。

右掌を水平にしたまま、圭吾は自分の胸元で大きな円を描いた。

尚美の胸元を、彼の指先が掠める。

その右手を垂直に立てる。

今度は水平にした左掌を弾く様に、右手で垂直に軽く叩く様にク  
口入させた。

ピクリと尚美の鼻が動いた。

大きく瞬きをして、彼の手の動きの残像を追う。

それは『ありがとう』の意味。

圭吾の唇も、確かにそう動いた。

外から聞こえる雨音のノイズはすでに消えている。

大きな窓から微かな陽射しが入り込んで、レースの白い影がチラ  
チラと潇洒なカーペットの上で揺れていた。



## 【26】傘

「俺には、妹がいたんだ」

「いたって……もしかして、今はもう……」

「いや、ちゃんと生きてるよ。離れて暮らしてはいるけどね」

圭吾は、妹が聴覚障害を持っていた事や実の母が妹だけを連れて出て行った事を尚美に話して聞かせた。

誰かにこんな話をするのは、まったく初めての事だった。

尚美は黙って彼の唇を読んでいた。

彼が話すまま、食い入るようにその言葉を読み続けた。

『だから手話が上手なんだね』

尚美は自分のグラスを手にとってひとくちコーラを飲むと、直ぐにそれをテーブルに置く。

『あたしの家族も、手話が上手よ』

「俺の家族は……父親と今の母親は、手話はできないよ」

『お父さんも？』

『ああ』

圭吾も手を動かした。そして話す。

「親父は仕事人間さ。転勤が多くて、家族より仕事が優先なんだ」

圭吾は今まで幾度と無く転向させられた事、転勤が多くて妹の手話教室の通いが大変で結果的に母親が連れて行ったらしい事を話す。

「今度もまた何時転勤になるか判らない」

「じゃあ、また転校するの？」

尚美の中に不安が沸き乱れて、眉を潜める。

「いや、今はまだ判らない。暫くこの町にいる予定では在るみたいだ」

圭吾はペットボトルのコーラを自分のグラスに注いだ。

尚美は心の中でそっと息をつく。

重くせりあがった不安が、溶けてゆく。

何故不安になったのか……。

どうしてホッと息をついたのか……この時は考える時間がなかった。

「だけど……」

圭吾は話しを続ける。

「だけど？」

尚美は彼の唇を一心に見つめた。

「なんでもない。別に今考える事じゃないな」

『そのうちまた、転校する？』

尚美が両手を動かして問う。

彼女の澄んだ虹彩の中心に、圭吾は自分の姿を見た。

「いや……やめよう。そんな事、俺らには判んないし」

圭吾は言い出せなかった。

転校は平気だ。ただ、消えてなくなる友達ごっこはしたくない……

……そんな言いがかり的な考えは、自分が弱いからかもしれない。

それを言葉に出す事さえ、躊躇した。

彼は痣の浮き上がった頬を摩りながら

「ウサギ、雨に濡れなかったかな」

そう言って、窓の外に視線を向けた。

西に傾いた陽射しの外で、カラスが鳴いていた。

「あら？ ナオ、制服はどうしたの？」

帰宅した尚美は、そと玄関に入ってネコのような足取りで階段へ向う途中、母親に出くわした。

「あつ……」

学生カバンを抱えるジーンズ姿は、確かに妙だった。

しかもサイズがメチャクチャだ。

制服は完全に乾かなかったから、小さな紙バックに入れて持ってきた。

尚美はカバンを放り投げるようにして手を空にすると

『ちよつと……あんまり雨に濡れたから、友達の家で着替えてきた』

「雨に濡れたって……あんた、今日傘持って行っただじゃない」

母親が眉を潜める。

『傘は……』

彼女は苦笑すると『友達と一緒に入ってたら、雨が強くなつて』

母親は上から下まで尚美を眺める。

シャツの袖もジーンズの裾もぶかぶかだ。

「大きい友達なのね」

「う、うん……」声を出して尚美は頷いた。

『あたしは、小さい方だし……』

「それもそうね」

母親はそれ以上、追求はしなかった。

ただ、洋服を貸してくれる友達が尚美にもいる事に安堵した。

「その怪我、どうしたの？」

黙々と夕ご飯を頬張る圭吾に、母親が訪ねる。

何時ものように食卓に父親はいない。

帰って来るのは何時も夜の10時は過ぎるから、夕飯はふたりきりだ。

そして父親が帰る時間、圭吾は必ずと言っていいほど部屋にいる。もう一週間ほど顔を合わせていないが、それは今に始まった事ではない。

「別に……ちよつと」

切れた唇は食事がとりにくかったが、圭吾は出来るだけ平気なフリをしてご飯を口へ運んだ。

「別につて、頬にも痣ができてるわ」

細い指が、圭吾の頬へ伸びる。

彼は少し顔を引いて、それを拒んだ。

「何でもないよ」

少し強い言い方に、義母は口を閉ざす。

それでも彼女は彼女なりに圭吾とのコミュニケーションを望んでいた。

母親ぶるつもりも無いが、家族として上手くやって行きたいと思っていた。

「今日は、誰か来たの？」

気を取り直すように、笑って再び圭吾に訊ねる。

「別に……」

「尚美さん？」

圭吾の箸が一瞬とまる「なんで？」

「玄関に紅い傘があるから」

彼女は滅多に見せない悪戯っぽい笑みを零すと、湯飲みにお茶を注いで

「あれって、誰のかなあ。って思ってたね」

圭吾は黙って味噌汁を啜った。

「痛っ……」少し沁みる。

日中の雨がウソのように、紺青に月が輝いていた。

雨に洗い流された大気は、月影に碧い雲を浮き上がらせる。

尚美は思い立ったように空の写真集を本棚から引っ張り出していた。

夕焼けに染まる海岸、チューリップ畑を見下ろす蒼い空と夏雲。

ふと自分の左手の甲を見つめた。

右手の指先4本でそこに小さな円を描く……会話の中ではよく使う動作『好き……』の手話表現。

好きな食べ物や好きな飲み物、好きな色、好きな動物。

どれも同じゼスチャーを使って表現する。

でも 『愛している』という感情表現も同じなのだ。

人を好きになった時に使う言葉。

相手に好意を示す表現……。

尚美は我に帰ったように、左手の甲をゴシゴシと擦った。

いま描いた言葉をもみ消すように、何度も擦った。

胸の奥から何かがせり上がる。背中がソワソワして、集中できない。

彼女は静かに息を吸って長く吐き出すと、空の写真集を閉じる。  
数学のテキストの続きに視線を向けた。

あっ……。

圭吾の家に、自分の紅い傘を忘れてきた。

## 【26】傘（後書き）

ご覧頂きありがとうございます。

少しずつ話しは進んでいます。

時折連載ペースが不規則になりますが、よろしくお願いいたします。

## 【27】季節はめぐる

空が高く果てしない。

ガラス細工のような蒼に、白い満月が浮かんでいる。

雲は光を浴びて白く長く尾を引くようにかすれていた。乾いた風に乗って、赤とんぼが宙を滑っては立ち止まる。

秋の強い陽射しは、切なげに頬を白く照らす。

夏休みは追い風に煽られるように駆け足で過ぎた。

1学期、知り合いは増えた気がする。

でも友達は……。

電話で誘えない尚美を、夏休み中に誘う者はいなかった。

駅前で2回ほど圭吾に偶然逢い、一緒にお昼を食べたのが最大のイベントだった。

ケイタイ電話が欲しい……。

尚美はこの頃無性に携帯電話に焦がれ始める。

ケイタイがあればメールで連絡を取り合える。

友恵や由加子とだってきつとメールできる。そして圭吾とも……

もつと言葉のコミュニケーションを取れる気がした。

姉の志美は何時もケイタイを持ち歩いていた。

ふと気付くと誰かとメールをしている姿が目につく。

それでも中学生の自分がケイタイを持つ事に、あまり望みはない。クラスでも携帯電話を持っている生徒は半分もないし、バイトが出来ない中学生にはまだまだ高値の華だった。

相変わらず圭吾はクラスではほとんど口を開かない。

由加子と友恵が時折声をかけているようだが、そんなに楽しそうにも見えない。

男子さへ、滅多に彼には声をかけないし、一緒に談笑している姿

もみかけない。

尚美は時折、圭吾と一緒に帰る事もあった。

一緒といつても、学校を出て暫く行ってから農協倉庫の前あたりで、先を歩く彼に何時も尚美が追いつく。

駆け足だから何時も彼女は息を切らしていた。

圭吾は彼女の気配を後ろで感じると振り返って「よお」と言う。

別に喜ぶ素振りも鬱陶しい感じも無い。

ただ、尚美が容易に追いつけるのはきつと、彼が歩くスピードを緩めているからに違いない。

どうして学校ではあまり話しをしないのか訊いた事はない。

以前屋上で交わした会話の意味も、尚美には未だによく判らなかつた。

彼の学校でのスタイルそのものがそうだし、逆に自分とだけ親しげに会話を交わしたらクラス中で何を言われるか判った物ではない。それでなくても、手話が出来る圭吾は尚美と怪しい関係に在ると、陰で囁く者がいる。

まったく無意味な流布だ。

手話が出来る事を賞賛するならともかく、それをネタに色眼鏡で見える事は非常に低俗で無意味な感情だ。

圭吾は学校で手話を見せる事は無いし、尚美もあえてみんなの前で彼に手話で話しかけたりもしない。

「館内、手話教えるよ」

誰かが悪戯半分に圭吾に近づいた。

彼はフツと静かに声を立て、一笑に付した。

「なあ、織堂もブログとかやれば？」

久壁純ひさかへじゅんが尚美の席の前に立って笑う。

あさのあつこの小説をパタリと机に置いて、彼女は彼を見上げた。  
「もしかして、お前もネットとかやってんの？」



昨夜のテレビで、聴覚障害を持つネットアイドルの特集が流れたのだ。

17歳の少女は妹系のなかなか可愛らしい風貌で、とあるサイトで人気上昇中なのとか。

尚美も少しだけその番組を観た。

観たけれど、直ぐに違うチャンネルに変えてしまった。

少しだけ羨ましく思ったけれど、ネットの社会に浸る事は、今の自分の環境では不可能だ。

それに、知らない誰かと交流を深めるなんて、逡巡する気持ちの方が勝るだろう。

「織堂もネットなら普通じゃん？」

久壁は一方的に話す。

尚美は困惑した笑みを浮かべて、彼の唇を読んだ。  
どう応えていいか、正直困る……。

「今だって、別に普通じゃん」

由加子が近づいてくる。

「ねえ」

由加子の言い方が嬉しくて、尚美の顔がほころんだ。

「別にそうだけどさ……」

久壁はそのまま尚美の前の席に腰掛ける。

「ケイタイブログとかやってみれば？」

彼は自分のケイタイのカメラレンズを彼女に向ける。

「だってナオはケイタイ持ってないから」

由加子が久壁と尚美の間に掌を差し出す。

勝手に写メなんてとんでもない。

「じゃまじゃま」

「何言ってるの。勝手にナオの写メ撮らないでよね」

「ちえっ。4組の伊藤に頼まれたのに」

久壁が手元をズラして、由加子に向けてシャッターボタンを押した。

由加子は咄嗟に顔を手で遮りながら「ちょっと!」

しかし、彼の言った伊藤に興味が移る。

「誰よ伊藤って。伊藤誠?」

伊藤誠は、陽鳳小学校6年生の時の生徒会長だ。

由加子は隣の小学校から来たが、実は小6の時に生徒会長を勤めていたので、伊藤誠を少しだけ知っていた。

「アタリっ!」

久壁が笑う。

「なんで伊藤が?」

「しらねえよ。でも……まあいいか」

彼が意味深に口を噤む。

「何よ、でも、ナンなの?」

「織堂のこと気になってるヤツ、他にもいるぜ」

由加子が思わず尚美を見ると、尚美も由加子を見ていた。

困惑の笑みがぶつかる。

「じゃあ、自分でナオに声かければいいじゃん」

由加子が眉を寄せて笑う。

「それがなかなかねえ」

久壁は眉を動かして外を眺めると

「手話の出来るヤツに敵うかどうかってさ」

わざと圭吾に背を向けた。

尚美がピクリと動く。

由加子が圭吾を盗み見た。

尚美は顔の前で手を左右に振った。彼とは何でもないというゼスチャーだ。

顔は紅潮しなかったが、髪の毛で隠れた耳は熱くなっていた。



## 【28】独り

冷たい風の中を、一人で歩く影が在った。

尚美は二階の窓から圭吾が既に正門を出る姿を見て、追いかけるのを諦めた。

これだけ離れた距離では、もう追いつけない。

小さく息をついて廊下の窓から視線を巡らすと、直ぐ下を歩く友恵を見つける。

校舎の大きな影が、彼女を押し潰していた。

尚美は力バンを強く握ると、小走りに階段を駆け下りた。

昇降口を出ると、友恵の姿が正門を出るところだった。

尚美はひとつ肩で息をついて、再び走り出す。

力なく歩く友恵には、容易に追いつく事ができた。

後ろから肩を叩くと、彼女はビックリして肩をすくめた。

振り返り、尚美を見て安堵する。

「ああ……ナオ」力なく言った。

友恵は川田真穂のグループを抜けた。

結果は判っていた。

他に属するグループなんて見当たらない。

真穂たちの息のかかった小さいグループは、友恵と口をきかなくなつた。

そういつた雰囲気を感じた他の女子も、何となく彼女には声をかけない。

そうすると、何故か男子とも話しくくなるモノだ。

放課後の帰りは、真穂たちと昇降口を出るのが恒例だった。

家の方角が違ってから何時も昇降口までしか群れを成さないが、それが彼女にとっては心地よいスタイルでもあった。

\* \* \*

「織堂つて、やっぱ目障りだよな」

川田真穂が言った。

周囲を囲む何人かが、同意の意味で頷く。

普段地味な存在でハンディを背負っているのに、自分たちより学力が高い事に不満があった。

それは努力する者としていない者の差でもあるが、そんな事は考える由も無い。

ただ気に入らない……彼女達の中では、それが全ての感情だ。

「伊藤誠つて、小6の時真穂にコクツてたよね」

「そうだよな。何で尚美に興味持っちゃうわけ」

久壁と尚美のやり取りを、美里が聞いていた。

「それつて、尚美と真穂が同等つて事？」

真穂はその言葉に強く反応した。

「まさか。もの珍しいだけでしょ。それとも二年後の生徒会狙つて慈善行為に走つてるんじゃないの」

「それつてありえそう」

彼女達はいつせいに笑った。

「ねえ、あたしいい事考えたんだけど」

アイディアを出したのは木村美里だ。最近真穂と一番仲がいい。

「伊藤と尚美をくつつけちゃおうよ」

美里は唇を吊り上げて笑う「らぶらぶレターとか送っちゃおう」

伊藤誠と尚美の下駄箱に、双方からのラブレターを入れて、お互い待ち合わせ場所に行かせるという悪戯だ。

もちろん、本当はふたりがくつつくななんて思っていない。

待ち合わせ場所に行こうが行くまいが、ただふたりを困惑させたいただけだ。

精神的に迷走させて楽しむ悪質な悪戯を好む連中が、時に存在する。

「それって面白そう」

真穂が笑った。

久しぶりに獲物にありついたコヨウテのような鋭い目つきで、彼女は読書中の尚美を見つめる。

「ごめん真穂、あたしそういうのはちょっと」

友恵が口を開いた。

真穂を囲む中に姿があった。でも、最近あまり彼女らに同調できず困惑していた。

「友恵は尚美と仲いいもんね」

美里が横から言い返す。

「そんな事ないけど」ついそう言ってしまう。  
前から気付いていた。

真穂たちとは本当に仲良くはなれない気がする。

彼女達の行動には何時も戸惑ってしまう。

自分の居場所はどこではないような気がする。

ただ、真穂とつるんで一緒にいると、クラスの女子とも話し易い男子ともふざけた会話を交わせる。

中学校生活を、さも謳歌しているような錯覚に陥る。

しかしそれは偽りの喝さい。

自分はムリをしてそれについていこうとしている事に気付いた。  
だからと言って、孤高に振舞う自信なんて無いのだけれど。

「じゃあさ、友恵は他とつるみなよ」

真穂が言った。

顔は笑っているが、声は冷え切って冷たかった。

翌朝、何時ものように友恵は教室へいた。

真穂たちが騒がしく教室へ入って来ると、仲のよい男子とも弾けた挨拶を交し合う。

「おっは〜」

「よう!」

「田中、今日は早いじゃん」

男子との自然な交流。

友恵は近づけなかった。

何時もの朝は真穂たちの視線が友恵に止まって、そのタイミングで彼女は真穂たちに近づくが、もう誰も友恵に視線をくべる者はいなかった。

クラスの連鎖は、無言のうちに広がった。

何処かに真穂のグループにしていると言う驕りが、友恵の明るさを後押ししていた。

独りになった今、彼女は以前の明るさを失ってしまった。

\* \* \*

正門の近くまで来ると、校舎の大きな影からふたりは抜け出した。影の外は、蒼穹<sup>そら</sup>から注ぐ光で満ちていた。

花壇の向こう側に見える校庭のトラックでは、陸上部が準備運動を始めている。

軟式テニス部がボールを弾く音が、校舎の向こうから聞こえてきた。

「いつしよ、に、帰ろ」

尚美は小さな声を出す。

「気を使わなくてもいいよ。今のあたしに関わると、ナオも弾かれるよ」

尚美は笑って

「べつに、関係、ないよ。あたしには」

その言葉は、今の友恵にとって心強かった。

尚美は独りで頑張ってきた。

自分の知らない障害者という孤独の中でずっと生きてきたのだろ

う。

いや、彼女が孤独を感じたかは定かではない。尚美の温厚な明るさは、瞬発的な友恵のものとは何処か異質で、自然に人を和ませる。尚美のコレまで過ごした人生に比べたら、自分の孤独などちっぽけな気がした。

「ナオは強いよね」

友恵は寂しそうに笑った。

「そんなこと無い」と言いたげに、尚美は首を横に振って明るい陽射しに照らされるまま笑った。

制服の小さなポケットからキャラメルを取り出すと、友恵に差し出す。

友恵は少しだけ明るく、ふっくらとした笑みを浮かべてそれを受け取った。



## 【28】独り（後書き）

ご覧頂き有難う御座います。

お気づきの方もいると思いますが、この作品では主人公と周囲の登場人物一人一人、個別の交流を描くスタイルをとっております。

その中で、ジャンルで指定した流れが進んでゆきます。

今後ともよろしくお願いいたします。

## 【29】悪だくみ

スカートを揺らす風が、素足にはかなり冷たく感じた。

そろそろストッキングかな。と、思いながら、尚美は家を出る。

しかし、登校中に見かける中学生は、まだみんな素足をさらして平気な顔でいた。

既にマフラーを巻いている娘も、脚は素足のままだった。

そう言えば途中で見かける高校生も、短いスカートから覗く脚はまだまだ素足ばかりだった。

自転車をこぐ白い生脚が、寒々と風にさらされていた。

校庭の道路に並ぶ銀杏並木は、いつの間にかだいぶ色を落として、きみどり色から黄色に変わろうとしている。

尚美は昇降口を入れて下駄箱を開ける。

何でも無いいつもの行動だった。

何時ものように無造作に上履きを取り出すと、ポトリと何かが足元へ落ちた。

きみどり色の小さな封筒だった。

何かしら？

尚美は拾い上げてみる。

キレイなきみどり色をした無地の封筒で、中には確かに何かが入っている。

自分の下駄箱に入っているという事は、やはり自分宛なのだろう……。

突然誰かが肩に触れてきたので、彼女は慌ててポケットに小さな封筒を押し込んだ。

「おはよう」

友恵だった。

彼女とはよく一緒に学校へ来るが、待ち合わせをしているわけではないので、途中で出会わなければ別々に登校する。

今日は尚美の方が少しだけ早かったのだ。

「お、おはよう」

この言葉は大分言いなれてきた。

「どうしたの？ ポケットとしちゃって」

「う、ううん。別に」

ふたりは一緒に階段を上がった。

教室へ入ると、まだクラスの半分は来ていない。

友恵は尚美の席の横で少しだけ話しをした。

小さな声で、片言で会話を交わす事に抵抗を感じないのは友恵が一番だった。

きつと入学当初の印象から、自然に平気になったのだろう。

由加子はクラスで2、3番目に学校へ来る。

週番がサボった黒板の掃除などを何時の間にかこなしている。

尚美が来る頃には何時も読書をしているが、最近は尚美に話しかけて来る事も多い。

独学で手話を勉強しているらしく、尚美は少しだけ手話を取り混ぜる。

ただ、やっぱり圭吾のように自然に会話を行き来させるのは難しかった。

それでも、空き時間を使って片言のお喋りをするのは、尚美にとって心地よい行為だった。

《今日の放課後、屋上へ出る西階段の踊場で待っています。

伊藤  
》

1時間目の国語の授業中、尚美はポケットから朝の封筒を取り出して封を開けた。

思わず息を呑む。

中からは折りたたまれた白い便箋が出てきた。広げてみると、B5サイズの小さな便箋だった。

文字はワープロで打たれている。

伊藤と言えば、この前久壁が言っていた伊藤誠だろうか……？

尚美がまず頭に浮かんだのはそれだった。

全校集会の時に何度か見かけた事はあるが、もちろん言葉を交わした事は無い。

周囲をチラ見する。

このクラスにも伊藤という男子はいるが、太って髪はボサボサ、何だか他の仲間とアニメの話ばかりしている。

どう考えても自分に興味をもっているとは思えない。

ふと気付くと、友恵が心配そうにこちらを見ていた。

「やつぱり……」

友恵が呟くように言った。

呟くような口の動きは、非常に読み難い。

トイレに入ったふたりはB5の紙を眺めていた。

小窓から入り込んだ陽射しが、ピンク色のタイルを淡く照らす。

「ナオ、これ真穂たちの仕業だよ」

「なんで……？」

「ナオを困らせる嫌がらせよ」

友恵は前に聞いた真穂たちの企みを、尚美に話して聞かせた。

きっと伊藤誠の下駄箱にも似たものが入れている事も。

「じゃあ、教え、ないと」

「何を？」

尚美は長い言葉がまだ苦手だ。

「伊藤くん……」

「伊藤はいいよ。どうせ来ないって。あんたが気付けばそれでいいじゃん」

尚美は曖昧に頷いて、困惑した笑みを浮かべた。

「とりあえず、あたしトイレ」

個室へ入る友恵を、尚美はただ見送った。

「へえ、ナオもホテルじゃん」

圭吾の一言目はそれだった。

『真面目に聞いて』

昼休みの屋上で、尚美は頬を膨らました。

もう「俺にかまうな」なんて、圭吾は言わなかった。ただ蒼い空を時折見上げて、彼女の話を聞き入った。

正確には、手話に見入ったのだけれど。

尚美は4組の伊藤誠の話しをして、何とか彼に悪戯の手紙の事を伝えて欲しいと言った。

「でも、そいつがナオの事を好きなのは確かなんだろ？」

『知らないよ、そんなの……』

彼女はゆるゆると手を動かす。

「それでふたりがいい仲になるかもしれないぜ」

圭吾の笑いを初めて憎たらしいと思った。

『圭吾は、あたしと伊藤君がいい仲になった方がいいの？』

「さあね。俺、伊藤誠なんてしらねえし」

『あたしだってほとんど知らないよ』

「せっかくだから、逢って話してみれば？」

『ヤダよ。ひと事だと思って。話せるわけないじゃん』

「なんで？」

『ムリ。声がうまく出せない』

校内でも、尚美が声をだして話す相手はほぼ決まっている。

それでさえ、できるだけ片言にしているのだ。

「ちゃんと出るよ」

『でもムリ』

いくら他人に言われも、自分で確認する術がない。

もちろん、発声訓練用の器機があれば、音量とか発音とかをコンピュータで表示してくれるのだらうけれど。

尚美の困惑する眼差しに、圭吾は肩をすくめた。

【29】悪だくみ（後書き）

作中の誤字・脱字を少し手直ししましたが、時間が足りなく完全ではありません。

何卒、ご了承ください……（^^；

## 【30】目くばせ

「で？ 俺は何をすればいいんだ？」

圭吾は身体を起こして、運河を眺める。

『だから、手紙がもし届いてたら、誰かの悪戯だから。 って伝えてよ』

「内容が、ナオについてなのに、俺が言うの？」

確かに妙だ。

まるで尚美の管理を圭吾がしていて、それは事実にも反する。と主張しているようでも在る。

「ううん……」溜息に混じって声が漏れる。

下唇を少し突き出して、頬を膨らます。

「俺より、由加子にでも頼んだほうがよくない？」

圭吾は立ち上がった屋上の金網に手をかけた。

「そつ、なの、かなあ」

彼の背中に声をぶつける。

運河の小波が午後の陽射しに照らされて、白くきらめいていた。

真穂とその仲間らはベランダに寄りかかって談笑していた。

「ねえ、放課後どうなるかな？ どっちかは行くかな」

「両方行ったらどうする？」

笑が外へ響く。

他のクラスでもベランダで談笑する声が零れて、それは虚空に向って入り乱れた。

真穂は読書をする尚美を見て、目を細める。

「どうするか、放課後観察する？」

里美が真穂の腕に手をかける。

「いいよ別に」



真穂は、冷たい笑みを浮かべたまま尚美から視線を逸らした。

「伊藤ってお前？」

「ああ、そうだけど」

「変な手紙もらってないか？」

「なんだよ、変な手紙って」

5時間目の休み時間、4組のドアの前で圭吾は伊藤誠を呼び出した。

伊藤はほっそりとした出で立ちで、短い黒髪に色白のキレイな顔をしていた。

いかにも淡泊そうなかんばせに、細みの黒いメガネをかけていた。

圭吾よりも僅かに背が高く、彼は伊藤を少しだけ見上げる。

「だから、変な手紙」

圭吾はどう説明していいか思わず窮する。

「もし貰ったら、それがどうしたんだ？」

「もし……誰かに呼び出されたら、それってウソだから  
しまった。」

圭吾は言い方を間違えたと思った。

この言い方では、まるで手紙を出したのが尚美本人で、彼女がい加減な人間に思われそうだ。

「お前なんなの？」

伊藤は訝しげに圭吾を見る。

「別に、ただ忠告に来ただけ」

「何を？」

「だから……」

圭吾は茶色の髪をかきむしると

「だから、もし手紙をもらっていたら、それは本人からじゃなくて、

ただの悪戯なんだよ」

伊藤は瞬きひとつしなかった。

「お前は どうして そんな事知ってるんだ？ 悪戯した。てのは、お前なの？」

「違うけど……」

だから言ったんだ。ややこしい……。

「とにかく、誰かに呼び出されてものこのこ行くなよ。行っても誰もいねえぞ」

圭吾は面倒くさそうに言い捨てると、その場を離れた。

6 時間目のチャイムが鳴ると同時に、圭吾は自分の教室へ戻ってドカリと椅子に腰掛ける。

クラスの喧騒はそんな彼に気付かないかのように、何時も通り教師が来るまで尾を引く。

尚美は圭吾が何処へ行っていたのか気になっていた。

昼休みの頼みを聞いてくれたのか……それとただ単に何処かへ出かけていただけなのだろうか。

教師が教室のドアを開けると、雑踏は静まる。

尚美の視線に気付いて、圭吾は彼女視線を向けた。

話してくれた？ 尚美が目でささやく。

届いたか……？

彼は眉を少し動かして「どうだろ？」というように肩を少しだけすくめた。

何か行動をとってくれたのは、その仕草で覗えた。

どうなの？ 尚美が小さく瞬きする。

圭吾は小さく首を横に振って、「さあね」という感じでソップを向く。

尚美はそんな彼の姿を少しだけ見つめた。

密かに目と目で交わした片言の会話は、何故か胸を高鳴らせる。

一見素っ気無く見えるが、彼女にはそれが彼の表現の一つだと判

っていた。

誰にも判らないふたりだけの視線の会話は、手話よりももっと親密で、まるで心が通じ合えたような錯覚さえ沸き起こる。

それがどれ程自分の予想通りだったかは、定かではないのだが……。

窓の外では、体育の授業をする生徒たちが校庭のトラックを走り出していた。

半分開いた後ろの窓で、白いカーテンが揺らいでいる。

圭吾をチラ見している尚美の耳に単調なノイズが聞こえてきた。

それは、教師が黒板をチョークで叩く音だった。

## 【31】ウロコ雲

放課後の喧騒が過ぎ去ると、北側に面した廊下は薄暗くひっそりとしていた。

尚美は4階の廊下で、さらに上階へ行こうとする姿を探した。音楽室から吹奏楽部の吹く管楽器の音が聴こえてきた。

尚美に届くのは、もちろん波のようなノイズだけで、ただ楽器の響きだという事はなんとなく判った。

圭吾は何時の間にか、いなくなっていた。

「ナオ、早く」

友恵が尚美の腕を引っ張る。

彼女は見知らぬ罪悪感に阻まれて、足取りは重かった。

「考えたってしょうがないよ。ナオが出した手紙じゃないんだから、シカトしたって平気だよ」

友恵は尚美の腕を引っ張りながら、階段を足早に駆け下りる。

尚美は彼女に引かれるまま転ばないように、下り階段で足を運ぶ上階の先が頭上で遠のいてゆく。

チラリと上を見上げる。

四角い螺旋が、踊場から入り込んだ陽射しの影に消えて行く。

何階の廊下で談笑しているのか、女子の笑い声が微かに響いていた。

伊藤誠は来るだろうか。

もし来るとしたら、やっぱり自分に興味を抱いているのだろうか。興味があるとしたら、いったい自分の何処に……？

尚美は頭上を見上げて立ち止まる。

しかし、直ぐに友恵の手に引っ張られて、結局昇降口まで来てしまっていた。

由加子が部活に向かうため階段を上って来ると、音楽室の在る4階の踊り場で呼び止められた。

校舎の階段は建物の両端に在るのではなく、ひと教室分だけ内側に階段が設置されていた。

階段を上がりきった各階は左右に廊下が伸びて、片方はひと教室で突き当たる。

4階の西側突き当りには視聴覚室があつて、放課後はほとんど使われていない。

声はその方角からあつた。

由加子は吹奏楽部が使う音楽室へ向かうため、校舎の内に向かつて廊下を進もうとしていたので、背中から掛けられた声に振り返った。

「久しぶり」

彼は少し俯いて、彼女に言った。

元々細身の彼は、小学校の頃よりもずいぶん背が伸びた感じがする。

「ああ……うん。久しぶり」

学校内では何度も見かけているが、話しをするのは小6の夏以来だった。

近所同士の2校の生徒会で、親睦会の野外活動と一緒に行ったことがある。

「どうしたの？ 伊藤君」

由加子はカバンを持ち直して、彼に歩み寄る。

頭ひとつ分、彼の視線は上に在った。

「ちょっと、いいかな」

伊藤は後ずさりしながら、遠慮気味に視聴覚室に背中から入った。由加子は後ろを見て、廊下に誰もいない事を確認してから同じドアをくぐる。

「何？ どうしたの？」

少しだけ胸が高鳴る。

「ちよつと相談ごと……」

伊藤はポケットに手を入れると「コレなんだけど」

小さな水色の紙を取り出して広げる。

そこには、今日の放課後、屋上で待っているというメッセージが綴っており、最後には織堂尚美の名前が書いてあった。

「田中つて、織堂と同じクラスだよな」

由加子は小さく頷くと怪訝そうに

「そうだけど……」

「これつて、彼女だと思う？」

伊藤は小さな便箋を彼女に向つて、少しだけ左右に揺する。

由加子は紙に書かれた文字を少しの間見つめて、メガネを指で押さえながらひとつ瞬きする。

「違うね」キツパリと言った。

「何で？」

「彼女ならきつと、自分の字で書くよ。こういうメッセージならきつと直筆で書く娘かな」

パソコンでプリントアウトされた文字を、由加子は人差し指でポ

コポコと突いた。

「なるほどね」

伊藤は鼻を擦りながら笑うと「織堂つて、ぶっちゃけどんな娘？」

「興味あるつて、本当なんだ」

由加子は少し後ろへ下がつて、壁にもたれ掛かった。

「うん……どうかな？」

「ふん」

彼女は鼻で頷く。

音楽室から楽器をチューニングする音が聴こえ始める。

窓の外はまだ静かだった。

西に傾いた陽射しが窓から淡く室内を照らして、特設の白い長テーブルに反射していた。

「唇が読めるつてほんと？」

「どうだろ。自分で話しかけてみれば」

由加子は少しだけ悪戯な笑みを浮かべると

「じゃあ、あたし部活あるから」

そう言つて視聴覚室のドアを出る。

胸の中でそつと息をついた。

密かに高鳴つた鼓動は、きつと悟られなかっただろう。

「伊藤君」メガネに手を当てて、彼女は振り返る。

「頑張つてみれば」

「そう言っくんじゃねえよ」

伊藤は少し怒つたように笑つた。

高い空にウロコ雲の大群がビツシリと敷き詰められていた。

「気にしてもしょうがない。悪戯だつて気付くよ」

友恵がカバンを振り回す。

尚美は彼女を見て、困惑の笑みを浮かべた。

圭吾は伝えてくれたのだろうか……？

思わず空を見上げる尚美に、友恵が笑う。

「ナオつて、よく空見てるよね」

西日に照らされた飛行機雲が、黄金色の細い帯となつて一直線に頭上に伸びていた。

### 【32】誤解

家に帰ると、母親に買い物を頼まれた。

珍しい事ではなく、母親はよく尚美に買い物を頼む。

聴覚に障害の在る彼女に自転車で買い物を頼むのは少々危険がある。しかし、だからと言って家で大事に引き籠もらせる事はできない。

一人で何処へでも行き、何でもできるようにならなければいけない。

だから彼女は自分の娘に遠慮はしない。

尚美も遠慮がない家族に満足している。

普通に扱ってもらう事は、障害者と健常者を隔てない平等性を重んじている事を彼女は知っている。

それが、織堂家のモラルでもあるのだ。

自転車をこいで、運河の端を渡る。

イオンへ行く手前の食品スーパーで事足りる買い物だった。

もちろん気が向けばイオンまで足を運ぶのだけれど、今日は手前の食品スーパーの特売日だ。

スーパーのレジを抜けて買い物袋に商品を詰め込んでいると、隣の人が気になった。

何処かで見覚えのあるほっそりとした出で立ち。

私服だから気がつくのに遅れたが、それは向こうも同じだった。

「あつ……」

一瞬目が合って声を出したのは、尚美よりも頭ひとつ分背の高い伊藤誠だった。

尚美は目を細めて苦笑すると、遠慮の在る会釈をする。

つられて伊藤も会釈した。

しかし、その拍子に途中まで詰め込んだ買い物袋からマヨネーズ



とひき肉パックがぼとりと転げ落ちる。

「あ、やべっ」

拾おうとする伊藤より先に、尚美がしゃがみ込んで手を伸ばした。思わず尚美の手の上に触れて、彼は急いで手を引っ込める。

「わりい」

尚美は彼の顔を見上げて吹き出した。

彼女の笑い声を聞いたせいか、伊藤は少しホッとした。

声が出せる。噂通り、まったく喋れないわけじゃないんだ……。

「織堂尚美、だよな？」

伊藤は彼女が拾い上げた物を受け取って、袋の中に放り込む。

尚美は小さく頷いて

「あれ、あたし、じゃ、ない、から」

声を出した。

手話は通じないから、喋るしかない。

「ああ。判ってるよ」

伊藤は白い頬を揺らして笑と

「何ていったつけ、茶髪の彼。同じクラスだろ。俺のところに言いに来たよ。由加子にも訊いたし」

由加子に何を訊いたのか？ でもそれより、圭吾はやっぱり忠

告をしてくれたんだ。

尚美は何度も小さく頷いた。

ふたりは一緒にスーパーを出ると、駐輪場で立ち止まる。

夕飯の買い物ピークは過ぎて、駐輪場は空いていた。

「俺んち、この近くなんだ」

「じゃあ、圭吾の家と近いんだね。」

思っただけで、言わなかった。

ただ頷いてみせる。

「ちゃんと話せるんだな」

彼の優しさが見えた気がする。さっき発した言葉は、自分でも途切れが酷すぎた。

尚美は手を胸の前にはげると、親指と人差し指で小さく楕円の字を作る。

『ちよつとだけ』という意味だ。

手話ではない、ただのゼスチャー。

「織堂はどつち？」

ふたりは自転車を押して歩道に出た。

尚美が指差した方角は、途中まで伊藤も行く方角だった。

少しの間彼と並んで自転車を押す。

男の子と自転車を押して歩くのは初めてだ。

お互いの自転車が意外と邪魔くさい。けど、なんだかその居心地の煩わしさが心地よい。

それは圭吾と初めて一緒に歩いた時と似ていた。

「じゃあ、俺こつち」

伊藤が不意に立ち止まる。

尚美は橋通りを指差した。自分の向かう方角を示してみせる。

「橋の向こう？」

尚美が頷く。

会話は成立していた。

秘め事のように、伊藤にはそれが心地よかった。

何か特別な物を、勝手な解釈で感じていた。

「じゃあ」

長い手を上げる伊藤に、尚美も手を振った。

その時反対側の歩道を通り過ぎて行った自転車には、ふたり共気付いてはいなかった。

伊藤誠との間に、些細な誤解は発生しなかった。

尚美は清々しい気持ちで、翌朝学校へ向う。

途中の路地から友恵が出てきて一緒になった。

約束していないから、タイミングが合わなければ彼女と一緒ににはならない。

今日は陽よりもいいし、何だか運もいい。

「なんかいい事あった？」

友恵が訊く。

「う、ううん。べ、つに」

尚美はふくみ笑いを浮かべて、首を横に振る。

「ほんとに？　なんかあやしいなあ」

友恵は真穂のグループから離れたまま、明るさを取り戻した。

クラスでもごく普通にみんなに接しているし、そうすると何時の間にか周囲の態度も以前と変わらなくなった。

真穂たちとは少しだけギクシャクしているようだが、彼女達のグループに干渉しない連中は他にもいるのだ。

尚美は放課後に圭吾の姿を追った。

昇降口を出た時、彼の姿はまだ正門の手前にあった。

よし。追いつける。

尚美は小走りに彼を追いかけた。

伊藤に忠告してくれた事のお礼も、まだ言っていない。

正門を出て農協倉庫のそばより、大分手前で彼に追いつく。息を切らせて肩を叩いた。

しかし圭吾は振り返ることなく、言葉も発しない。

振り返らなかったから、声を聞き逃したのだろうか……？

尚美は黒髪を揺らして、彼を見上げるように覗き込んだ。

圭吾の視線が少しだけ、彼女を見下ろす。

「俺だけバカみたいだな」

何が？ どうしたの？

彼の口調は、どう見ても怒りを含んでいた。

「分け判んないこと頼んどいて、自分は本人と仲良くなってんじやん」

圭吾の言っている事が、尚美には理解できなかった。

彼の肩を強く引いて、自分の方を向かせると尚美は両手を動かした。

『どうしたの？ 何、怒ってるの？』

圭吾が立ち止まって彼女を振り返る。

『伊藤と仲良く並んで、自転車押してたろ』

荒らしく好戦的な手の動き。

彼は立ち止まった足を再び動かして

『まあ、関係ないけどな』

再び歩く方向へ身体を向けた。

荒ぶった手の動きに、尚美の胸に何かが突き刺さる。

昨日のスーパーでの出来事だ。

何処かで圭吾が見ていたのか……？

路地の交差点で伊藤との別れ際に通り過ぎた自転車が、実は圭吾だった事を彼女は知らない。

再び圭吾の肩を掴んで振り向かせる。

『昨日のアレは、違うんだよ』

「いいよ、別に」

圭吾は歩く足を速めた。

ぶつきら棒な演技ではない、冷たい眼差しが彼女の心の奥を突いた。

尚美は立ち止まって彼の歩き去る姿を見つめた。

後を追うことが出来なかった。

冷たい氷の剣が胸の奥に突き刺さって、苦しくて前に進む事が出

来  
な  
っ  
た。

### 【33】覚悟

今期一番の寒さが朝の大気を凍えさせた。

外へでると、息が凍るように白く煙って宙に消える。

真冬の気温に比べればまだまだ序の口だが、秋が深まった冷え込みは特に冷たさが身体を突く。

尚美は首に巻いたマフラーをPコートの合わせに押し込んで歩き出した。

圭吾とのコミュニケーションが途絶えて3日が経っていた。  
今までだって3日くらい言葉を交わさなかった事はいくらでもある。

夏休みなんて、1ヶ月半の中で逢ったのは僅かだ。

それなのに果てしなく空虚な気持ちになるのはどうしてだろう。

朝の足取りは重かった。

声をかけなくなつて、教室で彼の姿が視界に入るだけで何故か安堵した。

でも今は、幼い子供が母親とはぐれた様な不安がある。

圭吾は相変わらず誰とも親しい交流を望んでいない。

なのに自分は友絵や由加子、最近では男子の久壁もよく話しかけてくる。

もちろん会話と言うよりは、彼が一方的に話し、つまらないギャグを連発したりする。

それを見て笑う友絵や由加子の姿を見るのは好きだった。

暖かい笑いに囲まれる自分の姿は、幸福を感じる。

それでも圭吾と会話を交わせない3日間は、彼女の胸に開いた小さな風穴を押し広げてゆく。

教室で彼の姿を視界に入れるたびに、ギィギィと音を立ててその穴が大きく広がる気がした。

もっと旨く喋れたら……もっと上手に説明できる。言い訳で

きるのに。

彼に伝わらない言葉のもどかさは、何時の間にか尚美の心を苛立たせて自分を罵倒してゆく。

日曜日、尚美は友恵とイオンへ買い物に行った。

尚美は圭吾との間に起きた気まずい出来事を誰にも話していない。友恵とふたりで毛糸の手袋を買いに、雑貨屋に立ち寄った。

回転式のリングハンガーに吊り下げられた色とりどりの手袋に、ふたりはそれぞれ手を伸ばして物色した。

白いウサギの絵柄が編みこまれた手袋に尚美の手が止まる。

ライオンラビットのチョビは元気にしているだろうか……。

「どうした？ ナオ」

友恵の声に、尚美は首を振って無理に笑った。

マックでお昼を食べて、その後に友恵がトイレに立っている時だった。

オープンになった客席から、ショッピングモールの通路は丸見えだ。

そこに圭吾の義母ははおやが通りかかる。

「あら？」

彼女も直ぐに気付いて、尚美の席に近づいて来た。

「尚美ちゃんよね。こんにちは」

彼女の笑みに尚美も声を出す。

「こ、んにち、は」

尚美の声に、彼女は少し驚いて、しかし再び笑う。

『手話で話そうか？』

圭吾の義母は少しきこちなく、それでも確かに手を動かした。今度は尚美が驚く。

『手話が、出来るんですか？』

ゆつくりと丁寧を意識して、彼女も手を動かした。

『それなりにね』

彼女は尚美が聴覚障害である事を、初めて逢った時に気づいていた。

だから、話し声を聞いて少し驚いたのだ。

しかし、尚美の驚きは消えない　どうして彼女は手話ができるのだろう……。

確か圭吾は、現在の両親共に手話が出来ないと言っていた。

『どうして手話が？』

尚美の問い掛けに彼女は優しく笑うと、丸テーブルの四方に置かれた椅子のひとつにそつと腰をおろした。

『ここ、座って大丈夫』

尚美は二度頷く。

圭吾の母親は何かを戸惑っていた。

一瞬視線が宙をさまって、そして決意したように手を動かす。

『圭吾は、あたしが手話が出来ないと思ってるわ。きっと』

尚美は再び頷く。ゆつくりと一度だけ。

圭吾の母親は少しだけ間を置いて辺りを見渡す。

僅かな逡巡を感じ、尚美は小さく息を飲んだ。

『あたしは、圭吾と共に美圭とも暮らしたかったのよ』

思い出すかのように途切れ途切れに、彼女は手話を繰り返す。

『だって、兄妹は一緒にいるべきでしょ』

尚美は気を使って彼女に言う『言葉で話してください』

「そう……唇が読めるのね」

彼女は出来るだけ短く話を切り出した。

圭吾の父親と結婚する際、妹が聴覚障害だとう事は既に知っていた。



だから、ふたりの子供を共に受け入れるには手話が必要があると思ったそうだ。

前妻が連れ去った妹は、何時か連れ戻すと聞かされた上での再婚だったから。

彼女は圭吾と共に妹の美圭を受け入れる準備を怠らなかったのだ。しかし、結果的には妹の美圭は前妻が連れて行っただま戻っては来ない。

未だにその話が進展している様子は無く、おそらくこのまま妹は戻って来ないだろうとも彼女は言った。

それについて何も言う事は無いとも付け加える。

その言葉は弱々しかった。

「でも……それ、って……」

尚美は飲もうとしていたコーラの紙コップを手に持ったまま、彼女の話しに聞き入った。

圭吾は知らない。

義母にそれだけの愛がある事を。

全てを受け入れる覚悟で、家族の一員になろうとした決意を。

「いいのよ。圭吾には言わないでね」

彼女はフツと笑うと、「尚美ちゃんに言うほどの事でもないのにね」

尚美は大きく首を振った。

肩に付きかけた黒髪が、パラパラと揺れる。

「今日は誰かと買い物？」

尚美は頷いて『クラスの友達と』

「そう」義母の笑顔は穏やかで優しい。

年はたぶん自分の母親より若いだろうと思った。

若々しい服装は、年の離れた姉弟と言っても通用するかもしれない。

通路の向こう側に友恵の姿が見えると、圭吾の母親は立ち上がった。

『最近はウチに遊びに来ないの?』

尚美は少し俯いて、苦笑を浮かべる。

母親は何かを察したように笑顔を浮かべた。

ただ、優しく微笑む。

『また遊びに来てね。じゃあ、また。』

尚美は首だけの会釈をした。

圭吾の義母ははおやが明るく手を振ってくれたから、思わず彼女も手を振り返す。

ほっそりと背の高い彼女の後姿は、何処か淋しそうにも見えた。

「誰? いまの」

入れ替わりに戻って来た友恵が、椅子に腰掛けて訊いた。

「圭吾、の、お母さん」

「へえ、若いんだね」

友恵も彼女の後姿を視線で追う。

人混みに紛れて直ぐに見えなくなっただけだ。

## 【34】夕闇

志美はマンドリン部の部室を出ると、友達に手を振った。

正門を出て少し行くと、好聖館学園高校の生徒がたむろするコンビニが在った。

女子高生の甲高い笑が立ち込める店内は、何時も華やかだ。

「志美、これからデート？」

コンビニの入り口で、クラスメイトの沙也香が手を振っていた。

志美は手を振り替えて、舌を出す。ナイショの意味だ。

マンドリン部は好聖館高校でも由緒在る部活動のひとつで、土日も欠かさず練習が在るので有名だ。

もちろん、志美は時々仮病で休むけれど。

彼女は交差点の角を曲がって国道へ出る道を自転車で走った。

三角形の土地を無理やり使った小さな児童公園が見えて、志美は自転車のブレーキをかける。

「遅いよ」

「だって部活だもん、仕方ないじゃん」

ひとつ年上の彼は、阿住雄太。

共学の高校に通う雄太は、部活はやらずにバイトばかりしている。黒い前髪が風に靡いて眉にかかると、少し目を細める。

一重だけれど長めの睫毛が愛らしくて、志美の一番気に入っている部分だ。

「ユウくんだって、もうバイトの時間でしょ」

「だから遅いつて行っただよ」

「なんで昼間のシフトにしないの？ そしたらこれからゆっくり出来るのに」

志美は家族には絶対に見せない甘えた眼差しで、雄太の腕を叩いた。

「だって夜のほうが時給いいし」

彼はバイクを買う為にバイトを優先する。

そんな彼に志美は「バイク買ったら、一番目はあたしが後ろだからね」と何時も念を押している。

西日がひと気の無い公園に、家並みの長い影を落としていた。

少し話しこんでいる間に、夕闇が迫ってくる。

ふたりの長い影が、重なって頭の部分だけがひとつになった。

志美は少しだけ息をついて、唇をはなした。

「ダメだよこんな所で。学校の娘達が通るから……」

「もう暗くて判らないよ」

雄太はもう一度だけ、彼女の唇を短く塞いだ。

彼女もそれを拒む事は無かった。

好聖館は織堂家から少し遠い位置に在る。

運河を渡って商店街を抜け、国道を暫く行く。

中学までの道のりの3倍以上はあるから、歩いて行ける距離ではない。  
ない。

志美が駅前ゆきみの商店街を横切って橋通りまで来ると、微かに見覚えのある姿を見た。

駅前商店街と橋通り商店街は交差して、昔は街一番の繁華街だった。

しかし今は、閉まりきったシャッターと古ぼけた建物ばかりが目につく。

寂れた商店街も、街路灯だけは明るいのがいい。

志美が自転車を進めると、街路灯に照らされた人影がはっきりと浮かんだ。

やっぱり。

彼女は機嫌が良かったせいか、彼の目の前で自転車を止める。

「こんばんは」

弾むような声で話しかけた。

圭吾は不意に声を掛けられて、ハッと息を飲む。  
女子高生がどうして自分に声をかけてくるのか？

その顔に、誰かの面影を感じて再びハツとした。

「この辺に住んでるの？」

「誰、ですか？」

「尚美の友達でしょ？ あたし、アイツのアネ」

やっぱり。圭吾は何故か心の何処かで安堵する。

「名前は？」

「……館内、館内圭吾です」

「圭吾くんて言うんだ」

志美はマスカラの着いた目を瞬きさせる。

中学生男子から見たその笑顔は、ずいぶん大人っぽく見えた。

「尚美とは会ってるの？」

「な、何ですか？ いきなり」

「アイツ、人付き合いが苦手だからさ、よろしく頼むよ」

耳が不自由だからとか、言葉が不自由だからとは絶対に言わない。

彼女の笑みに、圭吾は困惑する。

「それでも、無いみたいですけど」

「どうして？」

「けっこう……」

伊藤の事は言うのはよそう。

圭吾は言葉を選んで「けっこう友達いるから……」

「へえ、そうかな」

「そ、そうだと……思います」

「妬いてんの？」

志美は自転車に乗ったまま、身を乗り出して彼に顔を近づける。

圭吾は思わず身を引いた。

フレグランスとファンデーションの香気においが微かに漂う。

よく見れば、目元と鼻が尚美にそっくりだ。

笑った時に、横に開く口元も似ている。

圭吾は彼女の言葉にピクリと反応した。

妬いてる？ 俺が？ そんなバカな……。そんな事ない。

街路灯の明かりが照らす薄闇の中で、それは誤魔化す事が出来ただろうか。

「だ、誰が……」

彼は近づいた彼女の視線を避けるように俯く。

「とにかくさ、最近ナオの元気がないのよね。まさか、喧嘩でもした？」

凶星だ……。なんて勘ぐりのいい姉だろう。

圭吾は彼女を警戒するように上目で見つめる。

再び視線を落とすと、紺色のハイソックスが見えた。

革のローファーが、水銀灯の明かりを吸い込むように深い艶を出している。

「べ、別に……」

「じゃあ、よろしくね」

志美は圭吾の肩をポンと叩くと、自転車を再び走らせた。

圭吾は街路灯に照らされた彼女の姿を、薄闇に消えるまで見つめていた。

### 【35】気まずい視線

陽が暮れて窓の外が暗くなると、尚美は憂鬱な気持ちになる。明日になれば、また圭吾の無言の姿を見なければならぬ。

周囲からして見れば何の変わりも無い彼の姿は、尚美にとって明らかに以前とは違う姿だ。

沈黙のプレッシャーが、終始彼女に押し掛かる。

自分の言い分がうまく表現できないもどかしさは、今までに無い苛立ちを彼女にもたらず。

「ナオ、そう言えば今日の帰りに彼に会ったよ」

ゆつくりとクリームシチューを口へ運ぶ尚美の肩を叩いて振り向かせると、志美は言った。

尚美はスプーンを口へ着けたまま、一瞬動作が止まる。

「彼、って？」

「圭吾くんって言うんだね。前に見た彼」

彼……その単語に尚美は奇妙なくすぐったさを覚える。

もちろん志美が使った「彼」はカレシの「カレ」ではない。三人称の単なる「彼」だ。

「少しだけ話したけど……」

「話し、た、の？」

スプーンを置く尚美に代わるように、志美はシチューを口へ運ぶ。「ずいぶんシャイなんだね。でも、中学生ってあんな感じかな」

フツと笑った。

『何話したの？ 何か言ってた？』尚美は両手を動かす。

「どうしたの？ 慌てて」

『なんでもない……』

尚美は再びスプーンを手取る。

「ナオは友達多いってさ」

少し早口で志美は言う。尚美は姉がどんなに早口でも、その唇を

読み取れる。

ふうつと溜息をつくように、彼女は再びシチュー皿にスプーンを差し込んだ。

冷たい朝の空気に満たされた部屋で、尚美は制服に袖を通すと、机の上に乗った小さな小ビンを手取る。

日曜日に友恵と買い物をした際に買った、ピンクシュガーのコンを少しだけ首元につけてみた。

甘い香りが穂のかに鼻孔に漂う。

上からその香りを塞ぐようにマフラーを巻いて、彼女は家を出た。

放課後の図書室に尚美はいた。

一階にある図書室は、時々利用している。少し黴臭いような甘いような図書室の匂いが、尚美は好きだった。

大抵は文庫本を借りるが、読みたい本が無い場合はハードカバーも手に取る。

東野圭吾の小説を物色してした時に、背中を軽く叩かれた。

尚美が驚いて振り返ると、自分の行動を反省するかのように苦笑する伊藤誠が立っていた。

「ごめん。ビックリした？」

尚美は右手を上げて、人差し指と親指でCの字を作り、「ちょっと」表現して苦笑する。

「これ、俺も読んだよ」

伊藤は尚美が手に持っていた文庫本を指差す。  
そこから彼の小説談義が始まった。

尚美は彼の話を相づちで受け入れる。



時折短い言葉を発する意外は、伊藤が話すばかりだったが、読んだ本がかなりバッティングしていてなかなか楽しかった。

窓の外は松の木が植えられて、陽射で出来た影が室内に伸びていた。

グラウンドから運動部の掛け声が聞こえてくる。

「そう言えばさ」

伊藤は話題を変える言葉を挟むと「こんど、模擬試験あるね」

一年生は年に一度だけ全国模擬試験を全員で受ける。

2年になるとそれが4度になって、3年生はほとんど毎月受けるらしい。

本来模擬テストは毎月実施されていて希望者のみが受けるものなのだが、実際はみんなが受けるからその回は誰もが受ける状態だ。

尚美はそう言えばと思い出して頷く。

「こんど一緒に勉強しないか？」

伊藤誠らしい誘い方と言えば、そうなのかもしれない。

尚美は少し考えて、答えに困惑した。

「俺の行ってる塾が模擬テスト用の問題を何時も作ってくれるんだ。復習の時に織堂も一緒にどうかと思って」

それはふたりだけで、という事なのだろうか？

尚美は再び困惑の笑みを浮かべる。

伊藤は既に、度々全国模試を受けているらしい。

「考えて、おく……」

彼女は少しすまなそうに応えた。

心を開けないわけじゃない。

それでも異性に誘われるのは初めてだから、何処かで逡巡してしまふのだ。

嫌われまいと即答するような感情もないけれど、せっかく誘ってくれた彼には少しすまないと思う。

「うん、いいよ。考えておいて。テストは来週だし、今週の土曜日とかどうかと思ってさ」

彼が自然に歩き出したから、尚美も歩き出す。

別に立ち止まって見送ればいいのに、尚美は在る意味人との関わりに飢えているのかもしれない。

図書室の出口まで来て、彼女は手に文庫本を持っている事を思い出す。

本を掴んだ手を上げて苦笑した。

借りる手続きをしなくては、持ち出せない。

「ああ、じゃあここで」

伊藤は笑って手を上げた。

尚美も小さく、遠慮気味に手を振った。

ふと見ると、職員室から出て来た圭吾と一瞬視線が合った。

また何か、呼び出しを受けたのか……。

胸の奥がびくんと跳ね上がる。

思わず視線をそらしたのは、尚美の方だった。

【35】気まずい視線（後書き）

お読み頂き有難う御座います。

アルファポリスに登録してみました。

引き続きお読みいただけると幸いです。

宜しくお願いいたします。

### 【36】息切れ

土曜日の午後。

北風は冷たかったが、窓を通り抜ける陽射しは暖かくぽかぽかと室内を照らしていた。

橋通りの商店街から駅前商店街を横切って続く路地の先に古い住宅街がある。

伊藤誠の家は、その路地を二回ほど曲がった所にあった。少し古ぼけた一軒家で、ブロック塀に囲まれた庭は広々としていた。

その庭の片隅にプレハブのコンテナハウスが建てられて、それが彼の部屋だった。

尚美は伊藤誠の誘いを断れなかった。

断ろうと思っていたのに、図書室の前で再び誘われて断れ切れなかったのだ。

別に勉強をするだけだし、彼だってなかなか好感度のある男子だ。知り合って日が浅いという事意外に、尚美には不安はなかった。彼の家を訪れた時に、彼の母親がジュースを持って来てくれた。部屋の入り口で伊藤がそれを受け取ると、母親は室内を覗き込む。尚美は苦笑して、彼女に会釈をしたが、声は出さなかった。

「じゃあちよつと買い物に出かけて来るからね」

少し煙たがる伊藤の態度に、母親は早々と退散した。

伊藤が塾から貰ってきた数学と英語のプリント問題用紙と一緒にこなしていった。

1時間があつと言う間で、その後の1時間も何時の間にか経過していた。

「これでひと通りやったね」

伊藤が遠慮がちに伸びをして、シャーペンをテーブルに置く。彼の部屋には小さな冷蔵庫があった。

伊藤はそこからペットボトルのジュースを取り出すと、空いた二人のグラスに注ぐ。

つまり、母親がジュースを持って来たのは一種の偵察だったのだろう。

息子の連れてきた異性の友人がどんな者が、確かめに来たというわけだ。

「疲れた？」

伊藤はオレンジジュースを口にして笑う。

尚美は首を横に振った。

それほど難しい問題でもないし、1時間ごとに休憩も挟んだ。

「テストなんて、結局は傾向と対策がものを言うからな」

塾慣れしていない彼女には、イマひとつぴんと来ない。

ただ頷いて笑ってみせる。

改めて部屋を見渡すと、圭吾の部屋とは大分雰囲気は違っていた。壁には富士山の大きな写真が飾っており、他は殺風景だった。

勉強机には参考書がびっしりと並べられて、整理整頓されている。

コレが男の子の部屋　そんな定義は無いのかもしれない。

影がフツと動いた。

部屋を見渡す尚美の死角から廻り込むように、伊藤は彼女の隣に腰掛ける。

今までは四角いローテーブルを挟んで対面していたのだ。

尚美は反射的に身体を少しずらして、彼との距離を保とうとする。

「付き合ってるヤツとか、いないよね」

伊藤が微かな笑みを交えて言った。

彼女はそれに応える余裕が無い。座ったままさらに後ずさりする。肩に手が伸びて、尚美を掴んだ。

強くは無いが、彼女が咄嗟に振り払えないくらいの力ではあった。ほんの少し、胸の内から恐怖が湧く。

「な、なに？」

尚美の声に応える間も無く、伊藤は彼女を引き寄せてキスをしようとした。

伊藤の顔がグンツと寄って来て、尚美は顔を背けてかわす。

彼の顔が頬を掠めると、一瞬鳥肌がたった。

彼が迫る勢いは、そのまま尚美を押し倒す。

今まで座っていた絨毯が、背中では妙に硬く感じた。

「やめて！」

尚美は声を出して伊藤を横に押しのける。

渾身の力だった。

ゴロリと彼が転がって、ガラス戸にぶつかった。

ガラスが一瞬歪んで、注ぎ込む陽射しが揺れた。

伊藤は手について半身を起こすと

「どうせそんなにチャンスは無いんだぞ。今俺としたって、損はないだろ」

尚美も半身を起き上がらせる　チャンスがない？　どういう意味？

彼女は怪訝に彼を睨んだ。

「耳の聞こえない障害者のお前を好きになるヤツなんて、これからだってそんなにいないだろ。だったら俺と付き合えばいいじゃん」

目を背けたくなくなるような言葉だった。

しかも、伊藤は尚美が好きだとは言わない。

例えば　好きだという気持ち最初にはつきりと誇張してくれば、受け止める側も少しは違っていたかもしれないのに……。

しかし今の尚美を支配するのは、恐怖だった。

目の前の恐怖を払いのけるように、尚美はグラスに入っていたジュースを手にとると、伊藤に向かってぶちまけた。

急いで筆記用具とカバンを鷲掴みにすると、立ち上がって部屋のドアを開ける。

靴を履いたのは無意識だった。

庭を出て路地を駆け出していた。

障害者のお前を好きになるヤツなんて、これからだってそんなにいないだろ。

伊藤の言葉が鮮明に蘇える。

息を切らす心臓の鼓動と共に、頭の中に響いた。

恐怖心は暗たんとした未来に呑み込まれてゆく。

いつの間にか頬が冷たい。

冷たい雫が頬を斜めに這っていた。

駅前商店街の外れに出て、自販機の陰で足を止める。

肩で息をしながらカバンに筆記用具をぐちゃぐちゃに詰め込む。

手が震えた。

空いた片手で涙を拭う。

ふき取ってもふき取っても涙が頬を伝う。

伊藤の行動に脅えたからだだろうか。

違う……彼の言葉が心に突き刺さった。細い針で貫かれるような

痛みが、胸の中を何度も突き刺す。

彼の言葉を思い出す度に……いや、読んだ唇の残像が蘇える度に何度でも胸を突き刺す。

ふと顔を上げると、ペットショップの袋を提げた圭吾が路地に立っていた。

「どうした……」

彼の言葉が終わらないうちに、尚美は再び走っていた。

橋通りの寂れた商店街を夢中で駆け抜けた。

障害者は人に愛されないのだろうか……。

息が苦しい。

呼吸が出来なくて、酸欠状態になる。

酷い耳鳴りだ。

電車で鉄橋を抜ける時のような轟音が、耳の奥で鳴り響いている。

景色がグニヤリと歪む……一瞬、涙のせいかと思った。  
目の前が眩んだ。

橋を渡りきって直ぐのタバコ屋に自販機が並んでいる。

尚美はひと気を避けるように歩道を横切って自販機に手をつく  
と、そのまま膝を着いて倒れこんだ。



### 【37】優しさの後押し

「おい、大丈夫か？ ナオ？」

声が聞こえる。

自分を呼んでいる。

遠くで聴こえる声は、少しずつ近づいてくる。

優しい声が、暗闇から聴こえた。

闇の先に小さな明かりが差し込んで、目を開けると誰かの姿があった。

眩しい……。

西日を背に、彼の姿が黒く浮かぶ。

そのシルエットが誰なのか、彼女には直ぐに判った。

優しい音が、聴覚の奥に響いている。

「だいじょうぶか？」

彼は尚美が目を虚ろに開けると、少しゆっくりと口を動かした。

僅かに霞む眼差しで、尚美は彼の唇を読もうと意識を集中させる。

「なにがあった？」

視線のヒントが合うと、黒いシルエットは圭吾の姿に変わった。

尚美がいたのは、タバコ屋の店先に在るコカコーラの古びた赤いベンチだった。

角の塗料が剥げ落ちて、木製素材の色が浮き出ている。

長く横に寝かせられて、彼は地面に膝をついて彼女を覗き込んでいた。

尚美は上半身を起こそうと手について、まだ頭にふらつきを覚える。

圭吾は彼女の肩を、そっと手で支えた。

不意にガタガタと戸の開く音がした。

タバコ屋のぼろい戸は、小刻みに押さないと開かないらしい。ふたりは、揺れながら開く戸を振り返った。

「またお前か。タバコは売ってやれんぞ」

店主の老人が店先に出て来たのだ。

エンジ色のシャツに、くたびれた茶色のベスト……いや、ちゃんちんこを羽織っている。

老人はベンチに寝そべる尚美を見てハツとすると

「こらこら、それはやっちゃいかん事だぞ。それは見て見ぬふりは出来んぞ」

「違うよ。そんなんじゃないよ。なに勘違いしてんだよ」

圭吾は慌てて老人に言った。

彼は圭吾が尚美をベンチに寝かせて、よからぬ悪戯をしようとしていたと思ったようだ。

尚美も慌てて上体を起こすと、首を振って老人の思い違いを正した。

「あんたら中学生なんだから、ほとほどの付き合いにしとけ。こんな所で……」

状況を飲み込めない老人は、やっぱり真顔だ。

「そんなんじゃないよって」

圭吾は怒ったようにそう言うってから

「爺さん、電話借りれ……」

しかし、尚美は圭吾の言葉を制して首を振る。

彼はタバコ屋の店主に電話を借りて尚美の家に電話をかけようと思ったのだが、彼女はそれを拒んだのだ。

家族に心配はかけたくない。

「なんだ、娘さんは顔色がよくないな」

老人が言った。

「だから、ここで休んでるんだろ」

「なんだ、そうか。ワシはてつきり悪さしてると思ったよ」

「だから、してねえって」

「またお前がこっそりと自販機でタバコを買ってるのかと思って出て来たんだが……」

皮肉めいた口調で老人は皺くちなな笑みを浮かべる。

圭吾は何度かここでタバコを買っている。そして、店主の老人に見つかっては軽い説教を受けていた。

「買ってねえし。ていうか、タバコはもう吸ってねえよ」

店主は少しだけ尚美に近づくと

「お嬢さん、大丈夫かね？」

尚美は苦笑を浮かべて、何度も頷いた。

「貧血か？」

尚美は再び頷く。

とりあえず、この場合は頷いてやり過ごそう……そう思った。

「最近の若いもんは、ひ弱でいかん」

膝を着いていた圭吾は立ち上がって

「もう大丈夫だから、爺さんは引っ込んでくれ」

「本当に大丈夫か？」

圭吾にではなく、尚美に訊いた。

尚美はとにかく頷いて、無理に笑顔を浮かべる。

店主の老人は踵を返して店の中に入って行く。ガタガタと音がして、ぎこちなく戸が閉まった。

「ったく、クソじじい……」

ボソリと言った圭吾の言葉が、尚美はちょっと可笑しかった。

「何やってんだよ」

圭吾は彼女を支えて、ベンチに腰掛けさせる。

尚美はフウツと息をついて、橋のかかる運河を見つめた。

橋げたの下で小船を浮かべて釣りをしている老人が見えた。

圭吾は彼女の横に腰掛けて

「様子がおかしいから追いかけてきたら、いきなり倒れやがって」

尚美は彼の方を向くと『ごめんなさい』

小さく手を動かす。

『べつに……いいけどさ』

圭吾も思わず手話で返す。

尚美の顔に笑みが零れた。

この安堵感は何だろう……。

圭吾は尚美の頬に着いた涙の跡に気付いていたけれど、それには触れなかった。

しかし次の瞬間、再び彼女の頬を涙が伝う。

それは、さっきのような冷たい涙ではなかった。

ほろほろと頬を伝う雫は、熱をおびている。

安堵に満ちた雫が、次々に湧き出てきて、尚美は俯いた。

「なんだよ、どうして泣くんだよ」

困惑して圭吾は、俯く彼女を覗き込んだ。

尚美の膝元にポトポトと雫が落ちる。

「泣くなよ……」

彼女の頭に手を乗せた。

チヨビを撫でるように、そっと尚美の頭をなでる。

「別に、なんでも、ないよ」

嗚咽を堪えて、途切れ途切れに尚美は声を出す。

けれど、ぼろぼろ零れる涙は圭吾の手の温もりに後押しされてなかなか止まらなかった。

彼は困ったように彼女の頭を撫で続ける。

優しさが涙を後押しする事もあるのだ。

西に傾いたクリーム色の陽光は、運河の水面をキラキラと光らせていた。

その陽射しが目に沁みる……。



## 【38】クローバー

尚美は夕飯を半分残したまま、自室へ戻った。

母親が心配して「どうしたの？」と訊く。

彼女は笑顔で

「友達の家で、夕方お菓子を食べすぎた」と言った。

尚美はベッドに横たわって空の写真集を眺める。

林完次の夜の宙だ。

宵闇の湖、夜天光の町並み、朝まだ来の海……薄月の星空。

今夜はそんな空を見るのが相応しい。

尚美はふと時計を見る。

そろそろ姉の志美も自室へ戻った頃だろう。何時もは尚美よりも姉のほうが早く自室へ入る。

尚美はベッドから起き上がって部屋を出ると、隣のドアをノックした。

コッココン。

ノックの音で、それが妹の尚美だと判る。

志美は声で返事をせず、自室のドアを開けた。

「どうした？」

最近元気がなかった妹には気付いていた。

母親に心配をかけまいと気丈に振舞う尚美だが、志美は敏感に妹の様子を感じ取っていた。

志美はベッドに腰掛けると妹を促す。

尚美も隣に腰掛けた。

黒いカバーの羽毛布団に、ふわりと腰が沈み込んだ。

『オネエちゃんは、今好きな人っているの?』

尚美はあえて手話で訊く。

こんな質問、恥ずかしくて声には出せない。

「どうしたの、いきなり」

志美は笑ってから少し間を置くと

「いるよ。あたしは、何時でも好きな人がいるなあ」

彼女はそう言って天井の明かりを見つめた。

「なに? ナオも好きな男できた?」

少しだけ、わざとおどけた口調で言う。

「わかんない……」

尚美は姉の唇を読んでから俯く。

「でも……」

志美は妹が言いたげな言葉を、黙って待っていた。

小さな液晶テレビから、ミスチルの歌が流れていた。

尚美は姉の心遣いを察して続ける……今度は唇を開いた。

「障害者を、好きになる男<sup>ひと</sup>なんて、いるのかなあ」

抑揚は少しおかしかったが、それは彼女が吐き出した言葉だ。

自分の中に溜め込んで、声に出して吐き出したい言葉だった。

志美は黙って立ち上がると、机の前の椅子に腰掛ける。

黙って俯いたままの尚美に消しゴムをちぎってぶつけた。

自分を見た妹に、志美は言う。

「そんな事が心配なの?」

「そ、そんな、事?」

志美は椅子の背もたれに腕を回してそこに顎を乗せる。

妹の顔を見つめた瞳は、ゆっくりと瞬きした。

志美はくると椅子を回転させて振り向くと、机の引き出しから小さな手帳を取り出す。

「ナオ、これ見て」

彼女は手帳を広げる。

カラカラに乾いてペツタンコになった深い緑色の葉を、指先で摘んで取り出した。

「クロー、バー？」尚美は声に出した。

志美が手に取ったのは、四葉のクローバーを押して乾燥させた物だった。

「四葉のクローバーはさ、幸せを運んで来るって言うじゃない？」

尚美は小さく頷く。

コクリと、幼さの残る頷きだった。

尚美も小学校の低学年の頃、空き地の隅で四葉のクローバーを探した事が在る。

志美は彼女の表情を確かめるようにして言葉を続けた。

「でもさ、クローバーって本当は三つ葉だよ」

尚美は再び頷く。

「って事はさ、四葉のクローバーって異形なんだよ」

尚美は姉の言葉にピクリと瞬きした。

志美は口角を上げて笑うと

「障害を持つてるんだよね、四葉のクローバーはさ。でも、幸せを運んでくれるんだよ」

尚美はきょとんとして姉を見つめた。

志美はカラカラのクローバーを小さく振って

「障害を持つてるのに、幸せを運ぶんだよ。凄くない？」

「うん……」尚美は小さく頷いた。

「だからさ、ナオが障害を持つてる事は、何のハンディーでもないの。そんな事気にしないの。あんただって、きっと誰かに幸せを運ぶ事ができるんだよ」

志美は妹を諭すように、いかにも年上らしい口調をわざと使った。

「まあ、誰かがテレビで言ってたんだけどね」

白い歯を見せて笑う。

「いいじゃない。ナオはごく少量にしか存在しない稀少な四葉のクローバーなんだよ。それでいいんだよ」



尚美は複雑な気持ちで「うん」と頷く。

四葉のクローバーが障害を持ってるだなんて、考えた事もなかった。

志美はクローバーを再び手帳の間に挟みこむと

「圭吾君と喧嘩でもした？」

「うん……すこし、だけ」

尚美は顔を上げて志美を見つめると

『でもそれは大丈夫』

目を細めて明るく笑った。

向日葵のような妹の笑みに、志美は安堵した。

### 【38】クローバー（後書き）

お読み頂き有難う御座います。

ここで記載した四つばのクローバーの話は、福祉活動をしていたある故人が実際に口にした言葉を一部取り込ませていただきました。私が聴いた言葉を、他の誰かにも知って欲しいという純粋な思いからです。

【39】自転車と後悔（前書き）

申し訳御座いません。

更新したつもりが、UPされてませんでした（^^；

### 【39】自転車と後悔

翌日の日曜日の午前中。

織堂家の家のチャイムが鳴った。

姉の志美が玄関へ出てみると誰もいない。

斜め向いの家で飼っている犬が、やたら吼えていた。

「今時、ピンポンダツシユか？」

彼女は舌打ちして呟く。

しかし辺りに視線を巡らすと、門扉の外に見慣れた自転車が置いてある。

妹が使っている紺色のシティーサイクルに間違いなかった。

自分のは銀色のフレームだし、庭の中にちゃんと置いてある。

そう言えば昨日の夜、妹の自転車は庭の中に在っただろうか？

「ナオ、自転車使った？」

志美は尚美の部屋を訪れて、彼女に尋ねる。

「じ、自転車は……使ったけど……昨日、ちよつと友達の家を忘れて来て……」

手話がどもる。

どう説明すればいいのか判らない。

「あれ？　じゃあ、外に在る自転車は、ナオが置いたんじゃないんだ」

「えっ！」声が出た。

外に自転車？

志美からピンポンダツシユの事を聞いた。

尚美は階段を駆け下りて外へ出ると、肩で息をしながら自転車を確認する。

確かに自分の自転車だ。

昨日、伊藤の家まで乗って行き、思わず置いて来てしまったはずの自転車が目の前に在る。

伊藤だろうか？

「友達が届けてくれたんじゃないの？」

「そうかも……」

尚美は困惑の笑みを浮かべ、小首をひねった。  
わけが判らない……でも、一安心した。

伊藤誠は深く後悔していた。

あんな事を言うつもりでは無かったのだ。

障害者の尚美を好きになるヤツなんてそうはいない。

そんな事は思っていなかった。

現に自分は何故か彼女に心を惹かれていたのだ。

遠くから彼女の姿を最初に見たのは入学して間もない頃の体育館だ。

何処かよそよしくて、迷子の仔犬のようだった。

それから何度も遠くから彼女を探した。

小さな身体はやっぱり仔犬のようだ。

廊下ですれ違う時に盗み見た白い肌と飾らない黒髪は、何処か清楚で品が在るように感じた。

スーパーで偶然出逢い初めて言葉を交わしたとき、心臓は跳ね上がって初めて動揺というモノを感じた。

優等生を演じてきた小学時代の自分は完全に崩れ去った。

彼女ともっと近づきたいと思った。

それは小学校時代に川田真穂を好きになった気持ちとは別格だと感じる。

もつと内側から心惹かれる何かが、織堂尚美にはあるのだ。  
それなのに……。

拒絶されたショックで口が滑ったと言うには、本人にはあまりにも酷な言葉を投げつけてしまった。

怒って当然だろう。

もう彼女と言葉を交わす事はないだろう……。

日曜日の朝早く、家のチャイムが鳴った。

両親は親戚の家に出かけて不在だったので、ちょうどリビングにいた伊藤誠が玄関に出た。

ドアを開けると、この前の茶髪が立っている。

館内圭吾……確かそう言う名だ。

伊藤はそう思うだけが精一杯だった。

刹那、拳が飛んできたから。

大きくは無いが、硬くて強い一撃だった。

伊藤誠は玄関奥に飛ばされて、背中から倒れて右肩を強く打った。その痛みと共に、彼が何故ここへ来たのかを理解した。

手話の出来る茶髪の転校生……夏の初め頃に聞いた噂だった。織堂尚美と親しい唯一の変わり者の男子……。

圭吾は半分開いていたドアを、勢いよく開け放つと足を踏み入れる。

「外に在るのは尚美の自転車だよな？」

凄味のある声だった。以前言葉を交わした時の、少し軽薄な感じとは違う。

圭吾は伊藤を見下ろした。

激しい怒りの為か、ここを探し回った為か、彼は肩で息をしている。

「なんだよいきなり……」

右肩を押さえながら、伊藤が身体を起こす。

「ナオに何をした？ 昨日ここに来てたんだろ？」

「別に、なんもしてねえよ」

伊藤は震える眼差しで圭吾を見上げた。

彼が来た理由はもう判っている。しかし、正直に全てを白状する勇氣は無かった。

狼のような鋭い視線に、半身が震えた。

いや、実際は彼を見上げる間もなく言い訳する間も無く、圭吾が上に押し掛かって来て再び拳を振り下ろした。

「ウソつけ。お前、何したんだ？ 尚美はな……」

尚美は常に荒波を掻い繰るような人生を送っている……。

常人には判らない些細な困難が、彼女の周囲には溢れているのだ。

2、3発拳を振り下ろして圭吾は冷静に言葉を飲み込む。

こんなヤツに何かを言ってもしかたねえ……。

一瞬無表情になると、フツと立ち上がって

「自転車は持つてくからな」

乾いた声でそう言うと、圭吾は玄関を出て行った。

伊藤はそのまま足を投げ出すように玄関に座り込んでいた。

これでいいんだよな。

圭吾に殴られた痛みは、彼女の心の痛みのほんのひとかけらに達しない。

自分がどれだけ酷い事を口に出してしまったのか、改めて思い知る。

彼は唇の端から滲んだ血を、右手で拭った。

少しだけ、胸につかえモヤモヤとした罪の意識が晴れた気がした。ほんの少しだけ……。





【40】時間よとまれ（前書き）

そろそろ……

足早に時間は流れます。

## 【40】時間よとまれ

金曜日の放課後は喧騒に満ちている。

放課後の部活や委員会など一見何も変わらない日常の中に、週末の休みに向けてのソワソワした気持ちの高揚が自然に沸き立つのだ。遊ぶ約束のある者、部活の練習試合がある者、塾のゼミへ出かける予定も、それぞれが何時もと違う日常の前触れを実感して浮き足立つ。

「館内……」

階段の踊り場の途中、控えめな声で呼ばれて、圭吾は振り返った。数段上で由加子がメガネに手を当てながら立っていた。

「明日、ナオは伊藤君と勉強だつてさ」

「なんだよ、それ？」

圭吾は彼女を見上げて直ぐに、踊場の窓から見える空に視線を移した。

「図書委員の友達に聞いたんだよ。なんかイイカンジだったって」

「なんで俺に言うんだよ」

圭吾は空いている手を、ポケットに突っ込んだ。

数人の生徒が階段を足早に下ってゆく。

「うん……何となく。言つていた方がイイのかなって思つて」

「関係ねえし」

圭吾は足早に階段を下り始めた。

由加子は少しだけ彼を見送ると、部活に向かう為に階段を上に向つて歩いて行つた。

秋の全国模試が近づいていたあの日の土曜日、尚美は伊藤誠と一

緒に勉強をする為に彼の家に行った。

彼の誘いを断れ切れなかった事も在るが、圭吾と喧嘩していたせいもあった。

何処かに心の拠り所を求めている。

しかし伊藤は勉強のノルマが終了すると、尚美に迫ってきた。

想像もしないシチュエーションに、彼女は驚愕してただ拒むのが精一杯だった。

迂闊に彼のテリトリーに立ち入るべきでは無かったのかもしれない。

中学生とはいえ、やはり男と女なのだ。

それでも間違いが生じなかった事は、不幸中の幸いなのだろうか……。

しかし拒む彼女に、伊藤は衝撃的な言葉を浴びせる。

尚美は彼の家を飛び出して、途中圭吾に出くわす。しかし、再び走りだした。

彼に会わせる顔が無かった。

圭吾と視線を合わせる事が出来なかった……。

自分の軽率な行動が、何故か彼を裏切ってしまったような錯覚さえ覚えさせた。

あの時、彼の顔をまっすぐに見る勇気が無かった。

橋通りを抜けて、橋を渡りきった所で彼女は行き絶えた様に倒れ、追いかけてきた圭吾に助け起こされた。

自分の危機に、彼は何時でも手を差し伸べてくれる。

目を覚ます間際、尚美は久しく聞いていなかった優しい音を聴いた。

夜になって気持ちが悪く、逆に彼女は困惑した。

伊藤の家に自転車を置いてきてしまった　もう彼の家に行く事は無いだろう。

自転車をどうしよう……。

しかし日曜日に彼女の自転車は帰ってきた。

誰かが門扉の外に置いていつてくれた。

その後、伊藤から声が掛かる事も無かったし、廊下で何度かすれ違ふときは酷く気まずかった。

彼では無い……。

自転車を取って来てくれたのは、もしかして……。

朝から雪がチラついていていた。

小さな結晶が、乾燥した上空から音も無く舞い降りていた。

こげ茶色の校庭の地面も、薄っすらと砂糖をまぶしたように白くなっている。

大気をさ迷うように降り注ぐ粉雪はサラサラと長時間舞い散って、気付けばいつの間にか、民家の屋根も全て白色に染めていた。

「尚美、今日うちらカラオケいくけどあんたも一緒に行く？」

二学期の終業式 放課後、川田真穂が笑顔で声をかける。

わざとらしい微笑みに、尚美は軽く笑顔を返して首を横に振った。

「ナオはこれから用事があるから」

友恵が近づく。

真穂は小さくフンツと鼻で笑うと「そう」

彼女達は直ぐに自分たちの輪の中で高い笑い声を立てた。

二学期の終業式の帰り道、途中で友恵と別れた尚美は運河沿いの小さな公園に向っていた。

入り口まで来た時、白い地面についた足跡は、ひとつだけ奥へ向  
って続いている。

『待った？』

少し離れていても、それは通じる。

言葉が届かない距離でも、彼には通じるのだ。

『遅いぞ』

圭吾も大きな身振りで返す。

尚美は小走りに彼の傍まで急いだ。

「友恵は？ 一緒に帰らなかったのか？」

『途中で別れたよ』

ふたりは公園を少し歩いて、東屋のベンチに腰掛けた。

サラサラと降り注ぐ雪が、運河の水面に落ちては消えて行く。

動いているのは、上から下へ舞い落ちる白い結晶だけ。それ以

外は、まるで時間が停まったようだった。

尚美は彼の肩を突いて振り向かせる。

「前から思ってたんだけど、自転車持って来てくれたのは、圭吾なの？」

彼は優しく彼女を見つめ返す。

一瞬、沈黙がふたりを包み込んだ。

運河の流れに顔を向けながら「さあ？ 何の事？」

肩をすくめて、知らない素振りのゼスチャーをする。

わざと素っ気無い身振りだった。

尚美はそれで確信した。

ヤッパリ……。

彼女はカバンからキットカットを取り出して、半分に折ると彼に  
差し出した。

ふたりでそれを齧ると、凍て雲を見上げる。

世界中の時間が止まってしまったような低いそら曇天

「圭吾……」声を出して彼の名前を呼ぶ。

イントネーションは合っているだろうか　ちゃんと発音できた？  
彼が振り返る。

やさしい笑みが彼女を見つめた　いや……少し素っ気無い、何時もの視線だったかもしれない。

風が吹いて、ふたりの傍らに雪が舞い込んできた。

頬が少し冷たい。

名前を呼んでみたかった。

でも……その後の言葉は続かない。

尚美ははにかんで、毛糸の手袋で頬を摩った。

ふと見ると、圭吾の手は何にも包まれていない。

「手、寒く、ないの？」

「ちよつと冷てえ」

彼は両手を少し擦って、制服の上に着たウィンドブレーカのポケットに入れようとする。

尚美はその片手を思わず掴んだ。

圭吾はハッとして彼女を見たが、その視線は直ぐにそれた。

口元は、僅かにはにかんでいた。

毛糸の下の彼女の手の温もりが伝わる。

同じ中学生なのに、ずいぶん小さい手だ。

尚美には、圭吾の素手の温もりが伝わる。

毛糸の編みこみの目を縫って、彼の体温が手のひらに押し寄せる。それだけで彼女の鼓動は激しく波打った。しかしそれは、心地よい高鳴り。

頬が熱くなった。

雪が触れたら一瞬で溶かしてしまうだろう。

指を絡めると、彼の指は自然に同じ握り方をしてくる。

圭吾は再び空を見上げていた。

尚美もつられて空を見上げる。

静止した時間の中　3羽のカモが飛んできて、運河に舞い降り

た。

## 【40】時間よとまれ（後書き）

お読み頂き有難う御座います。

今回は次のエピソードへ向う、ひとつの「まとめ」的なものです。章の区切りは在りませんが、次回から、実質的な新章に入ります。宜しくお願いいたします。



## 【41】揺れる（前書き）

【中間あらすじ】

尚美は聴覚に障害を持っている。

彼女を取り巻く一見何気ない出来事は、聴覚障害をその都度実感させる。

ぶっきら棒な転校生、圭吾はクラスで浮いた存在だけど尚美にとって彼は特別な存在だった。

さり気ない優しさは、彼の声となって彼女の耳に届くのだ。実質的新章の始まりです。

【章】の表示は、あえていたしません。  
宜しくお願いいたします。

## 【41】揺れる

「うっ……」

彼女は低く呻いて、制服のスカートを脱ぎ捨てる。

むしり取るようにブラウスのボタンを外して、それもベッドの上に投げ捨てた。

朝脱いだままのスウェットパンツを手にとって、乱雑に細い脚を突っ込む。

その勢いで、ベッドにドカッと座り込んだ。

「ふう……」

ベッドの枕元、いや枕の下へ手を伸ばして小さなピルケースを取り出す。

シートから押し出して白い錠剤を手のひらに落とすと、それを口へ運び込む。

ピンク色のローテーブルからヴォルビックを掴み取り、徐に口へ流し込んで「はあ」と息をついた。

尖った顎に雫が落ちる。

真穂は虚ろな眼差しを白い壁に向けると、再び小さく息をついた。

真穂が初めてそのクスリを飲んだのは中1の3学期の終わりだった。

他の中学に通う理央は塾で知り合った友人だ。彼女から2、3錠分けてもらったのが始まりだった。

「これって巷じゃ高いんだからね」

理央は言った。

従兄から譲って貰ったと言うその薬は、砕いて鼻から吸うのがツウなのだとか。

「もともと精神科のクスリなんだから、身体に悪い事はないでしょ」「精神科？」

「気持ちを落ち着かせて、リラックスさせるんだって。従兄が言ってたよ」

「なるほどねえ」

理央の言葉に、真穂は賛同する。

カラオケボックスのテーブルの上に薬を置いた。

ガムの包み紙を敷いて、三角定規を取り出し平らな部分で押し潰すように砕いた。

今度は包丁で千切りでもするように角を使って細かく砕く。再び平らな部分で押し潰す。それを何度か繰り返し、完全な粉末状にする。

生成り色のスポットライトに、白い粉が光っていた。

サラサラに砕かれた粉末を、定規で小さな山にして、コーラに付いて来たストローで鼻から吸う。

それをスニッフと呼ぶ事も、この時初めて知った。

いままで知らなかった知識に、彼女の胸はドキドキした。

「ツウは、こうやってトリップするんだって」

「なんか、ヤクでもやってるカンジだよねえ」

軽い遊びのつもりだった。

それが、禁断症状を呼び起こす薬だなんて、真穂にとって知る由も無い。

「東京の女子高生の間じゃあ、かなり流行ってるんだよ」

理央は虚ろな目でそう言うと、コーラを飲んで笑った。

頬が緩んだ奇妙な笑いに、何故か真穂も釣られて笑った。

ナニが可笑しいのかよく判らないまま。

天井がグルグルと歪みながらゆっくり廻る。壁の鏡に映った自分の姿が、まるで別世界にいる他の自分に見えた。

奇妙な高笑いが耳に響く。

それは理央の笑い声だと思ったけれど、本当は自分の笑い声だったかもしれない。

真穂は、理央に分けてもらったクスリを1日おきに飲んだ。理央に教わったように砕いて吸い込む事は、あまりしなかった。面倒だったし、それで充分に効目があった。

軽い高揚が沸き起こって、気持ちがふわふわと浮き上がる。

最初はその高揚感に酔うのが楽しかった。ただそれだけだ。

最後の1粒はカレシの家で砕いてスニッフして、彼女はその場で初体験をした。

初めての感想は……良く覚えていない。

クスリの効き具合のせいかな、よく噂で聞く痛みも無かった。

ただ、ふわふわと気持ちは高揚して暖かい波に飲み込まれたようで、そのままぬるま湯の中で浮遊しているようだった。

家に帰り着いてお風呂に入った時、下着に紅いシミを見てその日の出来事をマジマジと実感した。

その二日後、真穂はネットにアクセスしていた。

1シート5千円……彼女のお小遣いの大半が、クスリで飛んでいた。

お金が足りなくなると、洋服が欲しいと言って父親に臨時のお小遣いをねだった。

中2になった春、彼女の細い身体は、益々細くなった。

もともと賢い彼女は既に知っていた。この薬には禁断症状の副作用が在る事を。

それでもクスリは止められない。

二日も我慢すると落ち着きが無くなって微かに手が震える。見た目に分かる程度ではないが、自分自身が気付いていた。

しかし、もうどうにもならなかった。

何処か大人びた体格でも、彼女もまだ中学生なのだ。

大人に比べれば身体も小さい。その小さな身体は、薬の効目を促

進させる。

心と身体のバランスは大きく崩れてゆく。

学校では友達の菜美と沙弥さやと何時も一緒だった。

1年生の時につるんでいた連中とはクラス替えて離れてしまった為に、別の仲間を作った。

学年で真穂を知らない者はいなかったので、友達を作る事に苦労は無い。

自然に向こうから声が掛かるから、自分の好みの娘を友人に選ばいいだけだ。

しかし、彼女の友達は誰もが薄っぺらで、いかにも表面的な遊び仲間が大半だ。

二年生になると男女の距離は一年生に比べて身近なものになる。真穂の近くにいれば取りこぼしにありつける事を、みんな知っていた。

そんな連中に、今更クスリの事を打ち明ける気は無い。

楽しみをただ分ち合うだけのグループに、うわべ以外の友情は無い。

解っている。

自分だって、学校の友達の為に何かをしてあげようなんて思わないし、今までだって思った事は無い。

それは付き合っている彼も同じだった。

クスリに溺れながら、ただ時間が流れる日々は続く。

深い海に沈んでゆくように、決して浮上する事無いダイビングは心の何処かで絶望感を隠せない。

不安を打ち消す為に、再びクスリに手を伸ばす。

真穂の部屋の白い壁は、何時でも揺れていた。



#### 【41】揺れる（後書き）

二年生のエピソードが始まりました。

もちろん、圭吾と尚美の話が『中心』…だといいたのですが…。  
次回も宜しくお願いいたします。

## 【42】硬質

くぐもった空色は、灰色で埋め尽くされていた。

今にも雫を零しそうな低い雲の裂け目から、遙か彼方の陽光が微かに覗かせる。

平日の夕方、尚美は友恵と一緒にイオンの中をぶらついていた。

友恵が最近付き合いだした隣のクラスの武山くんの誕生日がもう直ぐなのだそうだ。

一度家に帰って、自転車で待ち合わせをして運河を越える。

テナントで入っている雑貨店へ足を運んだ。

店頭にはシルバーリングやチョーカーの入った透明ケースが並んでいた。

店内は女子高生が制服のままウロウロしている。

女性向けのアクセサリーが多いけれど、男性用のアクセサリー雑貨も豊富で有名な店だった。

「コレがいいかな？」

友恵はチロリアン調の石と革の飾りがついた長財布を手取る。

合皮の表面は、ウエスタン風の型押しが施されていた。

真っ直ぐにその棚へ足を運んだ所を見ると、前から目をつけていたらしい。

尚美はジッとそれを見つめる。

圭吾の誕生日も6月だ。

しかも、武山くと3日しか離れて無いから、あと一週間後だ。

「ねえ、そう言えば館内くんって、誕生日いつだったけ？」

尚美は苦笑混じりで首を傾げる。

思わず判らないフリをしてしまった。

友恵は武山くんにコクられて正式に付き合いだしたらいいけれど、



圭吾と尚美の間にははつきりとした告白や宣言は無い。

自分たちが付き合っているのか、ただの友達なのか二人共曖昧なままなのは確かだった。

身体の関係を知らない年頃の付き合いは、告白や宣言が無ければ形を成さないのが事実だ。

それがもどかしくて、それでもどうしようもない。

だから切なくて、甘酸っぱいのかもしいけれど。

レジで嬉しそうにお金を払う友恵の後姿は、微笑ましくもあり、羨ましくもあった。

「ねえ、あれ真穂じゃない？」

店を出た時、友恵に肩を叩かれて尚美は彼女の唇を読んでから視線を動かした。

クラスが離れているから、今では学校でもほとんど姿を見る事がない真穂は、以前に増してやせ細っていた。

少しこけた頬は、中学生の瑞々しさを失いかけている。

「ヤバイよね、彼女」

友恵は再び尚美の腕を突く。

「最近やたら痩せてさ、体型が気に入らなくてダイエット続けてるのかな？ そんなに痩せてどうするんだろうね。拒食症って噂もあるけど」

最近の彼女に関する、差し障り無い噂を並べた。

尚美は困惑して、再び真穂の姿を見つめる。

黒いタイトなミニスカートから伸びた脚は、相変わらずスラリと長い。

小さな黒いポーチのストラップを手にはぶら下げて歩く姿は、夜の町をさ迷う阿婆おばあちゃん擦れあすりのようでもある。

エスカーター付近のフロアにあるベンチで、男が小さく手を上げていた。

茶色く長い髪の毛は、無造作に毛先が踊っている。

中学生ではない。どう考えても高校生の風貌だ。

真穂はやつれた頬に満面の笑みを浮かべると、小走りに男に駆け寄って行った。

悪い噂は聞いていた。

少し前まで付き合っていた3年の渡良瀬が、振られた腹いせに噂をぶちまけていた。

あの女はすぐにヤラせる。

高校生からヤバイクスリを買っている。

金がなくなると、隣町へ出向いて援交をしている。

ある事無い事ぶちまけて真実味は無かったが、こうして見る光景は噂のどれかに当てはまるような気もする。

尚美は何故か少しだけ寂しさが湧いた。

凜々しいほどに強気で、整った彼女の視線はある意味強い意思を感じた。

しかし優越感で満ちた彼女の眼差しは、誰かと連れ立っていても何処か孤独を感じた。

それは自分が感じた事の在る孤独とは少し違う、もっと硬くて冷めた孤独だった。

いまはハッキリと見える……。

硬質な氷河に閉じ込められた、誰にも触れられない孤独。

遠めで見ると彼女の横顔は、カレシとの待ち合わせにはそぐわない冷たい孤独で満たされた笑顔に見えた。

瞳に輝きを感じられないからだろうか。

目の前で友恵が見せる笑顔が、あまりにも幸せに満ちているからかもしれないけれど……。



### 【43】週末

止め処ない雫が細く降り注いでいた。

細い雨がアスファルトを叩く音はあまりにも静かで、彼女の耳にはそのノイズさえ聞こえない。

週末、尚美は独りイオンのショッピングモールへ再び買い物へや  
つて来た。

圭吾の誕生日プレゼントを貰おうと思っているが、何を貰ったら  
彼が喜ぶか具体的に浮かばない。

やっぱり友恵に相談するべきだっただろうか。

尚美は友恵がカレに買った財布を一度手にとって、棚へ戻した。  
フウツと溜息が零れる。

直ぐ近くで女子高生が戯れる。

土曜日の制服は、部活かなにかだろうか。

尚美は甲高いノイズに呑み込まれそうになって、店を出た。

吹き抜けの通路を見渡したときに目に入って来たのは、遠く突き  
当たりにある書店のテナントだった。

彼女はふと何かに吸い寄せられるように、歩き出した。

林完二の宙の本そらを買った。

圭吾にはお似合いだと思う。

彼の部屋には何度か行っただけで、たぶんこれは無かったはずだ。  
出版されたばかりだから、きつと無いだろう。

尚美は頬を膨らませてふくみ笑いを浮かべながら、両手で書籍の  
入った袋を抱かかえるように持つと、書店を出た。

二階のフロアには下着専門店が在る。

色鮮やかな女性用下着はイヤラシさは無くて、寧ろ可愛いものば  
かりだ。

尚美は思わず足を止める。

頬が赤くなつた。

可愛らしい下着を着けたいと思うのは、別に見て欲しいからではない。

可愛らしい下着に包まれた自分そのものを見て欲しいのだ。

その感覚は一種のラッピングのような物かもしれない。

誰に見て欲しいのかが瞬時に頭に浮かんだとき、頬が熱くなって紅潮した。

再び歩き出した足取りは心なしか速くなって、一番近いエスカレーターに飛び乗った。

1階の出口を抜けると、雨は上がっていた。

どんよりと低い雲は相変わらずで、夕方の4時過ぎだと言つのに、やたらと外は暗かった。

濡れた駐車場のアスファルトに、水銀灯の明かりが流れるように映りこんでいる。

自転車置き場は歩道の遥か向こうに在る。

入った時と出る場所を間違えてしまった。

心が高揚して、ウツカリ自転車置き場から離れた場所へ出てしまった。

仕方なく尚美はそのまま歩道を歩き出すが、停車したばかりの車から降りてきた人影に目が停まった。

彼女から車数台分しか離れていなかった。

川田真穂……。

スウェードのショートパンツにヒョウ柄のジャケットを羽織って、この前見た時よりも、ずっと大人びた服装に包まれていた。

一緒に車から降りて来たのは誰だろう……。

真穂の反対側から車を降りてきたのは、どう見ても高校生などではない。

大人だ。若く見て大学生だろう。

尚美は目を凝らして、ふたりの会話を見つめる。水銀灯の明かりに浮かんだ唇が、楽しげに動く。

「今夜は遅くていいんだろ？」

「うん。いいよ」

「俺ん家来る？」

「ダメ。遅くなっても帰らなくちゃ」

甘えるような笑みで、真穂は男を見上げる。

瞳に映る街路灯の光が、哀しげに煌く。

「ちよつとトイレ行ってくる」

真穂は駐車場と建物を仕切る道路を渡ると、男より先にイオンへ入った。

尚美は何だか胸騒ぎがして、真穂の後を追う。

援交？ それって本当だったのだろうか？ テレビの報道だけの世界だと思っていた。

会話の中で、ふたりは兄弟などではない事は明らかだ。ましてやどう見ても親子でもない。

尚美が入口の二重扉を抜けた時、真穂はトイレに通じる通路に入っ

てゆくところだった。

どうして後を追ったのか判らない。もし……援交だったら止めさせる？ そんな権限は自分に無いのも承知している。

女性用トイレのドアを開けた。

広々とした間口の先に洗面台がある。

ビクツと振り返った真穂が、大きな洗面台の前にいた。

彼女は少しの間尚美を見つめると、再び手元に視線を戻す。

尚美は彼女の手元を見つめた。

真穂が小さなピルケースから取り出したのは銀色の薬のシートだ。

彼女はシートから一粒、白い錠剤を抜き出す。

「ナニ？ なに見てんの？」

こちらを見ない、いらだたしい口の動きを尚美は読んだ。  
微かに唇が震えていた。

「どこか、悪いの？」

尚美は彼女に近づく。

銀色のシートに書かれた文字が見えた

R i t a l i n

「こっち来ないでくれる」

視線を向けずに発した真穂の言葉に、尚美は思わず足を止めた。

あつと言う間に彼女の息が荒くなるのを感じた。

彼女は何かに急かされるようにクスリを口へ入れると、バックからミニペットの飲料水を取り出して慌しく口へ流し込む。

半分入っていた水が、あつと言う間に空になった。

真穂は洗面台に両手を着いて、息を吐き出す。

「それ、何の、クスリ？」

尚美の問いに、真穂は応えなかった。

その代わりに、慌てて薬のシートをピルケースへ戻すと、それをバックに放り込んだ。

少しの間彼女は俯いて息を整えていた。

心配そうに見つめる尚美は、その場から動けなかった。

売り場に流れる賑やかな音楽が、ノイズとなってドアから染み込んでくる。

呼吸を整えた真穂は、尚美を肩で交わしてトイレを出て行く。

振り返った尚美には、揺れるドアしか映らなかった。

#### 【44】時間

夕食の後、コッコンとドアが鳴る。

「今度はどんなお悩みなのかな？」

志美がおどけて尚美を自室へ促した。

「ねえ、オネエちゃん」

尚美はベッドの上に、志美は机の前の椅子へ腰掛けた。

「なに？ また深刻な顔して」

「リタリンって薬、知ってる？」

「知ってるけど」

即答だった。

志美の学校でもひと頃噂になっていた。

誰々が買っているとか、誰々が病院で100錠処方されたとか。

砕いて鼻から吸うと、利きがいい事も話してくれた。

その他にも、一部の睡眠薬を摂取してトリップする輩もいるという。

尚美は姉の唇を一心に読み込んだ。

リタリンは精神科医療で主に使われるが、内科でも処方されるそう。ただし、現在その薬を処方する病院はほとんど無いと言う。

服用を続けると副作用が激しく、その中で禁断症状に似た副作用に苦しむ人が増えている為なのだそう。

「服<sup>の</sup>むと、どうなるの？」

「どうなるんだらうね」

志美は椅子の背もたれに頬杖を着いて

「元々精神安定剤なんだらうけれど、普通の人<sup>が</sup>服むと噂では視界がグルグルまわって酔っ払ったみたいになるみたいよ。それが良くて、健康な人間は服むみたいだから」

志美は真顔に戻って瞬きする。

「でもね、服み続けると禁断症状が出て、身体が震えたり吐き気が



したりするみたい」

彼女は絶対に手を出してはいけないと、妹に強く言った。

尚美は頭をブンブンと振って

『そんなの服まないよ』と手を動かす。

彼女　真穂はどうしてそんな薬を服んでいるのだろう……。

「なんでそんな事、急に訊くの？」

志美は少しだけ心配そうな笑みを浮かべた。

「う、うん……な、んとなく……」

尚美は笑顔を浮かべてみせる。

外は再び雨が降り出して、小さなノイズがカーテン越しに聴こえてきた。

何時もより早く目が覚めた。

尚美は勢いよくカーテンを開け放つ。

久しぶりの陽射しが眩しくて、思わず目を細めた。

二階から見る家並みの向こうに、白い雲が浮かんでいた。

蒼い空がキラキラと輝いている。

キッチンへ降りると、母親が深刻そうな顔で声をかけてきた。

「丁度よかった、ナオ。藤河の叔父さんが亡くなったそうだから、これから出かけるから」

「そう……」

藤河の叔父さんの名を久しぶりに聞いた気がする。

隣町に住んでいる母方の親戚で、小さい頃は大大世話になったようだが、尚美の記憶には薄っすらと面影が浮かぶだけで顔すら思い出せない。

尚美は椅子に座って食パンに手を伸ばした。

「アンタも早く着替えなさい」

母親はパジャマ姿の尚美に言った。

「えっ？」

「ナオも行くのよ。小さい頃お世話になったでしょ」

『学校は？』手を動かす。

「いま電話したから、アンタは制服でいいからね」

尚美は立ち上がって自室へ向った。

制服に着替えた尚美は、青色の包みを持って考えていた。  
自分でラッピングした包みの中身は、空の本だ。

今日は圭吾の誕生日なのに……。

放課後に渡そうと思っていた。

数日前、プレゼントを購入した日から、勝手な想像の中でカレが満面の笑みを見せる。

他の誰にも見せない、自分だけに見せる優しい微笑み。

ガサリと包み紙が音を立てる。抱かかえる腕に、つい力が入った。  
インターホンが鳴って、ランプが点滅している。

母親が階下から呼んでいるのだ。

尚美は窓の外に広がる、久しぶりの光る蒼穹に向かって一つ溜息を零した。

『オネエちゃんは？』

「志美は学校が終わってから来るって」

『あたしは何で朝から？』

「ナオの方がお世話になったからよ」

電車で揺られていた。

窓から降り注ぐ陽射しで、電柱の影が規則的に車内を横切る。

叔父の家まではローカル線で1時間ほど掛かる。

駅を降りると大きなターミナルが在って、そこでバスに乗り換え

る。

バスに揺られて20分ほどで、到着した。

古い日本家屋の建物は大きく、檜の門扉をくぐると、庭には銀杏の木が一本植えてあった。

それが尚美にとつては、何となく見覚えのある風景だった。

確かにここへ来た事があるのだろう。

「連絡くれれば駅まで迎え出したのに」

玄関で迎えてくれたのは、娘の芳美<sup>よしみ</sup>だった。

彼女には小さい頃に遊んでもらった記憶が微かにある。

久しぶりに会った芳美は、社会に出てすっかり大人になっていた。

「ナオちゃん？ 大きくなったね」

母親に話しかける彼女の言葉を読んで、尚美は少し頬を紅くする。弔問客の出入りは思いの外多くて、尚美もお茶をだしたりビール瓶を片付けたりとなかなか忙しく動かなければならなかった。

気付けばお昼が過ぎている。

「ナオちゃんもお昼にしょ」

芳美が肩を叩いて声を掛けてくれた。

一緒に台所へ行つて、店屋物の天井を箸でつついた。

「あたしが最後に見たナオちゃんは、まだこんなだったよ」

芳美は椅子に座ったまま、屈んで手を床に向って伸ばす。

彼女が示した背丈は、80センチくらいだろうか……。

尚美は彼女の動作に苦笑する。

「確か、まだ幼稚園だったかな」

尚美は笑顔で何度か頷いた。

「こんなふうに一緒に話が出来るようになって嬉しいな」

海老天を齧った芳美が呟く。

幼稚園児の自分は彼女とどうやってコミュニケーションをとっていたのだろう。

今の尚美にはその時の記憶はほとんどない。

目の前の芳美がおそらく、今の尚美の年頃だったはずだ。

それが何だか不思議な感じがして、尚美は彼女の些細な話を読み続けては小さく笑った。

場所柄、あまり声を出して笑え無い事は都合がよかった。

再び弔問客が家族で訪れた。

立ち上がろうとした尚美を「いいよ」と制した芳美は、お茶を入れると台所を出て行った。

午後になると、客間が人で埋まってゆく。

午前中の弔問客はわりと直ぐに帰ってしまうが、午後から来る客は長居する人が多いからだ。

8畳を二間繋げた客間には大きなテーブルが三つ並んでいた。

最初のうちは叔母さんの知り合い関係が多くて女性の方が目についたが、次第にスーツ姿の紳士が増え始めた。

尚美の母親は、叔母に代わって来客の話し相手を引き受けていた。

尚美は時折時計を見る。

みるみる時間は過ぎていった。

#### 【44】時間（後書き）

申し訳御座いません：多忙につき、更新ペースが落ちております。  
大分先まで書き終えてはいるのですが、推敲する時間がなくて：少  
しずつ更新いたします。

## 【45】哀しい後姿

3時過ぎに姉の志美が到着して、尚美は何だか少しだけホッとす  
る。

「どうしたの？ 迷子の子供みたいな顔して」

ひと通り挨拶と焼香を終えた志美は、台所にいた尚美に笑顔で声  
を掛けた。

「うん……」と尚美も笑みを浮かべるが、うまくいかない。

「まあ、ナオは小さい頃だいが可愛がってもらったしね」

志美は、尚美が叔父の死を悲しんでいると捕らえたようだ。

叔父との記憶があまり無いけれど、残された芳美や叔母の事を考  
えると確かに悲しみは湧き出る。

しかし、今の尚美の心境はそれが支配している訳ではなかった。

不謹慎かもしれない でも、誕生日は1年に一度しかないのだ。  
明日になって渡したって、そんなに呆れる者もないだろう。

でも今日渡したい。

今日渡すから意味があるのだ……。

「今日、何時頃帰れるかな……？」

尚美は呟くように姉に尋ねた。

「今日は遅くなるんじゃない？」

「そうか……」『そう』という発声は、意外と難しい 『う』な  
のか『お』なのか難しいのだ。

「どうした？ なんか予定でもあったの？」

志美は湯飲みをひとつ取ると、自分の分のお茶を入れる。

尚美は自分のカバンに入った包みを取り出した。

青色の鮮やかな包みに、銀色のリボンが撒きついている。

「ナニ？ 誰かにプレゼント？」

志美はそう言っただけで直ぐに、瞬きをして瞳を丸くした。

「圭吾くんだ」

尚美は姉の応えに、コクリと頷く。

「誕生日？」

尚美はもうひとつ頷いた。

志美は肩をすくめて小さく息をつくと「ついてないね。今日が誕生日だなんて」

尚美は諦めたように、ゆっくりと包みをカバンに仕舞いこむ。やっぱり今日中に渡すのは無理のようだ……。

志美はそんな妹の肩をつつくと

『あんだ、先に帰んなよ』手を動かす。

『でも……』手話には手話で返す癖がある。

正直、叔父さんに悪い気がした。弔う気持ちが欠けているような罪悪感が過る。

「大丈夫、お焼香したんでしょ？ ちゃんと手も併せたんでしょ？」

尚美は再び黙って頷く。

「叔父さんはね、そんなちっちゃい事で怒らないから。もっと大らかな人だったし、ナオを応援するに決まってるから」

そうなのだろうか……？

『オネエちゃんは、叔父さんの事、覚えてる？』

「覚えてるよ。あんだを連れて、よく近所の駄菓子やに行った」ふと思ひ出す。

家の近所の国道へ出た角に、昔は駄菓子屋が在った。

いつ無くなってしまうたのか忘れたけれど、一緒に行く友達のいない自分を連れて、確かに叔父は何度かそこへ行ってくれた。

何度か……記憶は僅かだけれど、本当は何十回も連れて行ってくれたのかもしれない。

『お母さんにはあたしから言っとくから、したくして帰りな』

志美が忙しなく手を動かす。

客間に視線を移すと、母はまだ来客とお喋りをするのに夢中だ。尚美は静かにカバンを手に取ると、そっと玄関へ向った。

叔父の家の近くからバスに乗って駅へつくと、尚美は足早にロータリーを歩いた。

ふと視線が止まる。

その先には真穂の姿が在った。

駅構内へ入るエントランスの直ぐ横には、平和を象徴するという女神像が立っている。

土台を含めると2メートル以上在るその銅像の横に、彼女は佇んでいた。

俯いてケイタイをいじっている真穂は、尚美の姿には気付かない。尚美はそのまま構内へ入ろうとしたが、一端立ち止まって再び真穂を見た。

風に吹かれるスカートの裾が僅かに揺れる後姿は、何処か淋しげでも在る。

尚美は彼女に近づいた。

近づいて判ったが、彼女のケイタイを持つ手は微妙に震えている。何処か落ち着きが無く、頻繁に右と左の足を交互に揺すっている。

肩を叩くと、叩いた本人さえ驚く勢いで真穂は振り返った。

「こ、ここで、ナニ、してるの？」

尚美の言葉が聞こえなかったかのように、真穂は沈黙して彼女を見つめた。

どうしてこんな所にこの娘がいるのか、不思議に感じているようだ。

「あんだこそ……」

真穂は途中で言葉を切って、再びロータリーの中央へ身体を向ける。

再び真穂の肩に手を触れようとした時、一台の車がやって来た。この前見たのとは違う。

二人乗りのペタンコな車だった。



窓がスルスルと降りると、中から声がした。

尚美は車の主を見ようと身体を屈める。

発する言葉も読み取りたかった。

「……メールくれたの、キミでいいの？」

髪のながい色白の男だった。

キレイな顔……充分その表現が通用する。

「ハイ、そうです。ヤツクルさんですか？」

真穂は身を屈めて車の窓を覗き込むと、普段より可愛らしい半音上の声を出した。

「ああ、俺ヤツクル」

車の男はそう言って笑うと「乗れば」

尚美は慌てて半歩前に出た。

「あれ？ ツレも一緒？」

男は尚美の姿に気付いて目を丸くする。

まるでドラマのクサイセリフを吐くタレントのような、大げさな仕草。

「えっ……こ、この人は関係ないよ」

真穂は尚美を後ろへ追いやろうとした。

「え、ん、こ、う、ですか？」

尚美はわざと、抑揚を気にせず声を出した

「なんだよ、そいつ」

車の男はあからさまに不機嫌な顔をする。

「あ、た、し、たち、まだ、中、学、です」

再び尚美が声をだす。

「ちよつとあんた、なによ」

「なんだよ、頭おかしいのか？ それとも、お前ら新手の詐欺か？」

男はパワーウインドーを閉めながら、車をロータリーに沿って走らせた。

停まっているバスを避けると、あっと言う間にいなくなった。



## 【46】救いの声

「ちよつとアンタ、なにやってんの？」

真穂は尚美の肩を突き飛ばす。

尚美は大きくよろめいて後ろに下がった。

「どうして、そんなに、適当に男の人と……」

駅の雑踏に消え入りそうな小さな声だった。

「アンタに関係ないんだよ」

真穂の怒りは尋常じゃなかった。

持っていたカバンを肩から手に持ち替えると、振り回して尚美の身体にぶつけてきた。

「仕方ないんだよ。どうしようもないんだよ。アンタみたいな障害者には解らないんだ！」

カバンを振り回した真穂は3発目を尚美に向けたところで、勝手に足が崩れるようしてその場に倒れた。

尚美は慌てて真穂に近づく。

頭を少しだけ起こすと、自分のカバンを下に敷いた。

辺りを見回す……人通りの視線だけがふたりに注がれている。

だれか、だれか助けて。誰か手を貸して……。

周囲の視線は、尽く通り過ぎてゆく。

ケイタイを構えて写メを撮る素振りを見せる大人までいた。

尚美は真穂の顔に覆いかぶさり、彼女が撮られるのを遮る。

「どうしました？」

声は聞こえなかった。

それでも彼は、尚美の肩を叩いて再び「どうしました？」

顔を上げた尚美は、こげ茶色の背広を着たオジサンを見上げた。

「た……た、お、れて……」

尚美は動揺しながら、逡巡しながら声を出した。

市立病院のロビーは、ビックリするほど広々としていた。

自分の住んでいる地域の市立病院はこれほど立派ではないし、最近新築した赤十字病院だって、この半分の広さのロビーだ。

尚美はその広いロビーから少し離れた、急患専用口の傍の固い長椅子に腰掛けていた。

隣には救急車を呼んでくれたこげ茶色の背広を着たオジサン。

上下の色が違うから、スーツではなく背広だ。ジャケットと呼ぶほどお洒落でもなかった。

尚美は黙って俯いていた。

オジサンはゴソゴソと何かをしていたかと思うと、尚美の腕を突いた。

振り返る尚美に、オジサンはメモ帳を見せる。

僕は小学校の教師をしています。失礼ですが、あなたはもしかして、耳が不自由ですか？

尚美は視線を上げてオジサンを見ると、小さく頷く。

筆談の方がいいですか？

オジサンは再び、ボールペンをメモ帳に走らせる。

彼がペンをよこしたので、尚美はそれを受け取ると

私は書きますが、唇が読めますのであなたは話してください。と書き記した。

彼は市内の小学校教師で、名を高木と言った。

どうして彼女は倒れたのかな？　と言う彼の質問に、尚美は解りません。としか応えられなかった。

真穂が点滴を受ける間、高木と尚美は通路の長椅子に腰掛けていた。

小一時間経っただろうか　点滴が終わる頃、真穂の母親が病院

へ現れた。

高木は自分の身分を明かして母親と話をしていたが、直ぐに帰ってしまった。

彼は尚美の方を一度見たが、一緒に帰ろうとは誘わなかった。

尚美は帰るタイミングを外して、母親が医師の説明を聞いている間通路で待っていた。

ふと隣の部屋に運ばれる真穂が見えた。

入院か日帰りか決まるまでの臨時のベッドが置いて在るらしい。

尚美はそつと部屋を覗いてみる。

目を閉じた真穂が白いベッドに横たわっていた。

小さく胸が上下しているのは、眠っているのだろうか……？

医局の入り口では真穂の母親と担当医が話している。

尚美は臨時の病室へ入って、真穂の傍らに立った。

「薬のせいだよ……薬を買わないとだめなんだ……」

真穂は眠っていないかった。

尚美の気配をずっと感じていたのか、彼女が傍らに立つと小さく声をだして口を動かした。

尚美には声の大きさなんて関係ない。唇さえ動けば、それは通じる。

「薬がないと、あたしはもう駄目なんだよ。やばいよ……」

「治るよ……きっと」

尚美はやつとの事で言葉を発した。

なんと返していいのか判らない。でも、彼女が飲んでいた薬の治療は出来ると、以前姉に聞いていた。

真穂はリタリンの中毒なのだろうか……それともっと他に薬をのんでいるのだろうか……。

尚美には判らない。

医師と話しを終えた母親が入って来た。

母親は尚美と反対側のベッドサイドに屈んで真穂に声をかける。

「真穂？ どうしてこんな所にいるの？」

真穂は沈黙した。

閉じた瞳の左の淵から、小さな雫が零れて横に流れた。

左側に立った尚美にはそれが見えたけれど、母親の位置からは見えなかった。

「貧血らしいから、少ししたら帰れるわね」

彼女は解っていない……娘のイタミが解っていない……。

尚美は無言で真穂に話しかける母親の横顔を見た。

「あの……」上ずった声が出た。

驚いて振り返る母親は「一緒にいたの？ どうしてこんな所まで来てたの？ 学校はちゃんとしたの？」

矢継ぎ早に尚美に質問してきた。

同じ制服を着ているから、同級生なのは判っただろう。

尚美は旨く応えられなくて、ただ黙ってしまった。

「帰れるのかしらね」

母親は忙しそうにそう言つて「先生！」と呼ぶ。

娘を心配しているのか、自分の予定を心配しているのか定かでない。

尚美の手に何かが触れた。

手元を見ると、真穂が自分の指先を力なく握っている。

初めて感じる彼女の手の感触は、とても冷たくて哀しかった。

真穂を見ると、彼女の唇が音も無く動いた た・す・け・て。

尚美には、そつと彼女の手を握り返す事しか出来なかった。

再び彼女の目尻から哀しい雫が流れたのを、母親は気付かなかった。

## 【47】電話ボックス

病院を出ると、辺りは見知らぬ薄闇に包まれていた。広い駐車場の敷地に植えられた並木を、水銀灯が静かに照らしている。

救急車に乗って来てしまった為、尚美にはどっちの方角から来たかも判らなかった。

大きな駐車場から出ると、見た事も無い大通りが続いている。時計は7時をまわっていた。

どうしよう……。

とりあえずバス停を探す。

暫く歩くと屋根付きのバス停が見えた。

人影はひとり見えるだけで、誰もいない。

不安に駆られながら尚美はバス停に近づく。

「やっぱキミか」

街路灯に照らされた男の顔が見えた。

先に病院を後にした高木だった。

「なんか気になって、一本乗り過ごした所さ」

高木は少し薄くなりかけの頭をポリポリとかいてみせる。

尚美は安堵が込み上げて、足を速めた。

時刻表を覗くと、前のバスは6時45分……次は7時18分だった。

彼は直ぐに乗れたバスを乗り過ごして、尚美が来るのを待っていたらしい。

教師らしいと言えばそれまでだが、それだったら一緒に病院を出ればいいのに……。

教師にもいろいろいるのかしら？ 尚美は薄闇に浮かぶオジサンの顔を見上げた。

バスで駅まで行くのは意外と時間はかからなかったが、家の最寄駅に着いたのはもう8時半を過ぎていた。

もう圭吾に会うのは、今日は無理だろうか……。

尚美は改札を抜けると、駅前商店街を前に佇んだ。

会社帰りのサラリーマンやOLが数人、自分の両脇を追い越して夜の路地へ消えてゆく。

学生の姿も僅かに見えて、迎えの車に乗り込んだりしていた。

目の前に公衆電話がある……でも電話は……。

尚美は生まれてから電話で会話した経験が無い。

当然のように誰でも使える電話機は、尚美には無用の長物にすぎないのだ。

ケイタイなら、メールが出来るのに……。

尚美は公衆電話に近づいて、扉を開けた。

薄汚れた狭い空間が、彼女を飲み込む。

受話器を手取る……思った以上に重い。

手帳を開いた 前に冗談で教えてくれた圭吾の携帯電話の番号が書き記されている。

小銭を探して10円玉を数枚いれると、番号をプッシュした。

何かのノイズ……そして違うノイズ……コール音は判らない。

ただ、単調なノイズが耳に当てた受話器から聞こえてくる。

気持ちが吸い込まれそうになって、思わず受話器を置いてしまった。

息をついて周囲を見渡すと、汚れたガラス越しにぼんやりと商店

街の街灯が見える。

深呼吸をした。

再び受話器を掴んで、再度プッシュボタンを押す。090……。

耳の奥にノイズが流れ込んでくる。

静かに息を整えた。



鼓動が内側から胸を激しく叩いた　喉の奥から何かが競りあが  
ってきそう、唾を飲み込む。

長いノイズの後に、音調が切り替わった。

音　やさしい音が聴こえる。彼が電話に出たのだ。

「あたし……です。尚美……です」

途切れ途切れだった。

「駅前に、いるの……」電話の向こう側と会話をすることはできない。

尚美は自分の居場所だけを伝えた。

やさしい音は忙しくつぶく。

きつと彼は何かを伝えようと喋っているのかもしれない。

「誕生日……今日、誕生日だね。おめで、とう……」尚美の声は、  
そこで遮られた。

携帯電話にかけると、100円での通話時間はごくわずかだった。

100円玉も使えたのだと気付くが、もう遅い。

尚美が話したすの遅れたから、100円玉数枚で会話が出来たの  
は、いや話せたのはほんのごく僅かだ。

小銭はもう無かった……あっても、一方的に話すしかない電話は  
やっぱり虚しい。

話した言葉は彼に届いたのだろうか。

家に帰ろうか……それとも藤河の家に帰ろうか……。

でも、駅前にいる事は伝えた。と、思う。

尚美は近くの自販機でジュースを買って、プルタブを引いた。

小銭はできたけれど、もう電話ボックスに入る気力は無かった。

尚美はジュースを口にすると、ホッと息を吐いた。

もう父が帰って来る時間だった。

尚美が家に帰っているかどうか、母親は心配して確認するだろう。  
姉のほうも、まさか妹がまだ圭吾にも会えずに外をウロウロして  
いるとは思ってもいないだろう。

時計は9時になるところだ。

尚美は飲みきったジュースの缶をゴミ箱に入れると、気持ちを切り替えた。

帰ろう……今日は諦めよう。うん……それでいい。

自転車の車輪が激しく廻るシャーっという音が近づいて来て、スザッと止まった。

自転車の音とは判らないけれど、尚美はノイズの聴こえる方向を振り返る。

圭吾が、薄闇に浮かんでいた。

「ようっ」と口が動いて、手を上げる姿がある。

何時ものぶつきら棒な感じでなくて、何処か気さくで何処か照れくさそうに。

よほど必死で自転車をこいできたのか、肩で激しく息をしていた。薄闇の街路灯に照らされた彼は、やけに眩しく見えた。

尚美は胸の奥から、熱い何かが競り返して来るような感覚を覚えた。

今日は逢えないと思っていた。

明日になれば学校で逢えるのに、今日逢え無い事が無性に悲しかった。

バレンタインはとうとう渡せなかった。

友恵は、軽い気持ちで渡せばいいんだよ。と、言っただけで、せっかく買った潇洒な包み紙のチョコレートを結局渡せずにその日は終わってしまった。

今でも机の引き出しの一番下の奥に仕舞い込んで在る……。

今度こそ……その想いも遂げられないと覚悟を決めた矢先に、彼が自分の傍にいる。

胸の奥から湧き出た熱い何かは、途端に目頭を熱くさせた。

『よく判ったね』

尚美はくちやくちな笑顔を作って小走りに彼に近づく。

『だって、駅だってナオが言ったんだろ』

『ちゃんと伝わったんだね』

『やけに聞き取りにくかったけど、とりあえず俺には通じるってことか』

圭吾はそう言ってから鼻の頭をかいて

『俺、思わずお前に必死で応えてたよ。なんか判ないけど、受話器に向って喋ってたよ。聴こえないのにさ』

尚美はカバンの端をキュツと握り締めた。

聴こえてたよ。ずっと聴こえてた。やさしい音がちゃんと聴こえてたよ。

## 【48】こころの隙間

朝起きた時、視界はぼやけている。

視力が極端に悪くなったのは小学校二年の頃だった。

中学の入学を機にレーシックの治療を受けようと、悩んだ事も在る。

彼女はチェックのパジャマを脱いで几帳面にたたむと、制服に着替えた。

寝癖直しのスプレーを髪に散布して丁寧にブラッシングする。

ちよつと癖つけのある毛先は、いつも通りなかなか言う事をきかない。

机の上に置かれたセルフレームのメガネをかけると、窓の外には青空が広がっていた。

「あんたも以外にバカなのね」

由加子はメガネに手を添えると、放課後の陽射しを浴びながら眩しげに眼を細めた。

「勉強以外は自信がないよ」

誠は理科実験室の窓に手をかけて身を乗り出す。

西日が校庭を淡く黄金色に照らしている。

陸上部の練習する笛の音が聞こえてきた。

「で？ ナオを襲っちゃったんだ」

「襲ったわけじゃないよ。でも、彼女があんまり無防備だから……  
つい」

「ばか。それを襲うって言うのよ」

由加子は伊藤誠を睨むでもなくちらりと見ると、彼と並んで窓枠に手を着いた。

風が黒髪を揺らす。

頬にかかった髪を、ゆつくりと指で拭った。

「まあ、圭吾が怒るのも無理ないよ。いろんな意味で、ナオを大切に思ってるんだもの」

「充分反省してるさ。アイツ、凶暴なんだな」

誠は身体を反転させて、窓に寄りかかった。

黒い大きな机の並ぶ理科実験室は、西日が落とす影の中で時間が静止したように佇んでいる。

廊下に響く足音は、図書室を利用する生徒が昇降口へ向っているのだろう。

「その後は？ どうしたの？」

「どうもしないよ。彼女に会わせる顔もない……」

「とうぜんね。酷い事言っただもの」

由加子は冷静な口調で外の景色を眺めながら言う。

上階から微かに管楽器の音が聞こえてくる。

吹奏楽部の連中が、部活が始まる前に自主的に音を出しているのだ。

「そろそろあたし、部活行くから」

由加子は窓の淵から手を離すと、振り返って彼に言った。

「ああ、頑張ってたな」

二年生のクラス替えて、由加子と伊藤誠は同じクラスになった。

尚美とはクラスが離れた由加子だけれど、未だに交流がある。

何故か彼女は教室で親しい友人を作れない。

親しい友人は、何時も他のクラスにいるのだ。

そんな中で、以前から知り合いだった伊藤誠はどちらかと言えば親しい部類に入るかもしれない。

いや……彼女は自分でも知らないうちに、彼に近づいていたのかもしれない。

誠が尚美に興味を抱いていた事は、去年の話だった。

それからどうなったか、経緯は知らなかったし、あえて訊きもしなかった。

「織堂は元気？」

誠が急に彼女の名前を出したのは昨日の放課後だった。

今でも時折廊下で尚美と会話らしい何かを交わしている姿を、誠は何処かで見ていたのだろう。

それとも、ごく稀に一緒に帰るところを見たのだろうか。

伊藤誠自身は、あえて尚美の視界に入る位置には行かなかった。

またアイツに殴られでもしたら、シャレにならない。

それでもやっぱり気になっていたから、せめて由加子に尋ねようと思って、結局こんなに時間が過ぎてしまった。

誰かと誰かが怪しいとか、誰が誰を好きだとか、学校の噂は絶え間ないし、どれが本当かも判らない。

由加子は誠から話を聞くまで、誠と尚美の事も同じように感じていた。

あの頃ちよつと興味があつただけ……ただそれだけだと思つていた。

彼に事情を聞いた時、初めは軽蔑した。

異性として幻滅した。

なのに……。

でもそれは続かない……愚かな行為をした彼もまた、隙の在る同じ人間なのだと逆に親近感さえ沸き起こる。

小学校の時の彼のイメージは、見るからに優等生で隙のない人間。涼しげな眼差しは、生徒会長としての自信の表れ。

誠とは小学校が別だった由加子にとって、生徒会の合同行事で出逢った時に感じた彼の印象は、そんな完璧な姿だった。

そんな誠も、やっぱり完璧ではないのだ。

完璧な彼に惹かれていたのだと思つていた。

完璧でない彼には幻滅するだけだと思っていたが、それは逆だった。

完璧でない誠は、由加子が抱いていた理想像とは違っていたのに、彼の弱さが見えた途端にその隙間を埋めてあげたくなったのだ。

コレが本当に惹かれるという事なのか、それとも母性的な本能なのか由加子には解らなかった。

由加子は理科実験室の出口で振り返ると、誠に向って小さく手を振った。

「じゃあね」

今まで見せた事の無い、人懐っこい笑みで胸の前に上げた手を振る。

異性に対してそんな仕草を見せた事自体が初めてだった。

「ああ」

誠は窓に寄りかかったまま、彼女を見つめた。

窓から差し込んだ陽射しが届いて、彼女の白い頬を黄金色に染めていた。

## 【49】黄昏

由加子には五つ上の兄と、二つ下の弟がいる。

父は市役所に勤め、母は信用金庫に勤めている。

厳格な両親の元、一姫として厳しく育てられた由加子は小学校の頃からしばしば夕飯の仕度を手伝ったりした。

小学校二年生からピアノを習っていたが、どうにも曲に感情移入できない事が不満で、五年生の時にあっさりと止めてしまった。

それでも音楽は好きだったから、中学では吹奏楽部に入り、クラリネットを担当している。

音感はいい方だから、初めての楽器でも直ぐに馴染む事ができた。男兄弟に挟まれて育った割には男性に対しての免疫は少ないように、今まで恋焦がれた異性と親しくなつたためしがなかった。

「加治<sup>かじ</sup>、またあたしの本持つて行つたでしょ」

由加子は弟の部屋のドアを、いきなり開けた。

「ノックぐらいしろよ。もう年頃なんだからさ」

絨毯に寝転がった弟の加治はそう言つて、不機嫌そうに姉を見上げる。

小6になつた弟は、益々生意気になつてきた。

しかし、不機嫌なのは由加子も同じだった。

最近自分の漫画本を弟が勝手に部屋へ持ち去つてしまう。

彼女には密かな趣味があつた。

少女マンガが好きで、メジャーどころはみんな読んでいる。

勉強の出来る生真面目な彼女の部屋は、参考書が溢れていそうだが実はそうでもない。

勉強机以外の本棚は、赤川次郎の小説と流行の少女コミックで埋め尽くされていた。



スカートの裾一杯に足を広げると、由加子は寝そべってジャンプを読んでいた加治を跨いで、ベッドの上に放り出された自分のコミック本を手を取った。

「まったく……」肩をすくめてひとつ息をつく。

「姉ちゃん……年頃なんだから、もっと気のきいたパンツはいた方がよくねえ？」

振り返って由加子は、加治の横っ腹を蹴飛ばした。

「痛っ！」

「ユカ、俺のケイタイそこに在るだろ？」

由二が風呂場ゆづじに続く脱衣所のドアを開けた。

「きやつ」

由加子は脱ぎかけたスエットシャツで、慌てて身体を隠す。

「ああ、これこれ」

ズカズカと入って来た由二は、洗濯機の上に置きっ放しだったケイタイを驚掴みにする。

「ちよ、ちよつと兄さん、ノックしてよね」

今年、市内唯一の大学に受かった兄の由二は、どこか無神経な所が在る。

「ナニ女ぶってんだよ。隠すほどの胸でも無いだろうに」

由二は素っ気無く言つと、妹を見るでもなく脱衣所を出て行った。

「まったくもう……」

由加子はスカートを脱ぐと、脱衣カゴに力いっぱい投げ込んだ。

学校では自分がうまく出せない。

本当はけっこう感情的で喜怒哀楽は激しい方なのに、昇降口をくぐって階段を上って、教室に入る順序で自分の表面に別の表皮が現れる。

メガネをかけてると真面目に見える。

小学校の時にそんな印象を誰かに言われて、それが頭から離れない。

何時の間にか真面目ぶった自分が構築されて、クラスメイトの前では優等生を演じてしまう。

教室では何時も模範的に振舞うから、同性にも何処か煙たがられている感もある。

その為か、クラスでぶつちやけた話しをする相手は見つからない。結局クラス委員などに任命されて、面倒な役目を負いなが何となく孤高に振舞うしかないのだ。

そんな中で、伊藤誠とはよく話しをする。

彼の方と言えば、同性の友達は多くて誰とでも気さくに会話を交わしていた。

意外だった……。

自分よりもむしろ孤高なイメージがあつた伊藤誠は、同じクラスで見る限りそんな感じは微塵もない。

勉強が出来る出来ないに関わらず誰とでも気軽に接するタイプらしい。

それでも気がつくところのグループにも属していないのは、やっぱりこちら側の人間なのだと由加子と思う。

そんな彼から聞かされた尚美との一件は、おそらく自分だけに話してくれた誠なりの懺悔なのだろう。

被害にあつた尚美には悪いと思いつながらも、誠との距離が途端に近づいたような気がした。

それでも尚美と親しい手前、誠とは何処迄近づけるか自信は無い。なにより、どうして彼が自分にあんな事を打ち明けてきたのか、

どうして自分にだけ罪のカミングアウトをするのか、その真意が判らない。

「ちょっとタンマ」

タンタンつと、指揮棒が机を叩いた。

「ちょっと田中さん。走ってるよ。ちゃんと指揮を見て、周りの音を聞いて」

「す、すいません」

「どうしたの田中さん。さっきから何だか集中できてないみたいだけど。体調悪い？」

すぐ後ろでフルートを吹く、同じ二年生の三上恵奈が小さく声をかける。

「うっん。別に大丈夫」

由加子は慌てて振り返ると、恵奈に笑みを送った。

部活に来る前に誠と話した理科実験室。黄昏に浮かんだ二人だけの空間が、由加子の想いを募らせた。

ゴメンね、ナオ……。

やっぱり尚美に対して罪悪感が湧く。

## 【50】アイツ

梅雨が明けると、陽射しは急に眩しくなる。

強い陽光は、夏服のブラウスを真っ白に照らしだす。

期末試験が近づいていた。

試験の5日前から、どの部活も練習は休みになる。

しかも職員会議があつて、今日は午前中で授業が終わった。

尚美は久しぶりに由加子に声をかけられて、放課後の教室で彼女を待っていた。

友恵はひと足早く、他の女子と帰って行った。

カラオケに行くらしく、尚美には少々すまなそうにしていたけれど、彼女は全く気にしない。

「ゴメン、今日ちよつとマミたちとさ」

逡巡する友恵に、尚美は首を横に振って「大丈夫、だよ」とだけ笑顔で応えた。

何時も友恵と一緒にいる訳ではない。

しかし彼女は、他の女子と遊びに行く時は必ず尚美に声をかける。尚美はそんな心遣いがちよつぴりくすぐったい気もする。

部活が無いせいか、放課後のグラウンドは淋しいほどに静寂していた。

窓から外を覗くと、陽射しに照らされたグラウンドだけが広い空間となつて佇んでいる。

整備された野球部のグラウンドも人影は無い。マウンド周辺は、渦状に土をならした跡がクッキリと見える。

廊下を歩く足音が響いて、遠くの笑い声が微かなノイズとなつて小波のように聞こえた。

振り返ると、ちょうど由加子が尚美の教室の前に来た。

「ゴメン、プリントの整理に職員室で足止めされてさ」

尚美は首を横に振って、カバンを手に取ると教室を出た。  
階段を下る足音は二つだけ、吹き抜けを満たすように静かに響いていた。

昇降口を出て、校舎の裏手を抜けると、途端に注ぐ陽射しにふたりで同時に眼を細める。

正門を抜けて歩道に出た時、由加子が尚美の二の腕を突いた。

「あのね……聞いたよ」

由加子は口ごもり、尚美は何の事だか判らなかった。

「伊藤に……」

尚美はその名前を彼女の唇から読み取った瞬間、背筋が凍りついた。

それを悟られまいと、薄っすらと笑顔を浮かべる。

由加子の黒髪に、陽射しが艶やかに白い線を作り出す。

「アイツも、悪気は無かったんだ。本当はそんな事思っていないから。だって、アイツ自身、ナオのこと好きだったんだから……」

尚美はただ頷いていた。

「不器用だから、ナオに拒まれたのがアイツなりにショックだったんだと思う。恨まないで。なんて言わないけど、アイツの言った事は気にしないで」

由加子はチラリと尚美を見て、ちょうどさしかかった農協倉庫を見上げた。

尚美も思わず、倉庫の三角屋根を見上げる。

由加子らしい言葉だと思った。

伊藤をかばいながら、自分を気づかっている。

伊藤が言った言葉に自分が傷ついたであろう事を視野に入れた上で、彼を少しでもかばおうとしていた。

尚美は由加子が言う『アイツ』という呼び名に、特別なモノを感じ取った。

由加子の肩を指先で突くと、彼女は振り返る。

首を横に振った尚美の髪が、サラサラと揺れた。

旋毛に注ぐ陽射しが暑かった。

「大丈夫。今は、もう、平気、だから」

尚美は丁寧な、ゆっくりと声を出す。

「伊藤と偶然逢っても、逃げないであげてね」由加子は真顔で尚美に言った。

尚美は再び首を横に振る。

由加子の心配と真顔が少し可笑しくて、自然な笑顔が零れた。

あの時彼が言った『障害者を好きになるヤツなんていない』という言葉は、尚美の心に大きな穴を開けた。

その穴から冷たい風がゴーゴーと吹き荒んで止まなかった。

でもそれは、姉の言葉で埋められた。

四つ葉のクローバーは、三つ葉の障害を持った形態……でも、幸せを運んでくれる。

障害を持っていても、誰かに幸せを運んであげる事はできる。

その言葉に、尚美は救われた。

だから、もう伊藤を恨んではいないし、傷ついた言葉も掻き消えた。

圭吾の誕生日にはプレゼントを渡す事ができたし、彼の笑顔を見た。

息を切らしながら少しはにかんだ、何時もとは違う笑いには至福が含まれていたに違いない。

尚美は由加子の瞳を覗くようにして頷いた。

曇りの無いレンズの奥で、澄んだ瞳の虹彩が陽光を受けている。

伊藤の事を……由加子と伊藤の事をもっと訊こうかと思ったけれど、やっぱり止めた。

彼女がおせっかいを焼く男子は数少ないだろう。

『アイツ』と呼ぶ彼を、彼女はきつと特別な気持ちで見ているに違いない。

尚美は、少し俯いて歩く由加子の腕を再び突いた。

「暑くない？」自分の頭のテッペンをポコポコ叩く。

「暑いよね」

由加子が笑った。

ふたりは同時に<sup>そら</sup>旻天を見上げる。

雲の無い青空に、虹色の輪を広げた真っ白な太陽が眩しかった。

## 【51】二人乗り

遠くに浮かぶタンカーが、蒼穹<sup>そうきゅう</sup>と海を唯一分け隔てていた。  
碧く霞んだ水平線は、夏空の帳に溶け込んで揺れていた。

「海に行こうよ」

終業式の日、言い出したのは友恵だった。

海と言っても、海水浴場ではない。

市街地から外れて産業道路を横切ると、わりと大きな工業港がこの町に面している。

長い産業道路沿いの防波堤を越えると、ちゃんと砂浜もある。

「館内、海行こうよ」

友恵は圭吾にも声をかける。

「なんで？」

圭吾は怪訝に言葉を返す。

「武山くんも行くからさ、館内もおいでよ」

「武山なんてしらねえし」

圭吾は窓の外をみる。

「だって、ナオも行くんだからあんたが来ないと数が合わないじゃん」

尚美は友恵の言葉を読んでハツとする。

まだ、行くとは言っていない。

思わず立ち上がって、友恵に駆け寄る。

「武山とかと、ふたりで行きやすいだろ」

「ふたりだと、間が持たないじゃん」

ふたりの会話は続いていた。

尚美が友恵の腕を軽く掴む。

声を出そうか迷っているうちに

「ほら、ナオは行く気まんまんだよ」



思わず友恵の腕を掴んだ手に力が入る。

……まだ、何も返事してないよ……。

ちらりと圭吾が視線を尚美に向けた。

困惑した視線が、圭吾とぶつかる。

『海いくの？』圭吾が両手を動かす。

『ど、どうしよう』尚美も手を動かした。

『行ってもいいけど』

『じゃあ、行く？』

『ずるいつ！』友恵はそう言っただけで尚美の身体を突いた。

『ふたりだけで解る会話しないでよね』

友恵は頬を丸く膨らませて笑った。

『しかたねえな……』

自分の前に立つ友恵を、圭吾は見上げる。

『じゃあ、決まりだね』

スカートにするかジーンズにするか迷った。

迷った結果、デニムのショートパンツにサテンのミニ丈ジャケットを羽織る。

何時もよりも入念に鏡を見つめてみる。

少し伸ばした髪は、寝癖がつき易いから要注意だ。

トートバックには今朝作ったふたり分のお弁当が入っている。

夏休み初日、尚美は自転車に乗って駅へ向った。

住宅街の路地が陽射しに照らされて、何時もよりコントラストが

濃い風景に心が浮き立つ。

駅に着くと、自販機の前に武山宗司がいた。

周囲を見渡すが友恵も圭吾もまだ来ていないようだった。

向こうも尚美に気付いて、少し気まずそうに尚美を見る。

尚美はとりあえず小さな会釈をして彼に近づいた。

「織堂……だよね」

尚美は大きく頷いて笑顔を作った。

ポンツと、缶コーヒーが飛んでくる。

慌てて手を広げ掴むと、異常に熱い缶が手のひらを刺激して思わず落としてしまった。

「ひゃっ」と声ができる。

この季節、当然冷たい飲み物だと思ったから、意表をつかれた。缶を拾って顔を上げると、武山は遠慮気味に笑っていた。

「ごめん、間違ってホット買っちゃってさ」

武山は自分の持っている缶コーヒーを掲げて

「紛らわしいよな。この時期にホットが在るなんて思わないから目の前のボタン押したら、熱いの出てきてさ」

尚美は笑顔を向けて、缶のプルタブを開ける。

「普通に話していいんだよね」武山が言った。

尚美は頷きながら、コーヒーを口へ運ぶ。

「あいつら遅いよな。って、俺は早く来すぎたんだけどさ。館内って話したこと無いけど、織堂と付き合ってたの？」

尚美は缶コーヒーを口に着けたまま首を横に振った。

「違うの？」

どう応えていいか困って、首を傾げる。

付き合うとかの定義が、ふたりの間にはないのだ。

気さくというか、よく喋る男だと思った。

友恵と一緒にだと、さぞかし賑やかなのだろう。

「あ、来た」

武山が手を上げた方を、尚美も振り返る。

友恵が自転車を一生懸命こいでいた。

圭吾がその後ろで、路地から出て来るのが小さく見えた。

尚美な何だかホッとして、気持ちが楽になる。

友恵は駐輪場へ自転車を入れてから、歩いてふたりの元へ来た。背負ったリュックには、約束通りお弁当が入っているのだろう。手にはコンビニ袋をぶら下げていた。

「ナオも、自転車置いてくでしょ？」

友恵が声をかける。

尚美は頭の上にクエスチョンマークを掲げて、友恵を見つめた。

「だって男がいるんだから、あたしらは後ろに乗っけてもらおうよ」

「えっ、二人乗りで行くのか？」

すかさず武山の声が飛ぶ。

「当たり前じゃん」

友恵は言い切って武山の傍らにある自転車に目を留める。

「ていうか、武山さんの自転車荷台が無いじゃん……」

「仕方ないだろ。俺のはマウンテンバイクだし」

「つかえなあい」友恵は決して怒った風でなく、楽しげに言った。

友恵の笑顔に、武山は何も言わずに肩をすくめた。

圭吾がゆつくりと三人の傍に自転車を止める。

「仕方ない、こちらはナオの自転車使おう」

友恵は尚美の自転車に手をかける。

ついたばかりの圭吾が怪訝に3人を見渡す。

「館内は後ろにナオを乗っけてね」友恵が言った。

「はあ？」

「あたしたちは、ナオの自転車借りるから」

友恵はそう言うってから、武山にコンビニ袋を手渡した「これ飲み

物ね」

圭吾は意味が解らず、尚美を見る。

彼女は苦笑いを浮かべて

『二人乗りで行くって』

圭吾は、楽しげに言い合いする武山と友恵を見つめて息をついた。

【51】二人乗り（後書き）

お読み頂き有難う御座います。

多忙の為、執筆ペースはかなりおちております。

しかし、確実にお話は進んでおりますので、宜しくお願いいたします（^^）；

## 【52】汐風

踏み切りを渡って駅の反対側へ行くと、古い住宅街が並んでいる。家並みをつつ切って県道を渡ると、河口付近に50年以上の歴史在る造船所が見える。

何故か寂れた場所に建てられた真新しい文化会館を横目に再び低い家並みを抜けると、海岸線に沿って走る大通りへ交差する。

長く続く防波堤の向こうから、波の音が聞こえていた。

もちろん、尚美にはただのノイズにしか聞こえないのだけれど……。

工業港の海岸線には釣り人や、犬の散歩に来た若い夫婦、大人のカップルなど様々な姿があった。

「お前重いから、俺不利だよな」

防波堤沿いの駐車場に着いた時、友恵を後ろに乗せて来た武山が言った。

「うるさいなあ、もう」

友恵ははしゃぐように彼の背中を叩くと、アスファルトに足を着いた。

「館内はラクでいいよな」

尚美の細い脚を見つめて言う。

友恵は「まだ言うか」と言って、再び武山の背中を叩いた。

尚美が降りると、圭吾は自転車を隅に寄せる。

海風は思いの外熱くて、四人の髪を揺らした。

カラフルな落書きでいっぱい防波堤を越えると、奥行きのない砂浜が細長く横に続いている。

片方は港の岸壁につながり、もう一方は縦にせり出した堤防に遮られる。

くの字にせり出した堤防は、湾を囲むようにくの字に曲がってい

て先端には小さな灯台らしきものが建っている。

「なあ、館内は何時から織堂と親しいの？」

友恵と尚美がカモメの群れに近寄って行ったのを見て、武山が圭吾に耳打ちする。

友恵に持つように言われたジュースの入ったコンビニ袋を片手にぶらつかせている。

「さあ……何時からだっけな」

圭吾ははぐらかすように遠くを見つめる。

波の音が風を叩くように響いていた。

「館内は手話でkindる？ いいよな、そういうのって」

武山の言葉に、圭吾が振り返る。

「いいもんか。手話を使わないで済むヤツに、そんな事言われたいねえよ」

圭吾はぎつと鋭い視線を武山に向けると、直ぐに遠くの水平線を見つめる。

「そ、そういうつもりじゃないんだけど……」

武山は頭をボリボリとかいて

「織堂と自由に話せる館内がさ、すげえなつて。そう思ったんだよ」  
鳥の羽ばたく音が聞こえてふたりが振り返ると、尚美と友恵に追われる様に飛び立ったカモメの群れが堤防の先へ飛んで行った。

尚美にはそれらの音全てがただのノイズにしか聞こえない。

波のノイズに交えるカモメの鳴き声は、虚空に響く不思議な小波だ。

森の中で聴く小鳥のさえずりとは違って、何か機械音のノイズに似ていた。

尚美は遠くの防波堤に再び着地したカモメの群れを見つめる。

テトラポットにぶつかる波が、白い飛沫を登らせて汐風に滲んで消えた。

「ねえ、あの防波堤の先でお昼食べよう」

友恵が言った。

「あそこ行けんの？」

武山が防波堤を眺めた。

「だって、釣りの人いるじゃん」

友恵が指差した先には、確かに釣り人が小さく見える。防波堤のふもとを辿ると、左手の大分先の砂浜からそれは伸びていた。

大きな石がゴロゴロと防波堤の根元を囲んでいる。その先に伸びる堤防沿いに、テトラポットが海へ向って積み上げられている。

「あれじゃ、船とか着けないよね」

友恵が首を傾げる。

「防波堤は船着場とは違うよ」

圭吾が言った「余計な波を遮って、湾を作ってるんだぜ」

「ああ、なるほど」

友恵が納得した傍らで、思わず尚美も頷いていた。

最初の直線部分は幅が5メートルほどあって、横たえたビルのように長く続いていた。

コンクリートの地面を良く見ると、あちらこちらに釣り糸のついた小さな錘や浮きが転がっている。

カラカラに乾いた小さな魚の残骸は、何時の物なのか判らない。

くの字に曲がっている部分から先は、幅が3メートルほどに狭まって、湾の内側に向って伸びていた。

「せまっ」

友恵は少し段差のある3メートルの堤防に脚を乗せて、横に連なるテトラポットを見下ろした。

「なんか、落ちたら上がって来れないね」

積みあがったテトラポットは複雑に重なり合って、深い空洞を内

側に秘めていた。

しかし、その先のテトラポットの上には、ひとりの釣り人が立っている。

「あつ、人が立ってるよ。大丈夫なのかな？」

「大丈夫だろ。けっこう足場はあるよ」

友恵の問い掛けに武山は応えて、片手に持ったコンビニ袋をぶらつかせながら自分の片脚をテトラポットに乗せた。

「危ないから止めなつて」

友恵が武山の腕を掴む。

尚美と圭吾は一步下がった位置で、ふたりを眺めていた。

強くは無い汐風が、海面を這うように通り過ぎてゆく。

テトラポットは何重にも並べられている為、波がぶつかって潮が飛び跳ねても防波堤までは届かなかった。

積み上げられた奥の空洞で、海水は黒く跳ね返りゴーゴーと音を立てた。



### 【53】潮騒

湾の外に、岩が積みあがったような小さな島があった。

尚美たち4人が防波堤の先まで来た為か、カモメたちはみんなその岩の島に移って群がっている。

4人は防波堤の先まで辿り着くと、灯台の傍らに腰を下ろした。遠くで見た時には小さく見えた灯台も、間近で見ると意外と大きくて、二階建てほどの高さはある。

尚美は堤防の淵に脚を下ろしてぶらつかせながら、テトラポットの隙間を覗き込む。

頭のちぎれたソフトビニールで出来た古い人形が、隙間に転がっているのが見えた。

何処からか流れ着いたのか、ここから誰かが投げ捨てたのか、何だか奇妙な出会いのようで、それから目が離せなかった。

この人形は、いったいどんな主にどのように出逢い、どんな景色を見ていたのだろう。

開いたままの少し青みがかった瞳が、尚美を人恋しそうに見つめている気がした。

「ナオ、お弁当持って来た？」

背中を突かれて振り返ると、友恵が言った。

尚美は頷いて、リュックの中から二人分のお弁当を取り出す。

友恵とふたりで、お互いふたり分のお弁当を持参する約束だったのだ。

彼女が敷いた小さなレジャーマットの上に、尚美は自分が持って来た弁当を広げた。

友恵はサンドウィッチ、尚美はおにぎりをベースに、それぞれおかずの入ったタップアをあける。

「うお、旨そうだ」

武山は友恵の出したコーラのプルタブを開けると、直ぐにおにぎりに手を伸ばす。

「ちよつと、最初はサンドウィッチでしょ」

友恵が彼の肩を叩く。

「えっ、なんで？」

「最初はあたしのを食べるのが礼儀じゃん」  
「そっちも食べるよ」

武山が尚美のおにぎりに齧りついた。

圭吾は遠慮気味におにぎりを掴むと、尚美の顔をチラリと見てから口に運ぶ。

尚美は気を利かせて友恵のサンドウィッチに手を伸ばした。

別に普通のサンドウィッチだ。

ツナと卵とハムが挟んであって、シャリシャリとレタスに歯ごたえを感じた。

圭吾が友恵のからげに手を伸ばし、武山が尚美の卵焼きを口に入れた時だった。

ザンツと波がテトラポットにぶつかった。

「あっ」と友恵が小さく叫ぶ。

「なんだよ」と口をモゴモゴさせながら武山が訊く。

「落ちたよ」

「ナニが？」

武山は友恵の視線を追って振り返る。

防波堤が「く」の字に曲がって直ぐの辺りの、テトラポットを見ている。

「釣りしてた人」

「マジ？」

「だってほら、いないよ」

「帰ったんだろ？」

「今さっきまでいたよ。後ろに消えたよ」

圭吾が立ち上がった「見てこようぜ」

「ああ」と武山も立ち上がって圭吾の後を追う。

「あたしも行く」友恵も立ち上がると、尚美も立ち上がった。

圭吾が走ると武山も走った。

尚美と友恵もパタパタと小走りて後を追う。

一瞬、圭吾の背中がやけに遠ざかって行くような気がして、尚美は焦燥に駆られた。

圭吾は釣り人が居たはずの辺りで足を止めると、テトラポットに脚を乗せる。

防波堤には釣り道具の入ったボックスが取り残されて、テトラポットの上にも釣竿が横たわっている。

圭吾はテトラの上をピョンピョンと渡り歩く。

「圭吾っ」

尚美は何故か彼を呼んだ。

何故だか解らない　彼がこれから何をするか予測がついたわけではなかった。

ただ、さっきまでの焦燥が加速して、押し出されるように声に出たのだ。

「待てっ」

武山が叫んだ。

圭吾はテトラポットの向こう側に向って、身体を投げ入れた。

「ちよっと！」友恵が声を上げて足を止めた。

防波堤の上からでは、向こう側の水面は見えない。

うねった波が音を立てて、白い飛沫だけが空中に舞って風に流れた。

## 【54】静寂と靴音

8月にの初めには登校日がある。

夏休み中の生徒が何事も無く無事に過ごしているかの確認の意味があるらしい。

長期の休みになると髪を染めたりピアスをあけたりする生徒もいるから、そういった校則違反のチェックの目的もあるのだろう。

朝礼では館内圭吾の名前が静かに呼ばれた。

続いて武山。

ふたりは溺れかけた釣り人の老人を助けた事で、表彰された。

と言つても、小さな賞状と鉛筆1ダースを貰っただけで、武山はとりわけ「現金で誠意を見せろ」とばやいていた。

海へ飛び込んだ圭吾は、老人を掴んでテトラポットをよじ登ろうとした。

武山はギリギリまでテトラ伝いに降りて、引き上げようとしたがなかなか旨く行かなかった。

そのうちに海岸にいた数人が気付いて防波堤を走って来た。

無事に釣り人の老人は救出され、圭吾も引き上げられた。

ずぶ濡れの彼に、尚美はしがみ付いた。

失うかと思った。彼が消えてしまうかと思った。

その思いが溢れて、彼女の瞳を濡らした。

圭吾はヤッパリ少しぶつきら棒に尚美の肩に手を当てると

「俺、泳ぎには自信あるからさ」

朝礼で表彰を受けた圭吾と武山だったが、放課後は尚美と友恵と共に職員室へ呼ばれた。

必然的に中学生だけで海に行ったこともばれて、4人は生徒指導と担任の二人に説教を受けた。

しかも、圭吾にいたっては人助けの為とはいえ、服を着たまま海に飛び込んだ事は褒められた行為では無い。二次災害に発展した可能性がある。とまで言われた。

尚美は初めて教師に対し理不尽さを感じ、少しだけふくれっ面を消す事ができなかった。

職員室を出ると、武山は部活のバスケットに直行し、友恵はその練習を見学に行った。

尚美はふたりに手を振ると、圭吾と昇降口へ向う。

途中の正面玄関は来客と職員用のもので、生徒が利用する事はめったに無かった。

南向きの正面玄関の大窓から強い陽射しが注がれて、廊下のタイルが艶やかに白く波打つ。

そこに黒い影が二つ見えて、通り過ぎるはずの場所で尚美も圭吾も脚を止めた。

「あたし、転校決まったからさ」

陽射しがコントラストを強くして、陰になる彼女の唇は少し読み難かった。

少し高い通る声は、圭吾の耳にだけ聴こえた。

「身体、大丈夫、なの？」

尚美は目の前に佇む真穂に向って言った。

夜気のように静寂した廊下に、途切れた声が響く。

真穂は六月の中旬、尚美の前で倒れた日から学校を休んでいた。病院へ入って、クスリ漬の身体を治療しているという噂は聞いていた。

真穂の身体は相変わらず折れそうに細かったが、頬は少しふっくらとして健康そうな白色に陽射しを受けていた。

真穂は小さく頷くと「まあね」

圭吾と尚美の姿を交互に見つめた。

彼女の視線が圭吾に注がれると、何故か尚美は気恥ずかしさに駆られる。

真夏の陽光は、外に立つ母親を白く浮き上がらせていた。

尚美の視線が彼女を捕らえると、真穂の母親は小さな会釈をくれた。

尚美も慌てて頭を下げる。

真穂はチラリと後ろを見て、再び尚美を見た。

以前の凜々しい視線だ。その虹彩の中に、闇は見えなかった。

「じゃあ、元気でね……ナオ」

真穂はそう言ってクルリと踵を返すと、先に玄関を出ていた母親の元へ去って行った。

長い黒髪が風にそよいで揺れるのを、尚美は圭吾と並んで見送った。

「あいつ、顔色よくなってたな」

「うん……」

圭吾は、どうして彼女が転校するのか、入院していたのは本当だったのか。なんて質問はしなかった。

ただ彼女の、以前よりはずっと少女らしい笑みを見ていた。

尚美も転校の理由は訊かなかった。

1年の時だつて親しかつた訳ではない。むしろ皮肉を含んだ言葉を何度も浴びせられ困惑の根源となっていた。

それでも何となく、何故だか解らないけれど寂しさが心の真ん中を過った。

彼女の冷たい涙を思い出して、あんな涙はもう流して欲しくないと思った。

溢れる光の中にふたりの姿が消えるのを確認してから、尚美と圭吾は再び歩き出した。

尚美は歩き出して直ぐに、圭吾の腕を突く。

『ねえ、チヨビに逢いたいな』

『夏はヒイヒイしてるぞ』

『なんで?』

『ライオンラビットは暑さに弱いのだ』

『でも、ウサギってヒイヒイ言うの?』

『例えだよ……』

ふたりの音の無い会話が、靴音だけの廊下を満たしていた。

【55】陽だまりの娘（前書き）

実は、今回より実質上の【第三章】に入ります。  
そして、これが最終章です。



## 【55】陽だまりの娘

僕が彼女に出逢ったのは高校3年の初夏、夏雲が青空にせり出す頃だった。

僕は高3の春から、河沿いから国道へ出る角に在って地元ではちよつと有名な進学塾に通っていた。

何度か塾の入り口で会い、何度目かに思わず首だけの会釈を送ったら彼女も小さくはにかんで会釈を返してくれた。

ただそれだけなのに、何故か僕は心の隅に小さな火種を感じたのだ。

それは真冬の暖炉の前で感じるような、あるいは春の肌寒い中で見つけた陽だまりのような穂のかで優しい温かみだったと思う。

「お前、紫里ちゃんに手話教えてくれるよう頼んでくれよ」

僕は教室の隅で、友人の哲しあやに声をかけた。

彼女が春先から付き合っているカノジョは好聖館学園高校の生徒で、確か手話が出来ると聞いていた。

「できねえ」

「お前ら付き合ってたんだろ？」

「付き合ってたねえよ」

「別れたのか？」

「違う。初めか付き合ってたねえんだよ」

哲は自嘲するように強い口調で言つと、悔しそうに笑う。

「どういう事だよ」

「どうでもいいさ。俺たちは付き合っていない。ただ、それだけさ」

彼は自分の話しを避けるように

「ていうか、何で手話なんだよ」

「実はゼミで仲良くなった娘がちょっとな」

僕は鼻の頭を指でかいた。

仲良くなつて　それはウソだ。

まだ会話を交わしたことも無い。

それ以前に、彼女とどうやって会話を交わせばいいのか困惑している最中だった。

初めて彼女に気付いたのは1ヶ月も前の事で、かなり控えめに振舞う姿が逆に僕の目を惹いた。

清楚な黒髪のお下げと衿にノリの効いたブラウスは、いかにも好聖館の生徒らしい身なりだった。

彼女は、まるでウサギか何か小動物のように周囲から目立たぬよう、あえて存在を消しているようにも見えた。

以前付き合っていた娘はやたらと今時で派手な娘だった。

一緒にいて楽しいし、何時も華やくだような喧騒に満ちていたが、その娘の遊び癖は留まりを知らず、他の男まで手を伸ばしていた。

そんな彼女に見切りをつけたのは、まだ桜が咲き始めたばかりの頃だったが、とにかく僕は、お下げの控えめな彼女が気になって仕方がなかった。

そんな時、同じ学校の娘たちと僅かに会話をしているのを見たんだ。

いや、あれは会話と呼べるのだろうか？

常に聞き耳を立てる僕に、彼女の声は何時まで経っても認識できなかった。

彼女達は微かなジェスチャーで何かを伝え合っていた。

お下げの娘は相手の話を聞く時、懸命に顔の一部に視線を固定する。

相手の唇を一心に見つめるのだ。

その仕草で僕は気付いた　彼女は耳が聞こえないのだと。

明らかに彼女は話しを聞くのではなく、読み取っている。  
友人が行ったジェスチャーは、僅かな手話ではないのだろうか。  
声を聞いたことが無いのは、きっとそれが要因なのだ。

「なんだよ、ちよつとつて？」

哲は怪訝そうに訊き返す。

「ちよつとはちよつとさ」

「幸彦は氣が多いからな」彼はそう言つて皮肉めいた笑いを浮かべる。

僕はそれ以上何も言わなかった。

今の哲は、こういう相談には向いていない状況らしい。

彼女は耳が不自由だ　どれほど聴こえるのか判らない。

人伝にやつと得た情報では、微かな音以外は聴こえないという。

そもそもそんな娘と会話なんて交わせるのだろうか……？

コミュニケーションをとる事ができるか？

行き着いたのは、手話だった。

彼女が同じ学校の娘と僅かに手話を交えて、コミュニケーションをとっているのを見た。

自分もそれを覚えて、さり気なく話しかけよう。そう思つて友人の伝を頼つただけけれど、彼は彼で何か複雑な事情が在るようだ。

「俺、ちよつと腹減つた。幸彦も行くか？」

哲はそう言つて売店へ行こうと僕を誘う。

「いや、俺はいいよ」

僕は教室を出てゆく哲の背中を見つめた後、財布を取り出して中身を確認した。

僕は何時モ、塾の手前で時間を見計らい入り口へ向う。

彼女が来る時間に、自分も入り口へ向う為だ。

同学年の進学コース　好聖館高校のお下げの娘。しかし彼

女は、聴覚に障害を持っている。

どうやって声をかけようか、僕はそればかり考えていた。

夏休みには大学受験の為の夏期講習がある。

普段、塾は火曜日と金曜日の週に2回。

臨時の模擬試験がある場合もあるが、それさえも僕は時折サボっていた。

しかし、ここ一月は一度もサボってはいない。

全ては彼女の姿を見るため。

未だに声は掛けられないけれど、その姿をひと目見るだけで熱い太陽に照らされたように心は躍る。

入り口で顔を合わせると彼女は、遠慮気味でいささか曖昧だけれど、必ず小さな会釈と笑顔をくれる。

それだけでも胸の奥から暖かな何かが湧き出るのだ。

それは日を追うごとに、彼女と会うたびに大きさを増して僕の心の中を満たしてゆく。

それまで何処か空虚でいい加減に過ごしていた日常が、その笑顔ひとつで充実してゆくのが解る。

クラスが違うから、行きと帰りと僅かな休憩時間にしか目に留める事は出来ないのに、その僅かな時間が僕の全てのような気がした。夏期講習は5日間連日で行われる。それは5日間、彼女の姿を見る事ができるという事だ。

何処かでコミュニケーションのキツカケを掴んで、心を打ち溶け合おう　そんな目論見は、哲に頼れなくなつた事で見事に瓦解したかに思えた。

それでもやっぱり彼女に近づきたい。

彼女は僕にとって、陽だまりの娘なのだ……。

なんとか自力で手話を覚えられんだろうか？

僕は彼女に少しでも近づきたくて、学校の帰り道、独り大型書店へと足を運んだ。

【55】陽だまりの娘（後書き）

お読み頂き有難う御座います。

混乱しないで下さい（＾＾；

ちゃんと軸は合っています…。

どうか最後まで、宜しくお願いいたします。

## 【56】閉じた視線

入道雲が虚空に立ち登り、陽光に照らされた飛行機雲が光の一直線を描く。

夏休みに入ると直ぐに、夏期講習の第一期が始まった。

直前に知ったのだが、夏休み中の夏期講習は7月の後半に一期、8月の前半に第二期があるのだそうだ。

お盆まで、僕らは雁字搦めがんじがらめになるという事だ。

以前の僕なら、速攻で現実逃避に走り、友人たちと遊び歩いてかもしれない。

しかし今は逆にそんな暇は無い。

7月に入って直ぐに期末考査があり、それが終わってから学校は試験休みに入った。

僕は書店で購入した手話の本を片手に机に向い、時には公園をぶらついたりした。

覚えてたての言葉を使ってみたくて地元をうろついても、實際耳の聞こえない人がそういるわけでもない。

公園の片隅にリードで繋がれた柴犬に近づいた僕は、左手を握り締め親指を上に向けた。

そしてその左手の甲を右手で二回叩く。

コレは困ったときに協力を頼む手話の前半部分だ。

続きがあるけれど、僕はそこで手を止めた。

犬に協力を頼んでも仕方ない……。

柴犬はペロペロと下を出し、振り返ると、おじいさんが困惑の眼差しで柴犬と僕を見ていた。

夏風が髪をすくい上げるように吹いていた。

終業式の帰り道、友人の智明と買物へ出かけた。

昔は駅前通りの洋服屋が僕らの先輩たちの行きつけだったそうだ

が、新しい大通りが反対側へ延びて大型ショップが軒を並べると、至極当然に僕らの行動半径はそちら側へずれ込んだ。

中学の時にできたジャスコはいつも人に溢れ、駅前商店街は滅多に寄り付かない場所となった。

久々に駅前通へ行こうという事になって来てみたが、以前にも増して閉まり切ったシャッターは増えたように感じる。

町おこしと題して閉まりきったシャッターにヘンテコなアニメキヤラクターが描かれたけれど、寂れた通りがやけに滑稽に見える。

しかし何故か最近アジア雑貨の店が新しく出来たそうで、智明に引っ張られてそこへ向った。

アジア雑貨の店内は狭く、商品がひしめき合って異国ともいえる香気に満ちていた。

店内には僕らしいなくて、奥の小さなレジカウンターに異国の衣装を纏った不思議情緒な女性が独り座っている。

「俺いま、お香に凝っててさ」

智明は目の前のカゴに山積になった固形物を掴む。

「へえ……」

僕は目の前に在る、サイババの意味不なバッチを眺めながら頷いた。

床に置かれた大きなゾウの置物に足をつつかえて、思わずよろける。

店内は蛍光灯ではなく赤色球を使っている為、全体が茜色に染まり隅々は見え難かった。

不意に入り口のドアが開いた。

振り返った僕は、天井からじゃらじゃらと釣り下がった木製の首飾りの隙間から来客の姿を見る。

水色のブラウスの胸元で、モスグリーンのリボンが揺れている。

視線を上げると、胸の奥がぎゅっと引っ張られる感じがして息を飲んだ。



彼女だ……。

塾で小さな会釈を交わすだけの彼女。

驚いた事に、彼女は金髪的女性と一緒にいる。

同じ制服を着ている所を見ると、金髪の彼女も好聖館学園高校の生徒なのだろう。

金髪と言っても、カラーリングやブリーチではない。

完全な白色人種である少女の頬は、葛餅のように澄み切った乳白色だ。

異国の少女は、聴覚の不自由な彼女と親しげに笑みを交わしている。

僕はふたりの異端な少女を、木製の首飾りが揺れる隙間から見入ってしまった。

不意に目があってニツコリと笑みをくれたのは金髪の娘だった。

蒼い瞳が窓際の陽射しに僅かな輝きを見せる。

僕は思わず苦笑しながら、傍らの商品棚に身を隠す。

「コンチワ」

奇妙なイントネーションで声を掛けられた。

腕飾りが山ほど釣り下がったリング状の什器の陰から、金髪の彼女は顔を覗かせる。

「こ、こんにちは」思わず僕は声を発していた。

「白鳳工業高校？」  
はくほう

「えっ？」

市内で未だに黒い詰め襟の学ランはウチの高校だけで、夏服に白い開襟シャツが許されているのもしかり。

金髪を揺らす彼女は、蒼い瞳をチラチラと動かして僕を見つめる。

「あたし、ルーシーだお」

「だお？」

彼女は自分の名を名乗ると、振り返って

「ナオ、この人に聞いてみれば？」

まったく悠長な日本語を話す。

にしても、語尾の「だお」ってなんだ？

腕を引つ張られて顔を出したお下げの彼女は、僕をチラリと見ると小さく会釈をして後ろに引つ込んで行った。

「ナオ、どうしただお」

僕は「ナオ」と呼ばれる彼女に、近づこうと思った。

何かコミュニケーションを取るチャンスかもしれない。

耳の先が熱くなるのを感じた。

彼女は紛れも無く、塾で笑顔の会釈だけを交わす、お下げのあの娘なのだ。

「幸彦、行こうぜ」

買い物を終えた智明が僕を出口で呼んでいた。

僕は流されるように「ああ」と返事をして、結局彼女達から離れる方向へ足を運ぶ。

店のドアを出る瞬間振り返ると、バニラのお香を手にした彼女が確かに僕に視線を向けていた。

せっかく声を掛けられるチャンスだったかもしれないのに、その時僕は何も出来ず、ただそのまま閉じるドアを見つめるだけだった。

## 【57】エルモ

僕の家は俗に言う母子家庭だ。

父親は僕が小学校に入学した頃他界したそうだが、記憶は僅かだ。寂れた卓球場で嫌々ながらにピンポン球を突いた記憶が微かにあるけれど、その他に父母と団欒した記憶は無い。

中学生の頃には少しツツパツて虚勢を張る真似事なんて事もしたけれど、高校に入ると次第にバカらしくなった。

工業高校ではもつと本格的高派な連中がいるから、僕みたいに中途半端なレベルは、ごく普通の一般生徒に押しやられるのがオチだと気付いたから。

喧嘩やカツアゲ、万引きで日々を送る歪みきつた高派の仲間にはなりたくは無いのが本音だ。

十六歳になってすぐ原付免許を取ると、行動範囲はずいぶん広がった。

放課後ぶらりと海へ行ったり、少し遠くのDVDレンタル店へ出向いたり。

結局手話の本も、隣町の本屋へ行って購入した。

手話の本なんて妙に福祉的で、顔見知りにでも見られたら、なんだか恥ずかしい気がしたから。

自転車で行けば20分はかかる塾までだって、スクーターなら5分で行ける。

ただ、仲のいい哲や智明はバイクに興味が無く免許すら取るうとしないので、彼らと行動を共にする時は僕も自転車を使う。

手話の本をベッドに放り投げて、僕はそのまま横になった。

「ナオ」と呼ばれた彼女の名はきつと、ナオコ、ナオミ……あと

は浮かばない。

そう言えば塾の連中も彼女を「ナオ」と呼んでいたかもしれない。声を出して彼女を呼ぶ光景すらほとんど見た事が無いので、記憶が薄らいでいた。

僕は明日から始まる夏期講習のテキストも開かずに、手話の本ばかり眺めている。

周囲の女子と同様、僕の言葉はきっと彼女に通じるだろう。

しかし、彼女の言葉が、意思が読み取れなければどうしようもない。会話が成り立たない。

手話を覚える事は、僕が話す事よりも彼女の意思、言葉を読み取る事に繋がるのだ。

一步通行ではコミュニケーションとは言えない。

時計を見るともう直ぐ午前零時になる。

僕は仕方なく夏期講習用のテキストを取り出して、ベッドに寝転がったままただページを捲って文字列を眺めた。

部屋の蛍光灯がやけに眩しく感じて、瞼を閉じるとそのまま朝まで起きる事はなかったけれど……。

夏雲は白く果てしない空間にもくもくと聳え立つ摩天楼のようだ。あの雲の中はどうなっているのか、ふと虚空を見上げる事がある。今日から夏季講習が始まった。

普段とは違い、朝の9時から始まる塾に彼女がどのタイミングで来るのか解らなかった。

少し早めに行ったつもりだったが、あの娘は既に来ていたように入り口で逢う事はできなかった。

そこからはもう、タイミングをつかめなくて結局視線を合わせる事は出来なかったから、当然のように声なんてかけられない。

塾は雑居ビルの3階にあって教室は四つある。

休憩室も在って、休憩中に紙パックのジュースを買いに来た彼女

を偶然見かけたけれど、周囲に人がいる中で声をかける事はどうしてもできなかった。

普通の娘なら出来ると思う。

僕は意外と気さくだし、見知らぬ他人に声をかけることにさして抵抗はない。

でも彼女は違う。

後ろから肩を叩けばいいのか、それとも正面から近づいた方がいいのか……振り返った彼女に最初に手で合図する言葉は直ぐに出てくるだろうか……。

何時もとは違う逡巡した気持ちが身体を多い尽くして、僕は純真な中学生のように固まってしまった。

結局初日に声をかける事は出来ないまま、原付バイクに跨って塾を後にした。

塾で親しい康介に「これから何処か遊びに行かないか」と誘われたけれど、何だか気が乗らずに僕は一人で国道を走りだす。

まっすぐ家に帰る気にもなれず、隣街にある玩具ザラスへ向った。大きなオモチャ箱のような店内を特に当ても無くぶらつく。

真っ青なもじやもじやのぬいぐるみに目を留めると、それがセサミストリートに出てくるクッキーモンスターだという事を思い出した。

小学生の夏休み、言葉も解らないままよく観たものだ。

当時英語なんてハローとサンキューくらいしか解らなかったのに、とにかく面白かった。

真っ赤なエルモの小さな人形を手取る。

芯の入っていない手足がぶらりと手から零れ落ちて垂れ下がる。

商品棚の最上段には天井に着く特大のエルモが、満面の笑顔で僕を見下ろしていた。

言葉は解らないのに彼らの楽しさは純分過ぎるほど伝わって、唯一家で見る教育テレビ番組がセサミストリートだった。

言葉が伝わらなくても、それが不完全だとしても気持ちや想いは伝わるのだろうか。

ふと横を見ると、女の子がクッキーモンスターの腕を掴んで笑みを浮かべていた。

中学生かそのくらいの年格好だが、高校生かもしれない。

肩につく黒髪と細い首、白い頬と華奢な出で立ちは何処かあの娘に似ている。

僕はエルモを掴んだまま、思わず傍らの少女を見ていた。

棚の裏側で人の気配を感じて、ふと我に帰る。

おそらく従業員がデカ脚立に乗って、棚の上段の商品整理をしているのだろう。

ガタリと大きな音がした時、一瞬何が起きたのか解らなかった。

天井から吊り下げられた巨大なエルモが僕に、いや隣の少女に向かって降って来たのを認識するのに数秒の時間がかかった気がする。

でもそれはほんの、コンマ数秒だったのだろう。僕は隣にいる少女を反射的にかばって、エルモの直撃を受けた。

「大丈夫か？」

聞きなれない声に目を開ける。

リノリウムのタイルが、ぼやけて目の前を塞いでいた。

僕の背中に押し掛かった重みが、フツと軽くなる。

「すみません。申し訳御座いません。お怪我はありませんか？」

従業員の女性が駆け寄って来て、僕の肩に手を触れた。

あの娘は？

僕は顔を上げて、何事も無く佇む少女を見上げる。

ゆがんだ眉で、心配そうに僕を見下ろしている。

「妹を助けてくれて、ありがとう」

最初に僕に声をかけた声だ。

彼は少女と僕との間に屈んで、頭をかいた。

茶色い髪の毛がくしゃくしゃと揺れる。

「救護室で手当てを……」

従業員の女性が僕を促す。

「大丈夫、ビックリしたけど何でもないよ」

僕は上半身を起こして床に手を着くと、通路に転がった170センチはあるエルモに視線を移して肩をすくめた。

苦笑と溜息が零れる。

「さすがに重いね」

【58】兄妹（前書き）

だいぶ日数が開いてしまい、申し訳御座いません。

書いたものを推敲して修正しないと、どうしてもUPする勇気がでないのです。

一時的に、少しスローペースですが、宜しくお願いいたします。



## 【58】兄妹

「サンキュウな」

彼はトイレからスの出口で再び僕に言った。

「あ、ああ。咄嗟の事だったから、別にいいよ」

僕は救護室へは行かずに、少女とその兄と一緒に店を出た。

黒縁のメガネをかけた店長と売り場にいた女性店員が何度も頭を下げたけれど、怪我はないし足止めを喰うのもなんだか嫌だった。手に握られたエルモの人形は、お詫びのつもりなのかタダで貰った。

僕は店を出た所でその人形を妹の方に差し出す。

彼女は笑みを浮かべ、細く澄んだ瞳で僕を見上げた。

茶髪の兄が、彼女の肩を軽く叩いて振り向かせると、両手で何かを伝えた。

妹は僕に向き直り

「あ・り・が・と」

ぎこちなくて、途切れた抑揚の声……節々が潰れたような発音。それが何を意味しているのか、僕は直ぐに解った。切なくて、でも優しい気持ちになる。

「わるいな、これでも精一杯なんだ」

兄が彼女の後ろから言う。

「いや……どういたしまして」

僕の声はきつと聴こえない。

彼女には聴こえないだろう。

僕たちの横を、小さな娘を連れた親子が通り過ぎてゆく。

彼と少しだけ話をした。

聴覚に障害を持つ妹も一緒に。

ちょうど僕と同一年の彼自身は東京に住んでおり、妹に逢うため少しの間この町へ来ているらしい。

あか抜けた表情で笑う彼の名前を、僕は訊いておくべきだったんだ。

「手話、上手いんだな」

「妹とのコミュニケーションだから」

僕たちは外に設置された蒼いベンチへ腰を下ろして、缶ジュースを飲む。

「実は俺、手話を勉強してるんだ」

どうして彼にそんな事を言ったのだろう。

きつと僕の気持ちの欠片ひとつ、彼には解ってもらえるような気がしたのかもしれない。

遠くの雲をぬう様に西日が降り注いで、彼の茶色の髪を鮮やかに照らし出す。

「そう……上手くなった？」

「まだ使った事なくてさ」

彼は、曇天そらを見上げて缶ジュースを口に着ける妹の肩をそっと叩く。

「話しかけてみなよ」

実験台のようで申し訳ない。

「助けてもらったお礼さ」

彼は妹に小さな手話で伝える『彼が、話してみたいって』

妹は小さく何度も頷いて、僕に視線を向けた。

ひと懐っこい、丸々としたキレイな瞳だ。

その瞳はキラキラと好奇に満ちて輝いている。それとも西日のせいだろうか。

僕は両手をそっと動かした。

『名前は？』

『ミカ』

『いくつ？』

『もう直ぐ、15』

僕と妹の会話に、彼はクスクスと声を立てる。

「なんだよ」

「だって、片言すぎねえ？　まるで中学で習う英語の教科書のような会話だよ」

「仕方ないだろ。初心者だ」

彼は頭をクシャクシャとかき上げて

「わりい、そうだな」

切れ長の一重の目は、笑うと人懐っこく緩い弧を描く。

「でも、ちゃんと伝わるだろ？」

「ああ、意外と伝わるな」

「耳の聴こえない連中は、相手から他の何かも一緒に感じ取って会話をするんだ」

彼は妹と僕を交互に見る。

「何かって？」僕は、『何か』が知りたかった。

「それは俺にもわかんねえ」

再び彼は目を細めた。

西陽が彼の瞳の中ではじける。

「じゃあ」と別れる間際、彼は少しだけ躊躇して僕を呼び止めた。

「隣町から来たって言ったよね」

「ああ」

僕は返そうとした踵を戻す。

「もし……」

彼は言葉を飲み込む。

「もし？」

「もしも、耳の聴こえない娘で……」

彼は再び髪の毛をクシャクシャとかきむしる。

「いや……やっぱいいや。なんでもない」

吐き出しかけた言葉を、彼はバラバラに崩す。

それでも何かを僕に伝たがっていた。

「何？　なんだよ」

「いや……以前親しかった娘が、隣の町に住んでるかも」

「耳が不自由なのか？」

「ああ……でも、強い娘なんだ」

「名前は？　なんて娘？」

「うん……やっぱいい」

彼はやけに吹っ切れた表情で言った。

何処かで暮らすその娘を、彼は探しているのだろうか　いや、  
きつと心のどこかでずっと見守っているんだ。

「そう……じゃあ」

深く追求する気はなかった。

いくらなんでも、その人に出会う確立が低すぎる。

僕は再び踵を返して、バイクのカギをポケットから抜き出した。

「なあ」

後ろから彼が呼んだ。

「優しい声は、届くらしいぜ」

意味深に微笑んだ彼は、妹を促して国道の歩道へ向って歩き出した。

## 【59】バスケット

夏は瞬く間に通り過ぎようとしていた。

陽射しはまだ夏の残像を残し、<sup>そら</sup>夏天は少しずつ高くなって夜風が冷たくなる。

突然の事だった。

圭吾にとってそれは、何時も突然にやってくる。

ただ今回に限っては、あまりに長い時間の同じ生活が、彼の気持ちを油断させていた。

こころの準備を失って、すっかり安堵の枠の中にハマろうとしていた。

夕飯時、珍しく親子三人揃って食卓を囲んだ。

「来月から横浜だ」

父親は昔と変わりなく、何でも無い事のようにごく当たり前に言う。

「転勤？」

圭吾は思わず聞き返す。

口に含んでいた物を、小さくゴクリと飲み込んだ。

父親は味噌汁の椀を口に着けたまま頷いた。

母親は知っていたのだろう。

何処かきこちなく笑顔を振舞っていた。

「せっかくお友達が出来たのにねえ」

やり場の無い視線を、圭吾に注ぐ。

父親はサラダのミニトマトを箸でつまむ「そのうち落ち着くさ」最近耳にしなかった彼の言葉だった。

「そのうち落ち着く」……圭吾はこれまで何度聞いたことだろう。

この1年半の間は聞いていない。

それ以前に聞いたその言葉は、何時の間にかどうでもよくなっていた。

しかし……今夜はその言葉を久しぶりに恨めしく思った。  
心の何処かに再び風穴が開いたような寒さが沸き起こる。  
まだ転校先で親友と呼べそうな誰かを見つけていた頃の、虚しく  
切ない気持ち。

いいさ……判っていたことだ。

自分に言い聞かせた。

早々と食事を終えると、圭吾は自室へ向った。  
ベッドへ身体を投げ出して目を閉じる。

上級生に囲まれて殴られた時の雨音が蘇える。その日々さえも切  
なくて懐かしく沸き沁みる。

いや、その雨音に滲むのは彼女の笑顔だ。

雫に打たれる彼女の黒髪が、瞼の奥で蘇えった。  
庭の草むらで、しきりに鈴虫が鳴いている。

「なんで？」

尚美は咄嗟に声に出した。

トーンが裏返って、抑揚がおかしかった。

学校の帰り道、橋を渡って圭吾の家により道した尚美は、チヨビ  
を抱かかえたまま硬直した。

「何でって……親父の転勤だから……」

圭吾は週末の予定でも話すように、転校の事を軽く話した。そこ  
に別れの予兆は含んでいない。

尚美は瞳を凝らして、彼の眼差しの奥を見つめる。  
視界に入った彼の唇を、無意識で読む。

彼女はチヨビを両腕から解放して

『だって、横浜なんて遠いよ』

「ああ……そうだな」

彼は目を細めると「でも、新幹線で2時間だよ」

解っている 二度と逢う事はなくなる事を。

中学生の出会いと別れなんて、人生の長い道のりで言えばほんの些細な事なのだ。

でも、それを口にする事に何の意味があるのか。

同じ学校、同じ道のりを一緒に歩む生活が失われる。今はそれだけが重要なのだ。

尚美は黙って旻天<sup>そび</sup>を見つめた。

顎が上を向いて、襟元から伸びる細い首が艶かしい。

彼女の首筋から華奢な肩を、圭吾は見つめる。

尚美は少しの間虚空を見つめて

『そうだね』

笑って圭吾に向き直る。

「チヨビはおいて行くよ。ナオに預ける」

圭吾は芝生にペタリとあぐらをかいて座ると、チヨビを抱えて

「コイツ、乗り物に弱くて、かわいそうだから」

尚美はコクリと頷いた。

放課後の陽射しは、芝生の緑とふたりの白いシャツを淡く照らしていた。

夕方、尚美は小さなバスケットを抱えて帰宅した。

麦藁で出来た四角い箱は、時折小さくカタカタと揺れた。

玄関を上がってそと階段を上がるうとした所で、母親が声をかける。

「ナオ、お帰り」音の方向で彼女は振り返った。

抱えたバスケットに、母の視線が延びる。

「何それ？」

「な、なんでも、ない、けど」

母親は階段の一段目に足をかけた尚美に歩み寄ると、彼女が抱えたバスケットを覗き込んだ。

「何が入ってるの？」

四角い箱は、微かに揺れた。

もともと尚美は、親に秘密を作れる性分ではなかった。

バスケットのフタをそつと開ける。

中には毛がフサフサの小動物が、鼻をヒクヒクさせてつぶらな黒い瞳を揺らしていた。

「あら……これってウサギ？」

尚美は黙って頷く。

「どうしたの？ これ」

母親は咎めるつもりは無かった。

少し変わった姿のウサギを、静かに眺める。

「もらったの……」

「だれに？」

母親はゆっくりと手を伸ばして、ウサギの首に触れようとした。

「なんか、ライオンみたいなウサギね」

尚美はその場にしゃがみ込んで、バスケットを抱えたまま声をだして泣き出した。



## 【60】窓越し（前書き）

だいぶ時間が経ちましたが、お話は続きます（^^；  
少々多忙で、構成の編集に時間がかかってしまいました。  
今回は少し長くなってしまいました。

## 【60】窓越し

けつきよく僕は、7月の夏期講習で彼女に声をかけられなかった。近づくチャンスはあったかもしれない。

でも僕はどうしても、彼女の肩に手の届く距離には入れなかった。触れたら壊れてしまいそうな華奢な肩は、けが穢れを知らない真っ白なブラウスにいつも守られていた。

夏期講習の最終日、友達と控えめな挨拶を交わして彼女は塾の入ったビルの外へ出た。

僕はその後を追えずに、わざと少し時間を置いてから建物の外へ出る。

真昼の夏空が眩しくて目を細めた。

並木の向こうの民家の屋根を今にも呑み込むほど、入道雲が立ち昇っていた。

見上げると、トンビが宙を舞っているのが見えた。

茹だった風が頬を撫で上げ、焼けたアスファルトの匂いを運んできた。

翌日は図書館へ行った。

小さな丘の上にある市立図書館で、敷地は緑に囲まれ、建物はレング調の外壁がところどころ崩れている。

高校一年の時以来に来たそこは、以前とまったく代わり映えしない長閑な装いだった。

どうしてふと図書館などに来たのか、自分でもよく判らない。

夏期講習で強制的に学問を詰め込まれていたから、何か自分の意思で活字が読みたくなったのかもしれない。

それがタダで……という特権に惹かれたのだろうか。

しかし前に来て思ったが、この図書館はなかなか新しい書籍を借

りる事は出来ない。

在庫が少ないのか、借りた人間がなかなか返さないのか、在庫目録に載っていても本当は在庫自体が無いのか　それは定かではないけれど。

高い本棚の間を僕はグルグルと歩き続けた。

何が読みたいというのは無いけれど、古びた在庫が目につく。

ソファの置かれたロビーの隅に低い雑誌用のラックがある。

薄っぺらな雑誌や写真集が差し込み棚に面陳列されていた。

ふと目についたのは夕映えの高原が映った、まるでCDジャケットのような小さな冊子だった。

僕はそれに手を伸ばす。

『空』と大きく書かれたタイトルは、有名な風景写真家の写真集らしい。

ぱらぱらとページを捲ると、タイトル通り様々な『空』の顔がそこにはあった。

ひまわり越しの蒼旻<sup>あおぞら</sup>天を僕はしばらく眺めていた。

雲ひとつ無い北海道の空は、まるで南海のグレートバリアリーフのようだ。

石を投げ入れたら、呑み込んでしまいそうなほどの蒼<sup>あお</sup>。

窓から注ぐ陽射しが、僕の手元をじりじりと照らしていた。

向いの席で新聞を捲る老人の動作で、僕は写真集を閉じた。

ラックに本を戻そうとして手を伸ばすと、誰かの小さな手が滑り込んでくるのが見える。

白くて細くて、子供のものかと思うくらい小さな手だった。

見上げるとそこには、僕だけが見慣れた少女がいる。

夏の陽を浴びて、黒髪が艶やかに揺れていた。

「あっ」

その声は僕のものだったか、それとも彼女のものだったか……。

背中からせり上がる一瞬の緊張で、僕の記憶はいささか曖昧だ。彼女は僕が取り出した本の直ぐ下にあった、星空の本を手に取りうとしていた。

僕は慌てて本を手から離し、両手を空ける。

『こ、こ、こんにちは』両手が絡んで、あたふたした　通じるのか？

大きな窓からは充分すぎるほどの光が満ちて、彼女の頬を白く照らしている。

夏なのにどうしてこんなに白い頬なのだろうと思う。

授業で外に出たりすれば、自然に日焼けするのが学生の日常だ。瞳が細く弧を描いた。

『こんにちは』

見上げる僕に、彼女は伸ばした手をいちど胸元へ戻して、確かにそう返した。

細い雨が降り注いでいた。

秋の訪れを感じさせる果敢無さが、雨音に吸い込まれてゆく。

押し潰されそうなほど低い雲から、次々に冷たいそれは二人の遙か頭上を音も無く叩く。

新幹線のホームは予想以上に寒かった。

アクリルの天井が飴色に滲んで、今にも零れ落ちそうになっていた。

平日のせい、ビジネススーツの乗客がホームにバラついている。

『また、逢えるかな？』

尚美は困ったような笑顔で、手を動かす。

『解らない』

圭吾は社交辞令が嫌いだった。

解らない事を出来ると約束するのは嫌だった。

口先だけで何かを約束して結局成し遂げられなければ、父親と同じだと思ったから。

時間は静かに流れる。

朝の冷えた静けさは、清々しくもあり何処か空虚で荒涼でもある。

圭吾の耳だけに静かな雨音が響いていた。

沈黙の中に少ない言葉が飛び交う。

それは二人の名残惜しさの表れでもあった。

別れの時間が来なければいい。そんな想いは、ふたりに言葉を飲み込ませる。

冷たい空気が動いた。

チャイムのような音が聞こえて構内放送が流れる。

列車がホームへ入って来る知らせだ。

時間迫っていた。

ふたりの別れの時間が。

周囲の喧騒の気配に、尚美もそれを感じ取った。

小気味よく新幹線がホームへ滑り込んでくる。

聞き慣れないノイズが、構内に響いた。

圭吾の母親はひとつ離れた車両の前に立っていた。

尚美の横顔を、少ない人混みの間から遠く見つめ、ひとつ息をついて車両に乗り込む。

父親は仕事の都合で逸早く現地へ向っていた。

圭吾も目の前の乗降口のデッキに立つ。

ゆっくりと乗り込み、ゆっくりと振り返る。

目の前にいる彼女は、今にも泣き出しそうだ。

でも絶対に泣き出したりしない事は解っていた。

言葉が出なかった。

『またな』とも『じゃあな』とも言いたくなかった。

何時もと同じ言葉で締め括ろうとしても、喉の奥につかえて上手く出てこない。

直ぐに発車のメロディーが流れる。

しなやかな、何処か悲しいメロディーだった。

『行かないで』……。

「行かないで！」

尚美は声に出した。

声に出さずにはいられなかった。

乗降口で、圭吾は尚美を見つめた。小さく肩をすくめる。

『無理だよ……』

そんな事は尚美にだって解っている。

「俺たちはまだ子供だから、親について行くしかないんだ」

圭吾の少しだけ淋しげな眼差しは、大人のものだった。

少なくとも、尚美にはそう見えた。

一瞬の沈黙に、発車メロディーの音だけが構内を満たしてゆく。

「圭吾の声、好き」

「俺の声なんて判らないだろ」

「やさしい音で判るよ。圭吾の声は判るの」

「そう……」 そうかもしれない。

圭吾は肩に掛けていた大きなシオルダーバックを床に置くと

「また出逢うさ。お前を理解して、お前を解ってくれるヤツは絶対いるから。だからナオは自分らしさを忘れるなよ」

後半で扉が閉まった。

やさしい音は途切れた……。

しかし、彼の唇を読んでいた尚美には関係なく、最後までその言葉は聞き取る事ができた。

尚美は閉ざされたガラス窓に向って何度も頷いた。

動き出す車体を追いかけながら頷く。

圭吾が手を振った。

尚美も手を振り返す。

泣き出しそうな自分の顔が、ガラスにキラリと映り込んで慌てて笑顔を作った。

新幹線の加速力は、あつと言う間に二人を隔てる。

圭吾の立つ窓は、直ぐに尚美の視界から遠ざかって連なる車両の列に飲み込まれた。

新幹線の先頭車両は優美な姿なのに、遠ざかる最後尾は悲しい顔なんだと思った。

【60】窓越し（後書き）

不定期掲載になってしまいました。

お読み頂き有難う御座います。

このまま、ラストまで宜しくお願いいたします。



## 【61】やさしい音が聴こえる

午前中の雷雨は何処かへ消えて、まだ乾ききらないアスファルトの水溜りを、炎天の陽射しが熱く照らしている。

道端の眩しさに目を細めると、水溜りの光が消えて蒼旻<sup>あおぞら</sup>天が映りこんでいた。

僕は腕を叩かれて振り返る。

僕よりも頭ひとつ背の低い彼女を見下ろした。

『映画、何時からだっけ？』

彼女は小さな腕時計を覗くと再び僕を見上げた。

「二時半のはずだよ。充分間に合うだろ」

月極駐車場に停めた小さな車に乗り込む。

咽るほどに熱い車内をクーラー全開で冷やす。

彼女の甘い香氣<sup>かおり</sup>が、エアコンの風に吹かれて車内に広がった。

僕たちが出逢ってまる一年が経つ。

ちゃんと付き合いだしたのが何時頃からなのか、何処へんから付き合うという交流に変わったのかは忘れてしまった。と、他の人には言っ。

でも、本当は覚えている。

真夏の図書館で彼女と言葉を交わしてから、二ヶ月ほど過ぎていた。

爽籟<sup>そうつい</sup>がほんの少し冷たく感じ始めたけれど、まだ陽射しの強い日曜日だった。

イオンの屋上の隅で、僕らは缶ジュースを片手に縁石に腰掛けていた。

この頃、僕らはよくそこでたわいもない話をした。

風に流れる遠くの雲に西陽が淡く輝くのを見ていたら、僕はふと以前に出逢った男を思い出した。

トイザらスで出逢い、つかの間の言葉を交わした同世代の彼が、僕はずっと気になっていた。

それはナオが時折語る、想い出話の中にいた。

聴覚に障害を持つ妹を支える彼は、ナオが語る、心を通い合わせたであろう少年そのものだった事に気付いた。

どうして今まで気付かなかったのだろう。

何かが心の隅に引っ掛かって、でもそれに考えを巡らす事が出来なかった。

「ナオ……」

何時の頃からか、僕が声を発したとき彼女の肩に手を触れなくてもナオは僕を振り向くようになった。

まるで僕の声だけは、聞き分けられるかのようだ。

平凡な環境下で育った僕とは違って、ナオの日常は日々困惑にまみれていた。

彼女の話しは何でも聞けた。

普通、過去の親しい異性友達の話しなんて聞きたくは無いはずだけど、ナオの過去は何でも聞き入れた。

その何処かに、彼女と接するヒントが隠されているような気がしたから……。

「前に聞いた、館内圭吾……だっけ」

彼女はきよとした瞳で、僕を見つめた。

「俺、逢ってるよ。たぶん」

きよとした丸い瞳は、黒く光を発する。

『何時？ どこで？』

彼女の小さな手が、僕の腕に触れた。

「ナオと話す、少し前。夏期講習の前……だったかな」

僕はトイレからスでであった兄妹の話をした。

ナオは懐かしそうに目を細めて僕の唇を読む。

気のせいかもしれないけれど、その瞳は僅かに潤んでいるようにも見えた。

虹彩に西陽が吸い込まれる。

でも彼女は小さく首を振った。黒髪が左右に揺れる。

『うそ……』

「いや、たぶんそうだよ」

彼女は息を小さく吐く『そんなはずないわ』

「どうして？」

「だって……」彼女は小さく声をだした。

とても小さくて、微かに聞き取れる声だった。

大きなワゴン車がゆっくりと後ろを通り過ぎてゆく。

彼女はゆっくりと瞬きをして僕を見つめると、両手をゆっくりと動かす。

『圭吾は、去年亡くなったのよ』

僕は一瞬彼女の言葉を読み違えたと思った。

思わず手話で復唱する……『亡くなった？』

背中に悪寒が走った。

脊椎が痺れるほどの、一瞬で激しい悪寒だ。

腕の産毛が、サワサワと逆立つのを感じた。

「亡くなったって？」

『交通事故で、亡くなったの。義母が、おかあさん一月くらい経った頃だけど、連絡をくれて……それで、知ったの』

「そうなんだ……」

僕は彼女から視線をそらして、停滞する雲を見上げた。

違う、あれは圭吾だ。

何故だか、僕には確信があった。  
理屈なんて解らない。

解らないけれど、僕が逢った彼は、間違いなく館内圭吾……だ。  
だって、妹も一緒だったじゃないか。

そんな理由は、何の意味もない事かもしれないけれど……。

それとも彼は、今でも聴覚の不自由な妹の傍で、彼女を見守っているのだろうか。

一直線に伸びる飛行機雲が、オレンジ色の細い帯に焼けていた。

「逢いたい？」僕は蒼穹<sup>そら</sup>を見上げたまま言った。

ナオは返事をしなかった。

その代わりに、僕の手の甲にそっと指を乗せる。

人差し指と中指を揃えてゆっくりと円を描いた。

僕はそれが手話のひとつだと気付くのに、数テンポ遅れて彼女の顔を見つめる。

「やさしい、声は、聴こえるから」

抑揚はしっかりして、少しもおかしくなんて無い。

屋上から見える遠くの山脈に、紅みを増した太陽が落ちかけていた。

雲は西側に面した部分だけがオレンジ色に焼けて、蒼穹<sup>そら</sup>は薄い藍色に変わり始めている。

「やさしい声？」その言葉に聞き覚えがある。

圭吾が僕との別れ際に言ったあの言葉の意味は、ここにあったのだ。

やさしい音を、彼女は聞き分ける事が出来る。

それは音の波長なのか雰囲気なのか、それとも他に感じる何かなのか。

健全者の僕には……判らない。

不自由なくコミュニケーションを取れる異性は、他にいくらかでも

いるのに、僕は彼女に惹かれてしまった。

しかし、うわべの馴れ合いを通り越して内面で通う何かが、僕とナオにはあるのだ。

密度の濃い精神の疎通を、僕たちは交わしているのかもしれない。今は遠いあの頃、圭吾とナオも同じ疎通をはたしていたのだろう。それは他の誰にも理解できない何処か蜜で、脳髓を頬かに刺激して心地いい。

僕は彼女の手の甲に指を乗せて、丸く円を描く。

好きなもの……好きなこと。を形容する手話。それは人を好きな時も、同じ形容を使う。

彼女は自分の手の甲は見ずに、僕だけを見つめていた。

西陽が彼女の黒い瞳に滲んで溶けてゆく。

ゆっくりとひとつ、瞬きをした。

僕の指先を、手の甲を通して心で感じ、読み取っているようでもあった。

風が僕たちを包むように通り過ぎると、彼女の頬に黒髪がそよいだ。

オレンジ色の飛行機雲は、音もなく雲の波間に吸い込まれてゆく。僕は彼女の頬にかかった柔らかな黒髪を、指でそつとすくってみた。

暮色にたたずむふたりの長い影が、ゆっくりと静かに重なった。

指をそつと絡めた。

細い指が僕の手の甲を小さく包む。

彼女の頬を伝った小さな雫がひとつ、ぽたりと零れ落ちた。

END

【61】やさしい音が聴こえる（後書き）

最後までお読み頂き有難う御座いました。

連載ペーが落ちたにも関わらず、最後までお付き合いいただけただけ皆様に感謝いたします。

有難う御座いました（^^

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5670f/>

---

やさしい音が聴こえる

2010年10月8日12時48分発行